明治廿九年十一月十日發行

貨幣錢貝研究會報告

第一號

目錄

元和手
二水水背馬文
志頭摩手
狹穿
淺草支流錢
信州松本錢
背文字錢

貴足寶好泉雲花考考寶進春風消屬青
眞　丹泉在柏林古泉泉而布亭泉玉貨

学者精堂國學塔堂堂合堂著堂堂堂

非賣品

報告

入會者（入會順）

足巷　長井筆子
扇玉堂　笹川賢八
清泉堂　高野末吉
寶泉舍　京野緣太郎
好泉堂　鷲田信詮
考泉堂　横井仲定
振海堂　小笠原貞藏
共古齋　蛭海與一
咸享堂　山中笑
泉在堂　村上忠太郎
青貨堂　堀田秀雄
方圓堂　貫井銀次郎
松堂　水野彌兵衞
糞明舍　原宏平
樂眞亭　村松久太郎
　藤田巳之助

○楊摸に就ての記事

○元和手は存在稀なる錢にして今日知れ渡り居るもの僅かに三四品に過ぎず

○寶丹樓より出品せられし志頭摩手は明治泉譜の原品なりといふ

○狹穿は二種あり共に存在多からず昔は此錢を淺草支流錢となせしも近來志頭摩手の一種と見做すもの多し

○泉在園より出品せられし淺草支流錢は近來駿州足洗錢の一種と見做す泉家多し

○考古堂より出品せられし十字極印の二ッある錢は存在いと稀れなるものなり

○元文佐渡の無背錢は錢錢なりといふ宣しく研究すべきものなり

○之呂女大字錢は存在稀れなる錢なり今回寶泉舍より出品せられしものは故清盧齊翁の遺愛品なりと聞く近來此錢は鉄錢の種ならんといふ說起れり

○無文佐渡錢は安永佐渡錢と正しく同座のものなりといふ此安永佐渡錢は東京古泉會報告紙上にもありし如く佐渡志に依れば明和八年二月より天明元年二月に至る一年間の鑄錢なるべし

○咸享堂より報告發行の祝賀として送られたる大黒錢は背の製作より考るときは元文紀州の鉄錢と同座のものなるべしとて寬延尾の揚摸も添ひられたり

○寬永錢の位に就て

一文銅錢を金一兩に替るには六千枚乃至八千枚、同銅錢は七千枚乃至一万枚、當四銅錢と千五百枚乃至二千枚、同鉄錢は千八百枚乃至二千五百枚なりといふ

○四寶錢に就て　進而堂

幹

四寶錢といへる錢は一說に元祿四年武藏の國龜戸村に於て鑄ると臆原貞幹は不知品となせり

其四寶といへる名稱はもとより俗稱にして古泉家のいひ始めしのもにはあらざるべし貞幹も俗曰四寶錢といへりされど何によりて其名の來りたるものなるや古來より未だ其解說あるをえ聞かず芳川維堅は延寶四年、寶永四年、寶曆三年と貞幹の錢譜に附記して暗に年號の寶字をとりたるものならんとの想像を起せしやうなれども寶字の用ゐたる年號は寬永以後前記の三に止まるが故に年號の寶字を取りたる名にはあらざるべし疑らくは四寶錢といへる家の參考に供する所の名稱からんか今聊か茲に其臆說をのべて寬永錢彼の四寶錢とは寬永元年荻原重秀の改鑄說に從ひて元祿銀を改鑄して寶永銀即ち一寶銀となし寶永七年に一寶銀を改鑄して二寶銀二寶銀を改めて三寶銀となし正德元年にまた改鑄して四寶銀となす斯く改鑄するや一回は一回より劣り四寶銀に至りては遂に貨幣を下して銀十二に銅八十八となすに至れり固と重秀の改鑄說を唱ふる眞に財用を足さんとするの意にあらずして己れを利せんが爲なりしかあれば新井君美の非改鑄說いでゝ己れの改鑄說行れざるも猶壇まゝに其部下に命して改鑄せりかゝる重秀の利欲偏り銀貨に止まらずして銀貨の改鑄する毎に錢貨も亦擅まゝに改鑄せしやえしるべからず今日世人の四寶錢と稱ふる錢も漸次圓形減縮し銅質粗惡且非薄となるの點より推究するときば或は事實に近からんかされば錢貨も銀貨の如く一寶二寶の名あるべきものなるに絕えて聞かざるは三寶銀の時までは唯だ銀貨に驚愕して錢貨に注意するに至らざりしも四寶銀の時に至りて銀貨と等しく錢貨も著しく粗惡薄少となりしに始て心つき銀貨の如く四寶錢四寶錢といひのゝしり渡り遂に其名の殘りたるものにやあらん後日また四寶錢の撰定につきて述ることあるべし

○寬永錢の撰出高　進而堂

大略金百圓ほどの一厘錢中より撰出せし重ある錢の名稱及其數を記して寬永錢家の參考に供す

二水永　八、
背三字　二、背星文　四、同無背文　一、
縮字　一、
淺草錢　一九一、
志頭摩手　一八八、（壹圓に付一、八八の割）
種錢　二、外劃　一一、小永　二、
接廓　四、白銅　二、劃点　九、
異永　一、狹穿　一、雜　一五五、
背星文無背種　二、　正廓種　一、
奈良錢　二二、（拾圓に付二、二の劃）
黃銅　二、平永　二、寬短尾　一、
雜　一七、
（未完）

○寬永錢の異品　春布老

面に寛永通寶背に元六錢の三字篆隷混交奇異の書體をなし大さ小錢に培するものより其質眞鍮の如く古色も惡しからず製作は一種特異にして他の寛永錢に類を求る能はず、和漢泉彙に眞鍮元字錢を圖して「一錢三文の通用の願ひ叶はず試に鑄る」と云へり此錢の背文元の一字は六錢の二字に異なれば元文の年號に取り六錢とも即ち相當價額を紀したるものと覺ゆされど此錢が必ず眞鍮元字錢と同座の鑄造ありと云ふ確證ころ無けれども其銅質は極めて類似したるものあり左に圖するは友人馬嶋翁の所藏品なるが翁は過般相州に遊ひて種錢を見たることある由物語られたり

養眞亭

○寛永錢ノ研究ニ就テ所見ヲ述ブ　考古堂

今度寛永錢研究ニ熱心ナル榎本文城三上香哉ノ兩君ガ寛永錢研究會ヲ發起セラレ其報告ヲ發兌セラルヽニ際シ論說ヲ需メラレマシタカラ不才ヲ顧ミズ此盛擧ヲ慶ンデ聊カ寛永錢研究ニ就テノ既往ノ經驗及將來ノ希望ヲ述テ會員諸君ノ注意ヲ促シ以テ祝辭ニ代ルト致マス

凡ソ一事物ヲ研究スルニハ疎ヨリ密ニ入リ巨ヨリ細ニ到ルノガ順序デアリマスシ又一事物ノ其分類中ノ一種ノモノニ就テ專門ノ研究ヲ爲スニハ其功績ハ甚ダ大ナルモノデアリマス即チ古錢俗ニ所謂變リ錢ナル名稱ノ下ニハ種々ナル種類ノ錢ガ含マレテアリマスガ其種類中ノ一種ナル寛永錢ヲ限テ細密ノ事柄或ハ錢体ノ異リ等ヲ研究スルノハ其全体ナル古錢ノ研究ニ對シテ大ナル功績ヲ與ヘマス榎本三上ノ兩君モ是等ノ意ニ基レテ專門ニ研究スル事ヲ發起セラレタルノデアリマセウト考ヘマス

抑モ我々ガ寛永錢ノ研究ニ志ス初メハ如何ナル点ヨリ來リタルカヲ尋ヌレバ其始メ所謂變リ錢ヲ獲ンガ爲メ現今補助貨幣トシテ通行セル舊銅錢ヲ撰擇スルニアレモ變錢ハ獲ルコト稀ナレバ遂ニ舊銅錢ヲ組織スル寛永錢ノ手替リヲ捜索スルニ起因スルノデ是ハ十人ガ九人マデハ此運命ニ外レルコトハアリマセン却說此事柄ハ甚ダ有益ナコトデ第一寛永錢存在ノ多少ガ知ルコトガ出來又地方ニ因リテ撰擇セラルヽモノヽ種類ニ多少ノ別アル事ナドハ不知品ヲシテ或一地方ヨリ多ク撰擇スルヲ以テ其地ノ鑄錢タルコトヲ知レル如キハ全ク通用錢ヲ撰擇シテ得ルノ結果デアリマス此故ニ地方ノ會員諸君ニ向テ此等ノ必要ナル調査ヲ爲サレタル結果ノ報道ヲ希望致シマス

是迄ノ古錢家（重ニ月且衆評泉譜時代ヲ指ス）ノ寛永錢ノ集方ヲ見聞スルニ重ニ種錢ヲ集メテ通用錢ハ度外視サレテ居リマシタガ愛玩的ト他ノ特別ナル事情ヲ除クノ外事物ヲ研究スルノ点ヨリ謂ヘバ大ナル間違カト考ヘマス

何トナレバ種錢ハ機械的ノモノニシテ通用錢ハ實地的ノモノデアリマスカラ先ツ通用錢ヨリ始メ然シテ後種錢ノ研究ニ移ルノガ至當ナル順序ト思ヒマス然シナガラ寛永ヲ歷史的ニ研究スレバ種錢ノ蒐集ハ左程ノ必要ヲ感セヌコトデアリマス

（未完）

○寛永錢論

花林塔主人

今ヤ予ハ本號ヨリ寛永泉ニ就テ我ガ思フガマヽノ說ヲ論述セント欲スト雖モ劈頭一言辨ヲ置カザルベカラザルヿアリ抑茲ニ論ズル所ハ皆ナ我ガ一家ノ言ニシテ事歷ヲ探究シ傍證ヲ引用シ事跡ヲ訪ヒ証差ヲ尋ヌル等ノ正式的ニ據ラズシテアル時ハ事實ヲ重クシアル時ハ文書ヲ先ニシアル場合ニハ有名ナル事歷ナモ擧ケズアル場合ニハ牽強附會シテモ我ガ論ノ都合ノ好キ樣ニ說クナレバ讀者ハ須ク其ノ心シテ見ルベシ娓々數千言ヲ列ルモ煎ジ詰レバ唯我ガ一家ノ言ノミナリ決シテ諸君チシテ我ガ說ニ從ハセシムル權利ナキ代リニ諸君ガ論難較擊セラルヽモ滿足ナル答辨ヲ能フル義理モナキナリ

次ニ謝シ置ントスルヿアリ本論ニ就テハ古今大家ノ說ナリモ我ガ論ニ都合ワルク攗着スルモノハ皆一筆ニ抹殺シ去テ少シモ假借セズ又我ガ說ニ都合ヨキモノハサモナキヿヲモ大袈裟ニ述立ツベシ古ノ人ハイザ今ノ大家諸君予ノ暴論ニ向テ怒ル勿レ之レ狂人ノ囈語モ啻ナラザルモノナレバ寧ロ一笑ニ附シ去レ

尙述ベ置タキヿアリ我ガ所說ノ万一古今泉家ノ所論ト大同小異カ或ハ符合スルヿアランモ計リ知ルベカラズコハ其ノ錢ニ付テノ鑑識ガ知ラズ不識ノ間ニ同一轍ニ出ルモノナレバ議論ノ暗合トシテ恕サレタシ予ハ決シテ他人ノ說ヲ換骨脫體シテ我物顏スル如キモノニ非ルツモリナレド寛永泉ナル小ナル局部ヲ觀察スルナレバ區域ノ狹キ或ハ先人既ニ說キ盡シタル所ノモノヲ今ノカシクナラベタツルヿアルヤモ期シガタシ以上ノ三項ハ第一ニ心ニ懸ルヿナレバ茲ニ陳謝シ置ク

抑予ガ論セント欲スル所ノ要旨ハ舊說破壞ト新說創造トノ二ニアリ茲ニ予ガカヽル暴論ヲ出サント欲セシ所以ノモノハ又據テ起レル原因アルニ基ス夫レ泉ノ研究セラルベキモノヽ中ニ就テ最モ研究ヲ要スベキ如何ホト研究シテモ盡ル期ヲ知ラザルモノハ蓋シ我ガ寛永泉カ然ルニ古來ノ泉家ハ寛永泉ニ如何ナル觀念ヲ以テ對セシカ彼等ハ千年二千年ナル藐焉的年度ノ古ルキヲ貴ビシ性質アリ彼等ノ手ヲ藉リテ作ラレタル泉譜ハ泉ノ傍ニ其ノ年ニ至ルノ年數ヲ記シテ或ハ千百年或ハ九百年ナントノ文字ヲ羅列シアルヲ其時代ニ於テハ年數ノ古ルキハ泉ノ貴價ニ一ノ勢力アリシナリ按ズ如キ文字アルモノニシテスラ尙ホ年數ノ新シキヲ云テ乾元以後ヲ略セリ此ノ年數崇拜的者流ノ中ニ往々寛永錢ヲ玩弄（前ノ貴價ト云シモ茲ニ玩弄ト書セシモ意アリテナリ）シタルモノアリシハ蓋シ當時ノ篤志者ナリサハイヘ如何ニセン彼等ガ單純ナルチヨン髷腦隨ニテハ到底コノ複雜極リナキ寛永泉ヲ研究スルヿ

ハ能ハザリシナリサレバ見ヨ今マ世ニ在ル所ノ寛永泉譜ヽ藤貞幹ガ纔カニ未定稿ナル一部ノ稿本ヲ捕ラヘ來ッテ尚友維堅ノ輩ガ纔ニ改竄シ或ハ蛇足ヲ加ヘタルモノヽミニシテ今日我々ガ見ルニ足ルベキト思フベキ貞幹自撰ノモノト思フベキ泉譜ハ一部モアラザルナ

最モ笑フベキハ古來ノ泉家ガ補助貨幣ナル小錢ニ對シテ本位貨幣ナル金銀貨ヨリ相應比較シテ立論シタルヿ更ニナキヿナリ予ハ彼等ヲ評シテ店借的小賣商人ト云ン何トナレバ生涯小錢ノミヲ捻テ黃白判金ヲ見ザリシモノナレバナリ

玆ニ舊說破壞論ヲ說ントスルニ方テ先ッ立論ノ方針ヲ定メ置カン

一歷史古記錄古文書等ニ歷然記載セラレタルモノ

二古老ノ口碑等ニ殘リシ事ガ事蹟ト事實ニ符合スルモノ

此ノ二者ニ向テハ流石ノ破壞論者モ口ヲ閉ザルベカラズ是等ニハ一句モ容喙セス予ガ破壞ヲ逞フセント欲スル所ノモノハ次項ニアリ

三古來泉家ニ定論ナクアルモノヽ不知品ニ入レアル人ハ某地所鑄トシタルモノ

之ヲ予ハ未定錢ト名ッケテ之ニ全力ヲ注ヲ粉碎的破壞ヲナサントス

四文書等ノ徵スヘキ者ナク一ノ據ルヘキ證左ナキ者之ニ向テハ大ニ創造的新說ヲ吐ントス然レ𪜈舊說破壞ニ次テ直ニ起ルベキハ新說創造ナレハ第三第四ノ二項ハ相關鍵スルモノナリ

彌々本論ニ入ラントス先ッ寬永錢全体ニ渉レルヿヨリ總論的ニ置ン

（未完）

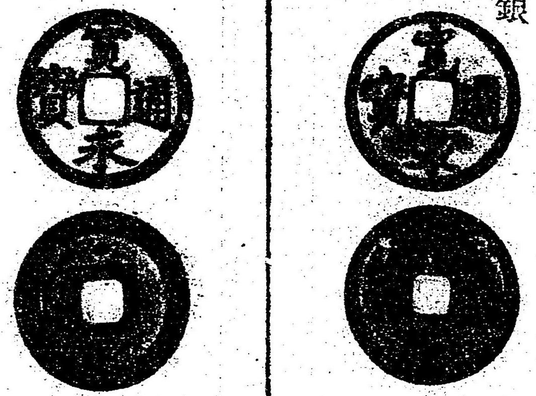
○寬永錢の一般に就て　寬永錢は寬永の初年より慶應年間に至る二百有餘年の鑄錢なるか故に其數極めて夥しく其種類の如きも實に五百有餘種の多きに居れりされは其事跡の明瞭ならざるものも從て多かりしなり寬政の昔し藤原良軒、源尙友、芳川維堅などの愛國士いで〳〵大にこれを研究せられしも寬永錢は愛玩上より觀るときは一二の欠点ありにしもあらざればにや以來度外視せられて其愛せらるゝの人も少なかりしが近く中川近禮龜田一恕の二氏舊て意を寬永錢に注がれ深く此錢の發達進歩を催せられたり爲めに寬永錢を愛するの人も日を追て增加し其知識も大に發達し來りて寬永錢家の意中も自ら改まり敢て錢の多少にのみ拘泥するものにはあらず假令存在夥多ありと雖も正用錢にして事跡の明かなるものは愛すべきものなりといふに至れりかゝる長足の進歩を來して遂に今日寬永錢研究會の成立を見るに至るいと喜悅のことゝうありける

附言　五日以後に刊着せる楊摸は次號の報告紙上に載することゝ改めたれば卷末の規則書熟讀せられんことを希望す

理事

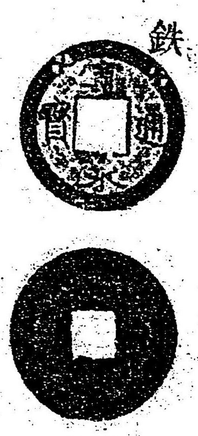
揚摸

銀



貳兩亨

貳兩　龍



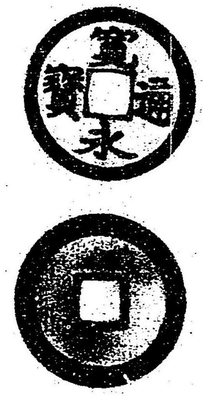
寛永通寶

寛永通寶

寛永通寶

寛永通寶

寛永通寶



寛永通寶

鉄錢

種

業柏居

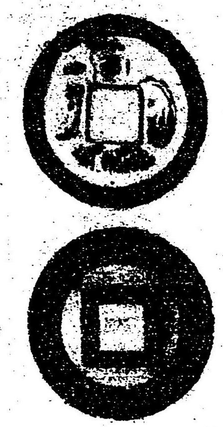
花林巷

秀古堂

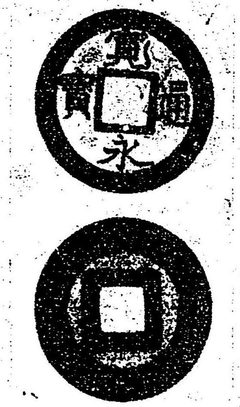
泉孜園

舟泉堂

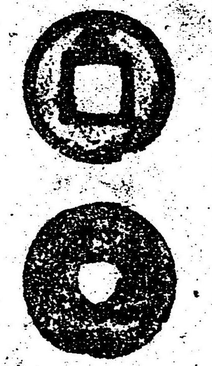
官兵樓



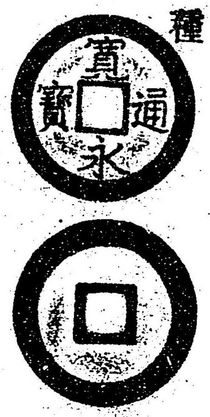
寶泉當



寶泉當



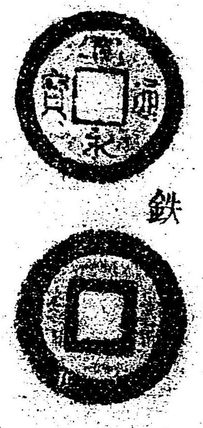
寶泉當



種

寶通永

寶通永



鉄

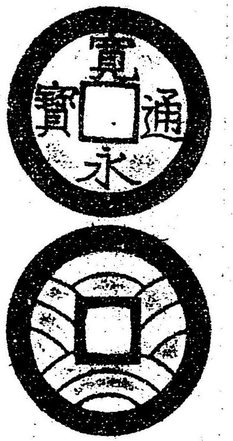
寶通永

寶泉當

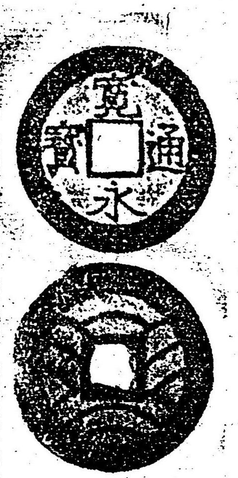
寶泉當

寶泉當

清泉尚



扇玉尚



青笛尚

寛永錢研究會規約

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月一回寛永錢研究會報告を發行す

一本會は寛永錢に關する總ての質問に應じ其事項は報告欄に掲載す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し事務所へ申込むべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むべし

一寛永錢に關する意見を會員に報告せんとする人は文字明瞭に記載し本會事務所に寄送せらるべし

一會員は毎月五日限り寛永錢標模（標摸用紙は印章なきもの）一品に付三十葉づゝ寄らるべし

但し五日以後に到着せる標摸は次回の報告に載す

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進興堂　榎本文四郎

花林堂　三上母子太郎

賛成者（イロハ順）

霞柏居	岡田村雄
考古堂	龜田一恕
春布庵	中川近禮
養眞亭	馬島杏雨
寶丹樓	守田寶丹

明治二十九年十二月十日發行

寬永錢研究會報告

第貳號

目錄

寬永奈良錢
元和手銅錢
明和仙臺錢種及鐵
不知年代岐種
小名木川鐵錢
明和伏見錢種
明和長崎錢種
二水永縮字
不知年代當四錢
七福神繪錢
之呂女中字
輪印十字鐵錢
寬永坂本錢種
背文字錢背穿下星
志頭摩手
元文紀州廣穿
太平手
寬永沓谷錢及打製寬永錢
淺草支流錢良如及冝如手

足袋考　清扇春寶鐚青寶方穴考　秋風亭堂
眞泉海泉玉布丹柏貨泉古　圓堂堂堂堂堂堂堂
振泉泉泉泉泉泉泉泉泉　咸亨堂堂園堂園堂塔堂
好林堂堂堂堂堂堂堂堂　花泉堂堂堂堂堂堂堂
進而

非賣品

報告

入會者（入會順）

瑞雲　東京　近藤泰圓
秋風園　東京　吉村鳳嘯
泉亭　横濱　木村乙吉
樫園　埼玉　根岸武香
泉貨堂　西京　中島孝次郎
　　陸前　窓　豊三郎
馨泉亭　濱濱　杉山廣吉

楊摸叢談

○寛永奈良錢は加茂縣主藤木甲斐守敦直の書する所なりといふ

○元如手といへる名ハ書体の元和錢に似よるといふより起りしものにて貞幹の泉譜には此名見ねず恐くは近來の名命ならん

○振海堂より出品せられし錢は近頃通用錢中より撰出せしものなりといふ此錢鑄地年月未だ詳かならずと雖も銅色帶赤黄色にして銅質粗なるの点より考ふるときは明和以後の鐵錢ならの想像を起さしむ

○太平手は昔し隷賓といひし錢にて存在稀なるものあり

○面或は背に半輪の顯るゝものは通用錢中にはまゝあれども春布巷より送られたる長字錢の如く種錢にあるは珍しきものなり

○坂本の種錢はいと稀なり俗に之を呼子錢といふ

○十字輪印の二あるもの及之呂女中字の種は存在少し

○艮如といへる錢は良如上人の書する所ありといふより此名起れり一説に山城國伏見に於て鑄ると近頃門跡傳といふ書を見るに

良如上人名は光圓、西本願寺第六世の法主なり、慶長十七年十二月七日を以て生れ、寛永三年四月十九日得度して大僧正に任じ、寛永二年九月七日寂す

○考泉堂より送られたる千字錢の種錢にハ黄銅白銅の二種ありて白銅のものはいと稀なり其通用錢ある鐵錢はいみじう美麗あり

○沓谷錢は御用錢にてもあるか大形にして製作美なり

○明和伏見の種錢は安政淺草錢の種錢よりは少し

○小名本川の鉄錢ハ十字輪印の鉄錢よりは少し

○未定當四錢は奥州地方には多く存在するよし聞けり

○背文字錢の背穿下に星あるものは今始めて見る宜しく研究すべきものなり

○二水永縮字はみな製作精巧あらず

○青貨堂より造られたる繪錢は面文足尾錢にしていと美あり秋風園の志頭摩手も一寸得かたき美錢なり

○字津及中島廣穿の種錢は美麗なり

泉話

○近頃足竜うし四千枚の通用錢中に存在せる背文字錢の數を計算せしに二百七十一枚ありしといふされば壹圓に付六七、七五の割合なり

○元和手の銅錢は至て稀なるものにて先年丁抹國「ぶらんせん」氏精美のものを持歸れりといふ伊勢の養源舍にも一品ありとは聞けど未だ其實物を見ざるが故に製作佳なるや否や詳かならず

○嘗て加州藩にも錢座ありしといひ傳る人あるより果して然るやと前田家編輯方永山氏に書を寄せしところ直に取調の上明和年中願出人ありしも遂に許可かりしとて袖裏雜記てふもの丶寫を送られたり其厚意を謝す

○寛永錢を研究する手始には先づ百枚程の一厘錢を取寄て面文の同し者を積重ねつ丶種類別を致え見よ必す十種か廿種もあるべし其うちには唯一枚の物もあるべし其一枚の者のみを貯置き復た前の如く新しき錢もて幾回も操返したる後その貯置きたる錢を悉く取り出し又同種の者を積重ねつ丶類別せば又一枚の者のいで來るべしこれは稍や少き錢と知るべし如斯何回も操返し居るうちには自然と眼力鋭くなり類別の間違なき様にもなり錢の多少をも覺え珍品を見のがかすみとなき様にもなる斯く眼力の鋭くなりたる所にて泉譜に引合方を始むると容易に鑄地年月なぞを定ることを得る稍や鑄地年月を知る様に發達し來れば中々面白く止めること出來ぬ程の快樂いづるものなりもし閑あらば幸に試られよ尚ほ錢種のことなぞ種々御話あれども之は次號に讓る

寄書

○寛永錢の研究ニ付テ　（二）　考古堂

次ニ鉄錢ノ丁デアリマスガ鐵錢ハ製作粗惡ナルガ故度外視セラルヽ古泉家モアリマスガ事物ヲ研究スルノ精神ヨリ謂ヘバ其麁美ヲ論ズルハ抑モ末ノ話デアリマス一体鉄錢ハ明治四年限リ通行禁止トナリタルヲ以テ捜索スルニ困難ニシテ且腐蝕シ易キヲ以テ消滅スルノガ早クアリマスカラ今ノ内ニ勉テ材料ヲ蒐集メ研究ヲ遂ザレバ時ヲ經ルニ從テ困難ノ度ヲ増シマス故ニ一日モ早ク諸君ガ意ヲ鉄錢ニ注カレンコヲ希望致シマス

鑄切レヲ書体ノ異ナルモノトシ鑄溜ヲ星文ナド、爲スコハ初學者ニ往々見ル所デアリマスガ此等ノコハ重ニ一錢ニテ定メラルヽヨリ起ルコデ同品ヲ二品以上捜索セザレバ確カナル變リトハ謂ハレヌドモ又一概ニ左ノミ論スルコハ出來マセン或時ハ一品ニテモ變リトシ或時ハ數品ニテモ變リト爲サヾルコモアリマスガ此經驗談ハ少々長文ニ渉リマスカラ限リアル紙數ニハ述べ難キヲ以テ他日機ヲ得テ諸君ニ發表スルコト致シマショウ

此外鑄錢地ノ事ハ實地或ハ地圖ニ據テ研究シ又鑄錢ノ願人ガ如何ナル經歴ヲ有スルカヲ尋ネ又末路ノ錢ノ或モノガ江戸諸藩ノ邸ニ於テ鑄造セラレタルト謂フガ如キ傳聞等ヲ調査スルハ寛永錢研究ニハ一大眼目デアリマス尚ホ申殘リモアリマスガ他日ニ讓ルコトト致シマス爰ニ聊カ贅言ヲ述テ諸君ノ清聽ヲ煩シマシタ終ニ臨ンテ本會ノ隆盛

ランフ及ヒ會員諸君ノ健康ナランフヲ祈リマス（完）

○大黒錢ニ就テ　秋風園

貴會報告第一號を見るに咸亨堂氏より出品の眞向大黒繪錢は紀州の鐵錢と同座のものゝやらんとの御論あり如何にも背の形勢より見るときは至極面白き樣あれど總て寬永座の繪錢と覺しきものは背郭廣き樣見覺え居れりされば背の形勢よく似よるとて同座のものとおすは些と大早計のことにはわらざるやと思はるれど幼稚の秋風園あどにハ何れとも判し難し宜しく識者の敎を請ふ

○寬永錢の撰出高（二）　進而堂

淺草支流錢　四七、

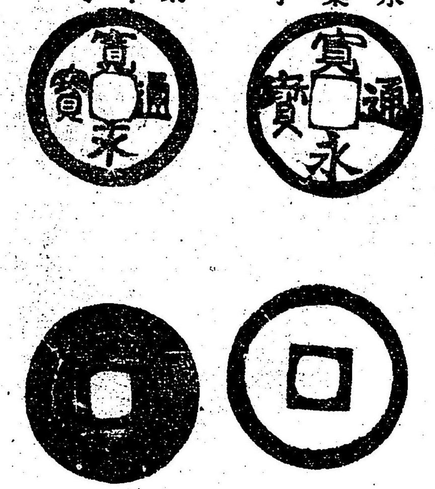
異寬小永　二、　長嘯子　一、　長嘯子手　三、
良如大形　一、　良如小形三、　進点永　二、
縮通濶永　二、　小通種　二、　降寶種　二、
戝寶種　一、　廣寬種　一、　進永種　二、
進永縮字種一、　廣永種　一、　長通　三、
一大点　二、　二大点　二、　三大点　三、
五大点　二、　笹手永　七、　白銅手大寶二、
接廊種　一、

（未完）

○永樂手及太平手に就て　進而堂

永樂手及太平手は昔より年代及鑄地の不明なるものとなし今に詳かあらざれども寬永通寶の面文を用ゐたる所より見れば寬永元年以後の鑄錢なることは疑ひなしかして寬永錢の鑄造は何地にて始めしものにやといふに今日まて知れ渡り居る事實にては水戸なり常陸志料にも「寬永二年水戸田町佐藤新助請鑄新錢充世用水戸侯許之乃詣大府又請樞可於是於水藩新鑄寬永錢是鑄寬永錢之始也」とあり左れば面文に寬永の文字を用ゐんと思ひ起せし始めは水戸にあるものゝ如く思はるゝより考るに此二錢の書體は固より太平永樂の二錢によりたるものなれば日本の近代錢中に類を求ること難けれども其銅貨は世人の水戸錢とへいる祥符元祐などの諸錢に類似するが故に強てこれを想像せば或は水戸の鑄錢にはわらざるか寬永泉錄に「以隸寶者及永樂手者二品爲二年水藩所鑄」とあり左に其圖を載す

永樂手　太平手



これに依て見るときは此二錢を寬永二年水戸に於て鑄る所の錢とおすも強ち空想にもあらざるべし又泉錄云「水戸市買某等五人各鑄于其家出所鑄大小不同而定爐干向鑄町鑄之」と此おと寬永何年頃おるや詳かならざれども此二錢は古賢もいはれし如く官鑄とは思はれざれば或は此五人の者の手にありしものにやあらんと思はるゝ姑く記して以て識者の叱りを待つ

○寬永錢論　（二）　花林塔主人

寬永泉ニハ不知品ト云事ハアルベカラザル論

附淺草支流ト云文字ノ解釋方

予ハ不知品ナル名目ハ我ガ寬永泉譜中ヨリ刮ヒ去ルベシト云フ論者ナリ「不知冶鑄所及冶鑄年月存俟後考」トハ之レ貞幹ガ我意ヲ挿マズシテ書シタル文字ナリ後考ヲ俟ツト貞幹ニ委托サレタル後世ノ泉家ニ彼ガ志ヲ紹デ先人未發ノ新事實ヲ公ニシタル者アリヤ纔ニ尙友維堅ノ二人アリト雖只品類ヲ增加シタル程ノ事ニテ此不知品ニ大變動ヲ與フル程ノ新發見モナキナリ此二人ノ外ハ皆唯藤譜盲從者ノミニシテ齒牙ニカクルニ足ラザルモノヽミ

夫レ貞幹ガ不知品ト書シタルハ孔子ノ所謂不知ヲ不知トシタルノ之レ知ナルモノナリ後世ノ泉家ノ不知品ナル題目ノ下ニ逃レテ恬然恥ザルモノハ抑彼等ガ無智ヲ露ハスモノナリ予ハ當代ニ至テ迄カヽル泉家ノ往々アルヲ悲ム他邦ノ事ハ知ラズ我國ニ於テハ公許ノ錢座定リアルモノナレバ鑄出サレタル錢ハ其ノ號レカノ錢座ニ屬セザルベカラザルナリ此理ヲ以テ予ハアラユル泉ヲ羅シ來テ其ノ銅貨泉質氣風ヨリ世ノ推シ移ル所ノ潮勢ヲ考ヘ山城ノ泉風アルモノハ山城ニ深川ノ清勢アルモノハ深川ニト其地ノ錢座ノ特性ナル長所ト短所トニ照合シ皆夫々ノ座ヘ附屬セシメ不知品ナル大海ノ底ヨリ救ヒ出サントス斯ノ如クニセバ不知品ナル名目ヲ削リ去ルコト易々タラン乎シカシテ後ニ於テモ事實ノ擧ルモノ有テ山城ニ一錢座ヲ增シ深川ニ二錢座ヲ增ス事アルモ容易ニ其座ニ充ルベキモノヲ見出シ得ベシ其時ニ方テ漫然タル不知品中ヨリ採ルト泉家ノ見識孰レゾヤ此空漠ナル不知品中ニ投入セラレタル泉ヨ若シ神アラバ何レニ同情ヲ表スゾ

次ニ其ノ本論ノ條ニ至ヲハ詳論センガ茲ニ前論ヲ承ケテ述置ントスルモノアリソハ藤譜ノ淺草支流ト云フ文ノ解釋方ナリ古來泉家ハ此ノ支流ト云文字ノ意味ヲ誤解シ居ルカノ觀アリ泉家ハ此ノ支流ナル文字ヲ不知品ト云ガ如クニ解說シ（解說ト云フヨリハ寧ロ思フ位ノ所カ）居ル如シ豈驚カザルヲ得シヤ是レ貞幹ノ文意ヲ能々玩味セザルノ致ス所ニシテ此ノ誤ヲ來シタル原文ヘ

右八十余品寬永十三年以後所鑄而鑄所（此ノ鑄所ノ二字ナキ一本モアリ）不可知皆淺草所鑄之支流也

（下署）

因ニ曰貞幹ガ寬永錢譜ノ文章ハ漢文ニアラズ鎌倉室町時代ノ文章ノ体ニ倣テ書シタルモノナレバ文法的ヨリ論ズルトハ無用ナリサレバ意味ニ

於テモ大ニ讀者ノ注意ヲ要スル所アルナリ

此文中面ヲ鑄ル所今知ルベカラズト書シタルヲ見テ汲理想ノ無文字者流ガ大早計ニモ不知品ト云フ義ト解釋シ居ルナラン何ンゾ然ランヤ予貞幹ノ意ノ在ル所ヲ察スルニ決シテ然ラズ請フ下ニ說ク所ヲ聞ケ

抑淺草錢座ノ規模ノ大ナルヤ橋場本爐ノミニハアルベカラズ或ハ深川カ或ハ本所カ其他何所ニカ造幣支局アリテ盛ンニ鑄造ナシタルモノナレバ「淺草所鑄之支流也」トハ書シタルナリ則チ淺草ノ支局ノ錢ナリト云ノ意ナリ支流トハ讀テ字ノ如シ橋場ナル本流ヨリ分レタル枝川ノ支局ノ鑄タル錢ナリト云ノ義ナリ貞幹ハ正直ナル男ナリ錢座ノ某地ニアルコヲ聞テ如何ナル錢ナルヤ知ラザルモノニハ「未見之」ト書シ置ケリ其ノ正直男ガ歷然ト「皆淺草所鑄之支流也」ト書シタルハ其ノ八十余品ヲ皆ナ淺草支爐錢ト確カメ得タレ𪜈其支爐ノ深川ニヤ本所ニヤ將タ又タ他國ニヤ其點迄ハ調査シ得ザリシヲ以テ漠然ト記シ置タルモノナリ最モ意ヲ汲テ貞幹ノ譜ヲ見ヨ貞幹ハ本爐ノ明カナラザルモノハ卷尾ヘ下シテ不知品ノ名稱ノ下ニ集メタレ𪜈此ノ支流ノ一類ハ松本奈良等諸國泉ノ後ヘニ置カズ又下卷不知品ノ中ニモ入レズ直ニ淺草本爐ノ次ニ出シタリ此間ノ消息ト予ノ論ズル所ト照應シ瞑目一番シマハヽ、諸君ハ皆ナ予ノ意ニ同ゼラルベシ　（未完）

謹告

今回左の物品を寄送せられたり有難く鳴謝す

○袖裏雜記抄　小柳下巷　永山近彭
○印章　秋風園　吉村鳳嘯
○錢座鳴見平藏書　方圓堂　水野彌兵衛

今回は印刷の都合により十一月三十日限り取纏ることゝあせり故に以後到着の楊模は次號に載す

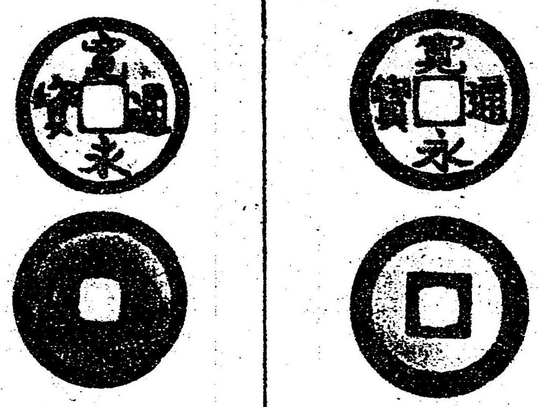
寬永錢に關する質問書等夥多寄送せられたれども紙面の都合により次號に掲ることゝあせり

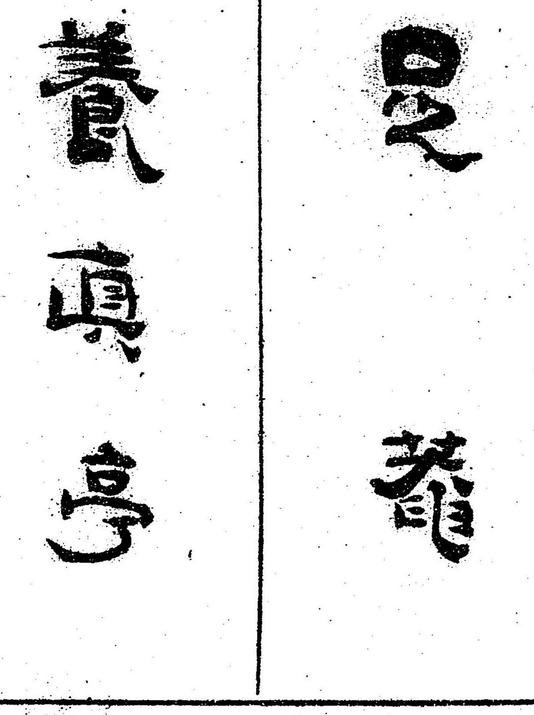
今回は印刷の都合により取り急ぎ到着順に楊摸を排列せり故に大に順席を乱せり次號よりは又前號の如く排列致したくにつき此際二回分の楊模（會員追々增加に付一品につき四十葉つゝ）御郵送を希ふ

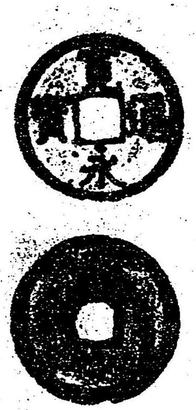
寬永錢は他の古錢と異なり刻圖の如きものに據りて說明するにあらざれば能はざること多し故に刻圖を掲けんとせらるゝ人は隨意申越さるべし但し刻圖用楊摸に刻料（一箇に付金拾五錢）を添て送らるべし

寬永錢研究會理事

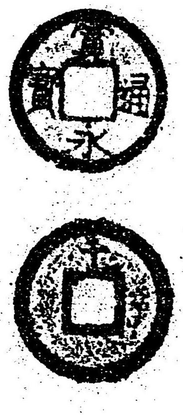
楊摸





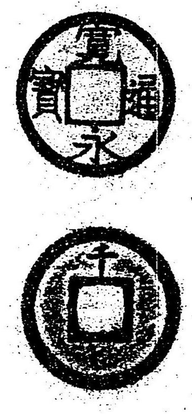


考泉尚



同

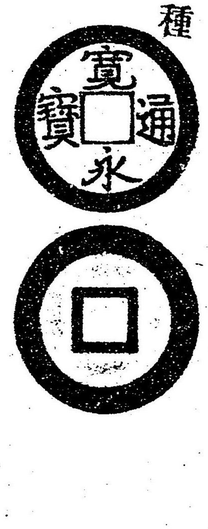
振海堂

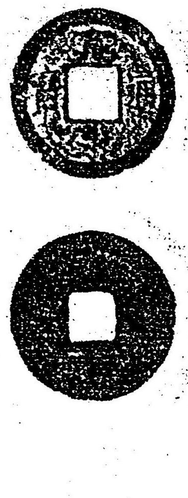


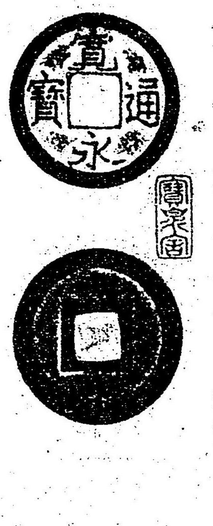
清泉尚

扇玉堂

春希蘿





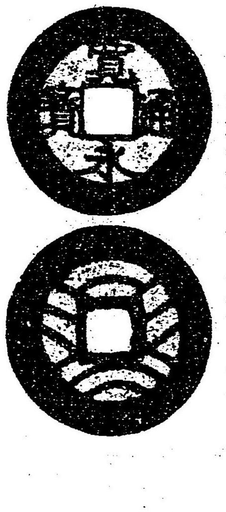


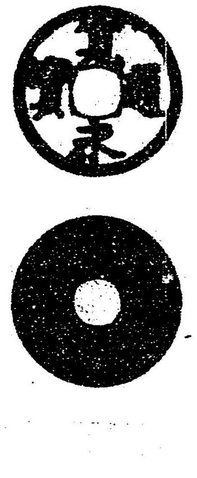
種

寶泉舍

考古堂

權園

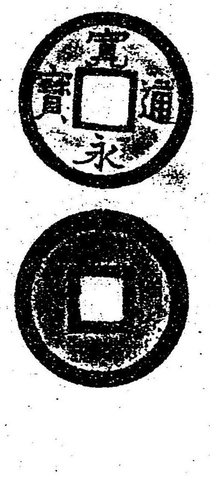




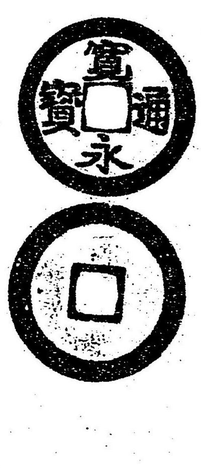
貴貨尚

業柏居

寶月樓

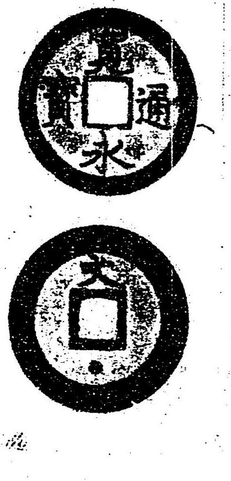


方圓堂



煉風園

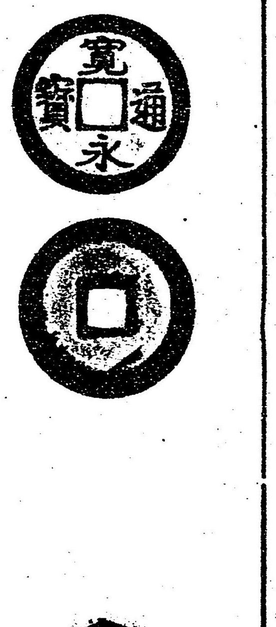
咸亨尚



好泉堂

花林荅

局



寛永錢研究會規約

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月一回寛永錢研究會報告を發行す

一本會は寛永錢に關する總ての質問に應じ其事項は報告に掲載す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し事務所へ申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納ひべし

一寛永錢に關する意見を會員に報告せんとする人は文字明瞭に記載し本會事務所に寄送せらるべし

一會員は毎月五日限り寛永錢模様（模様用紙は印章なきもの）一品に付三十葉づゝ送らるべし

但し五日以後に到着せる模様は次回の報告に載す

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

道面堂　榎本文四郎

花林堂　三上毋子太郎

賛成者（イロハ順）

鐙柏居	岡田村雄
考古堂	龜田一恕
春布庵	中川近禮
養眞亭	馬島杏雨
寶丹樓	守田寶丹

明治三十年一月十日發行

寛永錢研究會報告 第三號

目錄

○楊攄叢談
○泉話
安政當四錢、大寶、寛永錢の撰出高に就て　進而堂
寛永錢の撰出に就て　足菴
寛永錢の撰出に就て　泉亭
○寄書
イ及ノ字錢に就て　考泉堂
文錢ノ調査　青貨堂
寛永泉論(三)　花林堂
○問答
無文佐渡錢に就て問ふ　清泉堂
秋風園吉村君に答る　進而堂
元和手に就て問ふ　泉亭
○揭摸
二水永無星　足好
志頭手縮字　泉菴
異寛小永　考古堂
寛永水戸錢背十三　樫寶園
寛永松本錢斜寶　寶舍
寛永坂本錢背反郭　養明舍
寛永坂本鉄異書種　扇玉堂
島屋文字錢　青貨堂
島屋無背　泉亭
鳩屋無背　樹谷菴
島屋無脊別種　壽泉亭
享保相川錢種　養眞亭
元文加島錢縮永種　甕鯰堂
寛保高津錢種黃銅　千品館
寛保高津錢種白銅　咸亨堂
明和龜戸錢種　清泉堂
明和石巻錢鉄　樂眞亭
天明石巻錢種　方圓堂
安政淺草錢種　秋風園
難波御用錢　泉在園
打製寛永錢　發柏居
四寶鷹造錢　進而堂
明和龜戸當四錢種　振海菴
明和龜戸當四錢大形　春布菴
背ト肥字及無背種　花林塔
背イ字錢種　考泉堂
背ノ字錢痩字鉄　寶丹樓

非賣品

報告

入會者　入會順

實水軒　東京　新井七三郎
長壽堂備後　高橋圭助
鼈鯰堂　東京　新井鼈九
貢泉樓　東京　長井弘
樹谷巷　東京　淺海太郎次
千品館　埼玉　植田紋次

謹て新禧を賀し併て會員諸君の健康を祈る

花林塔　三上毋子太郎
進而堂　榎本文四郎

楊摸叢談

○二水永無星は背に星わる二水永よりは存在少なし
○志頭摩手縮字は貞幹も志頭手の一種となせり近時は肥永の小字と見做す泉家もあり
○異寛小永は淺草支流錢の一にして存在少し近時大通と命名する泉家もあり
○背十三字錢は寛永十三年水戸に於て鑄る所の錢にしてこれまた存在少なし
○松本斜實は或は降實或と短實おど命名する錢家もあり
今みる所僅かに六品に過ざれども實際かく少なき錢にもあらざるべし
○坂本錢は楊摸上著しく背反郭には見えざれども實品は背反郭にして銅貨坂本小字のものに酷似す今始めて見る宜しく研究すべきものあり同異書の種錢は存在少し
○島屋文字錢は近時青貨堂氏の撰出せしものありといふ此錢は存在多きもの〻樣思へるれど全く少なき錢なり同無背錢も存在多きものへはあらず、同別種は昔し丸屋替りといへしものなれども銅貨製作文字等により近時は島屋無背の別種とおす今見る所僅かに六品に過ぎず
○享保相川錢は銅質帶白黃色にして大形なり今見る二品に過ぎず未だ此通用錢を見ず
○加島縮永、高津黃銅及白銅、明和龜戸錢の種は各々美錢あり樂眞亭の石卷鐵錢は背異樣なり
○天明石卷錢の種は明和石卷小形の種錢より少なし
○安政淺草の種は存在多し菊田清綠、氏藏の貞幹寛永泉譜附錄によれば淺草錢にあらずして馬喰町の鑄錢あり何人の筆にかりし附錄か詳かならざれども今其原文を揚げて寛永泉家の參考に供せ

安政元年江戸馬飼町所鑄老中松平右近將監裏請幕府而水戸鄉士小澤九郎兵衛鑄之

○難波御用錢は一說に享保十二年六月攝津國難波村に於て鑄ると大小數種あり又新井白の書る所ありといふ說あり

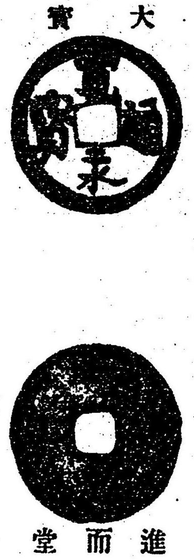
○打製寛永錢は貞幹の寛永錢譜に舛工所造印記錢也と面文數種あり此種のものは存在少なし
○四實鷹道錢は正錢の種よりやゝ形小く厚く通用錢よりは大く厚し銅質は帶白黃色に(正錢の種は正德佐渡錢に似て赤し)して面文大半陰起すれども(正種錢は寛足陰起するのみ)誠によく似よれり故に銅質面文等いと細かに注視するにあらざれば判別なし難し如斯贋造品を多くは寛永堂の作なりといふされど詳かならず
○四當肥字の種錢は存在少なく俗に之を深種といふ
○春布巷の明和當四錢は大形にて存在少なし
○背ト字錢肥字の種は存在いと稀れなるものなり
○皆イ字錢の種は大小數種あり共に存在少なし
○背ノ字痩字の鉄錢は精美のものあし

泉話

○此程山中笑君より安政年間に地主へ下されしものありといふ寛永當四錢一品寄送せられたり誠に有難く其厚意を謝す其包紙に安政の二文字あり內に藏せらるゝ錢を見るに書体は安政淺草錢にして黃銅なり如何にも通用泉の觀ありて疑はしければ研究會議に附せしにあるは通用錢あるは種錢ならんとの說ありて確定せずもし此錢果して種錢なりせば論なけれども果して通用錢なりとせば安政年間淺草鑄る所の當四錢ハ鐵錢のみにあらずして銅錢も鑄しものなり今日まで知れ渡り居る事實にては銅錢を鑄しとゝなし故に本年の大會に附して十分の研究をなすとゝなせり　進而堂
○近頃足巷うし一萬枚の一厘錢中に存在せし重ある錢の數を算せしとて左表をしめされたり

日光錢	二五、	吉田錢	一二、	清水錢	一八、
坂本錢	八、	松本錢	八、	小永	一、
潤緣	八、	縮字	一、		

○大實といへる錢は黃銅にして多くは背夷漫面文一種異樣をなし實字特に大なるが故に此名起れり今日知れ渡り居るもの僅かに五六品に過ぎす左に其圖を載す



○泉亭うしの話に二千枚の一厘錢中より左の錢を撰出せりと

志頭摩手	三、	安政淺草稚錢	一、
明和木崎種錢	一、	神功開實	一、

○寛永錢の撰出高（三）進而堂

○龜戸錢	一二、		
背文錢別種	三、	正德種	一、
元文狹穿種	一、		
明和種	七、		

○松本錢　三、
細緻種　一、　同斜寫　二、（末完）

寄書

○イ字錢とノ字錢に付て　考泉堂

四當の背イ字錢とノ字錢とは慶應二年於伊勢國所鑄との説あれどもゐは只背文に就ての臆測のみにして毫も其証蹟なきを以て新撰寛永泉譜にも只或一説として載せたるのみあれば此二種は未だ不知年代錢たるの範圍を脫せざるべし然るに嘗て中島泉貨翁よりの來翰中にイは始め皆々伊勢藤堂か伊賀の上野と思へりノは安濃津のノからんかと思考せり然るにイノともに會津會藩鑄たる所との確説あり風山軒も會津と聞よし云々とありしを以書信に托し風山今井翁に問ひしに背イは未考ノは會津なるとは尚文主人會津藩江戸留主居役の手より贈りし毋錢に就て明確せり云々との答を得たり依てノ字錢は伊勢の所鑄にあらずして全く岩代會津の鑄造たるに疑ひなきが如くなるも其背文に付ては未不審なきを得ざるを以尚其確証を得んと欲し森總兵衛氏に照會せしかど遂に返信なきを以て未確定する能はず甚遺憾に思ひ居りしが幸ひして本會の開設に遇ふ企には本會より直に其事實を森氏に尋ね以ノ字錢は果して會津の鑄造なるや否の証蹟を得られんみとを乞ふイ字錢とノ字錢とはもとより同所の鑄造たるに疑ひなければ若しノ字錢會津を明確するに至らばイ字錢も共に明瞭せん

○文錢ノ調査　青貨堂

余ハ明治二十年頃ヨリ今年迄文錢ノミヲ貯蓄シ凡ソ金拾圓程ニ成レリ頃日是ヲ調査シ左ノ結果ヲ得タリ左表ノ内假リニ小字ト名ケシ者ハ面文耳白錢ニ似タル錢ニテ瘦字肥字ト共ニ面文ノ小異二三樣アルガ如シ今其ノ總數ヲ記シテ諸君ノ參考ニ供ス

瘦字	五七九七、	白銅	一、
肥字	三九五八、		
縮字	四〇、	種	一、
小字	二七、	種	一、
島屋	一、		

○寛永錢論　（二）　花林塔主人

御用錢ハ世ニ云フ甚大ナル錢ニハアヲズシテ通用錢中ニアルベキ論

寛永泉家ハ寛永錢特有ノ最大ナル泉ヲ見シ此ノ大ナル泉ヲ古來名付テ御用泉トイフ而ノ就レノ泉譜ニモ其ノ御用錢ト云フ義ノ解釋ナク又古來ノ泉家ニモ滿足ナル解說ヲ下シタルモノナキナリ舊來泉家ハ彼ガ甚大ナル泉形ヲ有スルヲ見テ唯之ニ眩セラレ何トモ註解ヲナス術モシラズ見ルモノモ唯驚テ止ムノミ豈舊來ノ泉家ノ愚漫ナルニ驚カザルベケンヤ

近藤守重自著ノ金銀圖錄中石州御公用銀博多御公用銀ノ條ニ解テ曰ク愚按ニ公用トハ尚今ノ御入用ト云ガ如シモト錢ノ事ヲ稱シタルヲ後ニ假テ銀ヲモ云シナリ（以下古文書ヲ引テ公用ト云文字ノ出所ヲ証シアリ）ト今此ノ御用錢ヲ論スルニ方テ守重ガ此論大ニ予ガ意ヲ得タリ夫レ公用モ御入用モ御用モ同意味ナリ御用ヲ御入用ト解シ見出シ彼甚大ナルモノハ之ヲ眼睛ニ映セシメス費途ノ明ラカナラザルモノハ皆ナ撰シテ採ラズ舊來御用泉ト稱シタル大錢ハ單ニ錢座ノ初鑄（許可ノ初鑄新年ノ初鑄）等ノ祝鑓錢ト見ナシ置ノミ此大錢ヲ社參ニ將軍自ラ賽錢箱ニ投シタリト云フ平民的思想ニ富タル古ヘノ泉家ノ百年忌ノ法事ニ其ノ大錢ヲ法事ノ御布施ニ將軍手ラ紙ニ捻リタマヒシト云ハシメザリシコトノ殘念サヨ

問答

○無文佐渡錢に就て伺ます　清泉堂

奇妙な打形が報告第一號に出ました夫れは明和佐渡錢の裏を表表を裏と見なされたもので御座ります之に就て理事の復本三上兩兄は夫れに無文佐渡錢といふ名を御付になり打形に就ての記事中尤も長文に記されてありますが私はチト不感服で御座りますから一寸三君に御質問申上ます、無文佐渡錢といふものは舊來の錢譜に載て居るもので御座りますか今度新に御撰定に成たもので御座りますか理事兩君が勝手に名付られた事でありますの無文佐渡錢とれッしやるが佐の字が見へますあれは御兩君には見へませんか但し無文の二字の間に面の一字が脫たので

ありますか夫ならば打形の方が上へ下々問違た事になる打形を見てから名を付たのあらさういふ間違は起らない筈で御座りますが全体佐渡の明和安永年間に鑄た錢は後に背文を面文とし面文を廢して背を表樣にすといふ樣な事が記錄にでも殘て居る事でありますか一体アヽいふ風に表のメチツヤで字のわからないものは裏を表にしてよいもので御座りますか面文見へずと雖も背にはなりますまい面文明かりとい へ共面にはなりますまいとから申は所謂理屈で理屈よりは實際の方がよいソコデ御尋申ますがアノ樣に背を面にまて錢を鑄た事が東洋諸邦に例のある事で御座りますか

答　無文佐渡錢なる命名ハ舊譜によりたるものにあらず面文の寛永通寶てふ文字なき故にかくは命名せり又背を面にして錢を鑄るといふことは勿論通用錢にあるべき事ならねども面文磨滅せし樣にもあらされば或は職工などの戲作なるやも知るべからず宜しく研究を遂けられたし

理事　述

○咸亨堂に代りて秋風園吉村君に答る　進而堂背郭似よるとて同座のものとおすはちと大早計にはあらざるやとの御叱りありたれども寛永泉の研究は悉く記錄等にのみよるといふことは至難中の至難のおとにてえ望み難し假令確實ある記錄等なきも製作銅質書体によりて定るの例はイ字錢とノ字錢を同所の鑄錢となし狹穿を志頭廣手の一種（第一號を見よ）と見做すが如し故に一点ありとも似よる所あれば想像を起すも可ありされど咸亨堂の想像も確乎たるものといひ難き宜しく研究を遂げられたし

元和手の銅錢に就て問ふ　泉亭

余嘗て進而堂氏寫本の寛永泉譜を一覽せしことあるしが元和手の銅錢は銅色黃濁製作精美とありたる樣覺ゑ居れり且知人丹羽氏の話にも製作の佳なるよし聲けり然るに今報告第一號の元和手銅錢模摸を見るに摸狀にては製作の佳なる樣にも見えざれども實物は如何なるものにや參考の爲め承り置たし

答　實物の銅色と帶赤黃よして製作は精美と賞讃する程にも見えざれどもまた決して不精のものにもあらず尙は十分研究のうへ答ることゝおすべし　進而堂

正誤

報告第二號に長崎種錢とあるは通用錢、門跡傳に寛永二年とあるは寛文二年、沓谷御用錢とあるは種錢、常陸志料に樞可とあるは報可の誤りにつき茲に訂正す

謹告

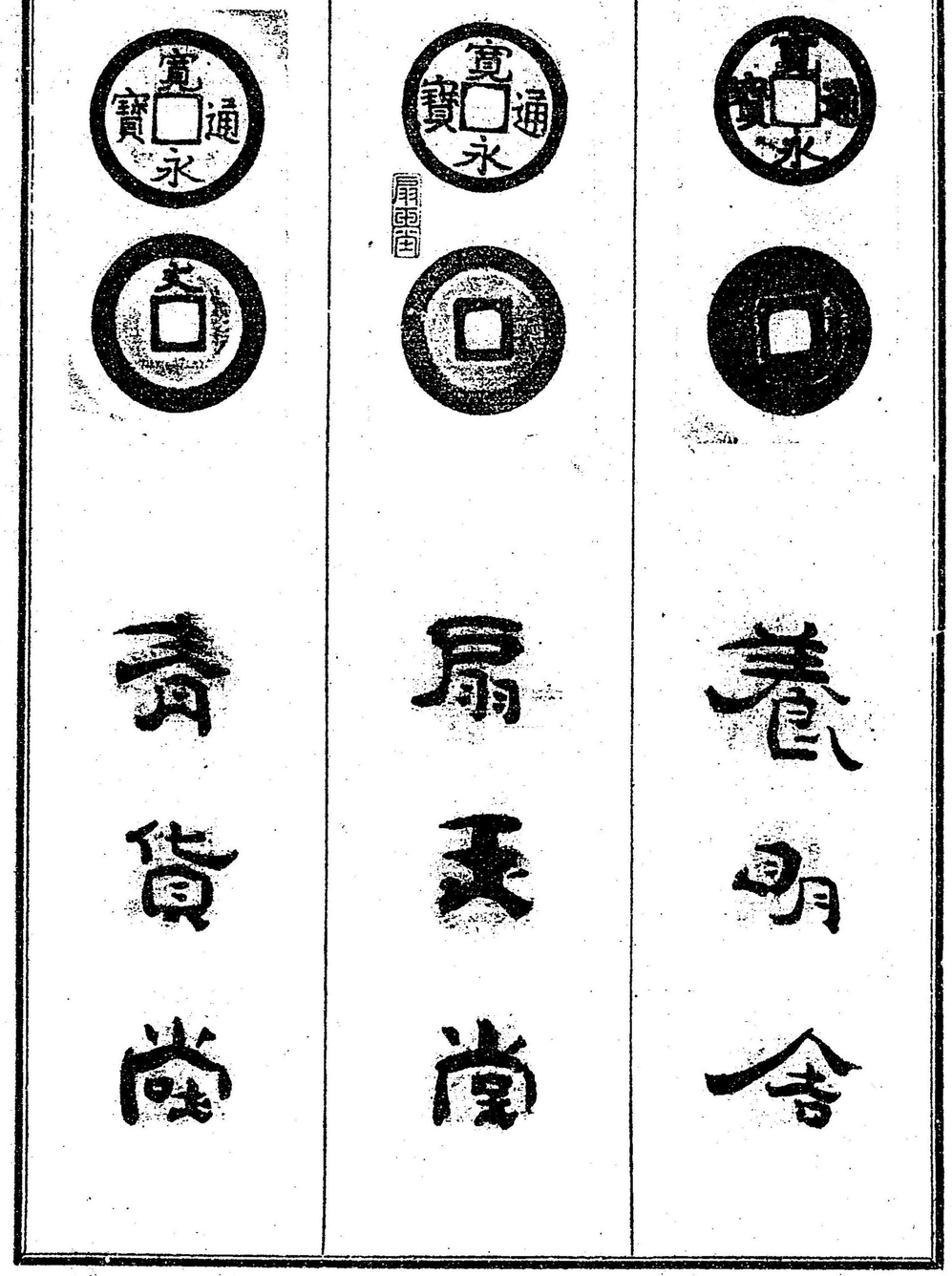
會員追々增加につき出品の模摸は四十葉づゝ御送付あらんことを希望す

模摸

好泉堂

考古堂

寶泉舍



養明舍

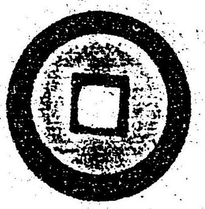
扇天堂

泰貨堂

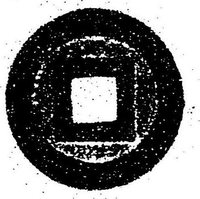
泉亭

千品館

壽泉亭

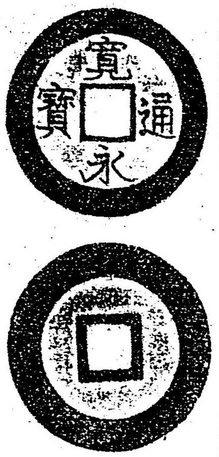


鮫尚

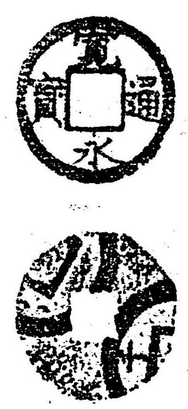


養真亭

樹谷莽

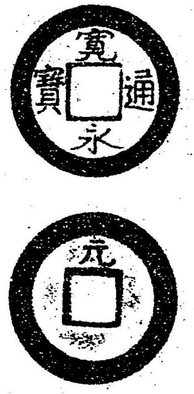


咸亨崗

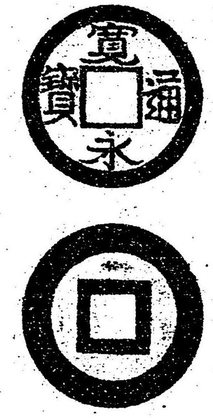


聚眞亭

清泉崗



方圓堂



煉風園

泉在園

業相居

遊而常

振海堂

春未蕃

苓林巷

周

考泉尚

窗月樓

寛永錢研究會規約

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月一回寛永錢研究會報告を發行す

一本會は寛永錢に關する總ての質問に應じ其事項は報告欄に掲載す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し事務所へ申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納ひべし

一寛永錢に關する意見を會員に報告せんとする人は文字明瞭に記載し本會事務所に寄送せらるべし

一會員は毎月五日限り寛永錢模摸（模摸用紙は印章なきもの）一品に付四十葉づゝ送らるべし

但し五日以後に到着せる模摸は次回の報告に載す

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進面堂　榎本文四郎

花林堂　三上毋子太郎

賛成者（イロハ順）

鹽柏居	岡田村雄		
考古堂	龜田一恕		
春布庵	中川近禮		
養眞亭	馬島杏雨		
寶丹樓	守田寶丹		

明治三十年二月十日發行

寛永錢研究會報告

第四號

目錄

○大會の規約
○楊摸叢談
○泉話
寛永錢の撰出に就て　青進進貨
坂本錢に就て　進而而堂
寶永錢の撰出高　養考泉舍　花林塔堂
○寄書
研究會の出品に就て　明治十年　春泉園
安政當四の銅錢に就て　花林亭
寛永泉論(四)　泉塔堂　布庵
○問答
佐渡錢の答に添ゆ　春泉園　布庵
○楊摸
太平手　櫃花林　梅在園　春泉堂
志頭摩手　泉貨坊　青孫樓　泉丹堂
狹穿　貨孫樓　寶而亭　泉堂
同　寛永淺草背星　寶而亭　泉堂
同正郭　進而亭　寶堂
長嘯子及長嘯子手　進而亭　寶堂
一大点　寶堂
五大点　好泉堂
背濶緣　振海堂
剔点永　秋風園
退永及大寶　泉亭
坂本錢異書　泉亭
背文字錢寄郭小字種　花塔堂
正德大字相川錢　繁林堂
享保京都種錢　樹谷亭
享保石笵錢　繁柏居
猿江錢中穿　滑泉堂
元文相川無背種錢　方圓堂
寛保一瀨背一字錢　蒼龍館
同　千品館
明和石笵鐵錢　翫玉堂
安政水戶鐵錢　考泉堂
萬延相川鐵錢　同明舍
細字短寶　養泉亭
短頸　寶樂堂
正德御用錢　寶古亭
打製寶永及永樂錢　考眞堂
秋宮印錢　春古堂
同　布亭
當四ノ字刮去錢　咸足堂

非賣品

報告

入會者
蒼龍館　和泉卜半丁達
瓢孫坊　伊勢山下秀

大會

○大會は來る四月十日本會事務所に於て開會す
○大會の出品は左の寛永錢に限る
一、眞贋未定の寛永錢
二、元祿京都及龜戸、享保京都、享保深川、元文鳥羽
元文伏見、元文藤澤、元文加島（細縁）の種錢
但實品に揷摸五十葉を添て來る三月三十一日迄
でに必ず送付せられたし總て實品の往復郵稅は
自辨のこと〳〵す
○大會の議題は
元祿京都及龜戸、享保京都、同深川、元文島羽、同伏
見、同藤澤、同加島（細縁）錢の區別
但出席せざる會員にして意見あるものは二月三十一
日までに原稿を送られたし

揷摸叢談

○太平手といへる名は宋の太平通寶に書体の似よるといふより起りしものにて貞幹の泉譜には此名は見えず
○狹穿は第一號に委しく述べおきごとく志頭摩手の一種にして此種は小字なり小字にまた二種あり何れも少なし
○志頭摩手の種錢は少なし俗に之を御藏錢といふ
○寛永淺草錢の背星錢は彫種にも普通の種錢にも正しきものあれば疑はしきものにはあらず星に大小種とあり
○寛永淺草錢正郭は元祿龜戸錢に面文近似して判別なし難きも正郭は青銅にして通及永の二点劉ねざるが故に細かには注視せば區別するを得べし
○長嘯子は淺草支流錢の一にして從四位少將若狹守小濱城主羽柴長嘯子勝俊の書する所ありといふより此名起れり存在いと稀なり長嘯子手は文字やゝ接郭すれども亦存在少し
○一大点は淺草支流錢の一にして通点特に大なるが故に此名起れりあるは三人点と命名するものもあれど穩當ならず五大点も淺草支流錢の一にしてある泉家は四大点と命名すれども寶永通の三点に均しく寶の二点も太なれば五大点いふところよからめ
○背濶縁錢は大形にして淺草支流錢の一也貞幹も八十餘品中に加へ居れりある泉家は此錢のごときものを御用錢ありといふ存在少なし
○剔点永は淺草支流錢中進永の一種にして進永中の稀なる錢なり
○退永は永字やゝ退去して日濶大なり、大寶は寶字特に大にして白銅なり貞幹は此種を淺草支流錢とおす
○寛永坂本異書錢は貞幹も坂本細種とおせり
○背文字錢の寄郭小字種錢は存在少なく通用錢とても存在多きものにはあらず
○正德大字相川錢は銅質帶赤黃色にして未だ其の通用錢を見ず
○享保京都種錢は帶赤黃色にして背細郭なり
○享保石巻マ頭通錢は銅色多くは赤かく黃銅は少なし
○元文猿江中穿の種錢は稍や存在少なく貞幹は四寶錢の一種となせり
○元文相川無背種錢は近時相川錢にはあらざるべしといふ說いでたり而白し
○寛保一之瀨濶字背一錢は鉄錢の種ならんと思ひきもいまだ其通用錢を見ず
○明和石巻背千字鉄錢ハ存在少なきものにあらず
○安政水戸背ト字鉄錢は今日知れ居るもの僅かに二品に過ぎず、萬延相川背佐字鉄錢ハある地方に在ては多く存在するよし聞けど京地よは稀なり
○細字短寶は貞幹も不知年代錢となせり此錢は通用錢も存在少なし
○短通の種錢ハ稀あるものにして貞幹も不知年代錢となせりされど銅質書体等により考ふるときは因州鳥取の鉄錢にはあらざるかの想像を起さしむ
○正德御用錢は存在稀なるものにして製作佳なり泉貨鑑には享保の初年に鑄るを
○打製の寛永錢と打製の永樂錢は銅賞製作書体の近似するより同所の製作ならんとて送られたりさもあるべし
○秋宮印錢は秋宮と左右に置たるものありまた上下に置たるもありて一樣ならず面文は背文字錢にあらざれば多くハ古寛永錢なり此秋宮なる文字の意味は未だ詳かならざれども或は神社佛閣などの上棟祝賀錢の類にはあらさるかされど今井風山軒翁の秋ハ安藝に通ずるといふ御說には服し難たし近ごろ春宮ある印錢を得て熟視するに秋宮の印と異なるおとなく依て考ふるに春宮、秋宮は同所のものあらんかは研究の上後日報告することあるべし
○當西イ字刮去錢は稀ある錢といふにもあらず今之を視るに全々背のイ字を刮去したるそのゝやうにて寛字多くハ壓平せられて判明せずされど未だ其の通用錢を見ざれば何の爲めに刮去せしものあるか詳あらずさりとてまた戲に刮去せしものとも見えず

泉話

○青貨堂うしろ話に金八圓ほどの一厘錢中より狹穿一、淺草支流錢種一、同接郭仰寶一、背文錢肥字種一、四寶錢大字一、同仰永種一、背足錢種一、座替清水錢一、を撰出せりとて揭摸を送られたり

○寬永錢は書体銅質輪郭などの變りを以て別種となすものなれば些細の点にも注意せねばならぬものにてかの坂本背反郭錢（第三號を見よ）の如きは少しも心つかざりしが養明舍うじのなさけにより始めて知りえて函底を改め見るに一枚ありければ花林堂うしに話せしに花林堂うしも函の隅より一二枚見いだせりといふかゝるみとはまゝあるべければ心かけ置くべきことにぞありける（進）

○寬永錢の撰出高（四）進而堂

紀州錢	六、	寬延尾種	二、	狹穿種	三、		
和歌山種	一、						
加島錢	三、						
濶永	一、	縮永種	二、				
押上錢種	二、	有來錢種	二、	七條錢種	二、		
狹原錢種	二、	藤澤替種	一、	猿江錢種	四、		
元祿京都種	一、	膳所	一、	秋田錢種	一、		
日光不二水	一、二、	長字錢種	二、	元字錢種	三、		
卜字廣穿種	五、	千字錢種	七、	久字錢種	八、		
久二錢種	五、	鳥取種	二、	安南錢	四、		
明和繪戶種	一三、			白銅錢	四、		
安政淺草種	二五、	支那錢	一、	細字短寶	二、		
		明和伏見種	三、				

寬永研究會ノ出品ニ付テ　養明舍

研究會ノ出品ニ結構ナル者アリ舛ガ巳ニ三七君ノ御說ノ中ニモアル通リ其變リタル所調不知品ナル者ハ何程アルカ我々ニハ中々數ヘキレヌ程アル者ニシテ近年寬永泉譜ノ出板シテヨリ彌々寬永ノ發達モ日ニ月ニ進ムヿニナリ泉譜ノ後緒モ其中發兌ニ成事ト心得舛必ス珍奇ナル余輩ノ未々知ラザル者モ澤山アルヿト樂ンデ待ヿニテ凡何ノ泉會ニ於テモ昔ヨリ出品ハ互ニ珍奇ナル者ヲ顯ハシテ自ラノ力ヲ示ス樣ナルヿニナッテ居舛ガ方今ハ研究キ專ラト致スヿ故泉譜ニ有リテモ不明ナ者ハ勿論研究セザレバアラザレド成ベクハ不知品ノ類ナ多ク出品研究シテ其說明ヲ伺度モノナリ總テ珍奇ナル者ハ少數ニシテ價格モ貴ク容易ニ得難シ然レ𪜈其割ニ諸君モ了知セラルヽモノ故研究ノ点モ少キヿニテ却テ多數ノ手替リ不知品等ヲ明瞭ナラシムレバ智識ノ愽クナルヿ進歩ノ著シキヿニ思イ舛故ニ其品位ノ如何ニ拘ハラズ成丈不明瞭ナル者ヲ出品シテ研究致シ度ヿニ存升三號へ四寶泉ノ贋造ガ出品ニ成マシタバ參考研究トシテ面白キヿニシテ背川ヤ番錢ニ隨分澤山贋造ノアル世ノ中故多ノ珍品ニモ必ス僞造ガアルヿト存舛兎ニ角賢明ナル會員諸君ニ伺テ其高鑑ヲ待ツヿト致シ舛

安政鑄當四の銅錢に就て　考泉堂

淺草にて安政六年より鑄たる當四錢の通用には銅錢なしと然れども日本社會事彙中貨幣の條に曰明和五年寬永通寶與錢を鑄造る世に之を四文錢といふ（中略）貨幣史云舊貨幣表に據れば與錢鑄造の總額一億五千七百四十二万五千三百六十枚にして其貨率は明和所鑄は大凡百分中銅六十八分亞鉛二十四分白目八分なり、文政所鑄は銅七十五分鉛十五分鉛十分也　安政所鑄は銅六十五分亞鉛十五分鉛二十分なり則參考のため茲に記す此與錢始めは一ケ四文今日は一ケ二厘あり云々と此記事例（泉家の手よならざるも亦信ずるに足るべく殊に報告第三號の泉話中にも安政鑄ありと云ふ者に種錢とも通用錢とも確定し能はざる者ありと云ひば余は必安政年間にも銅錢を鑄たるあらんと考ふ

○寬永錢論　（四）花林堂主人

鉄錢座ニハ必ラズ銅錢アルヽキ論

抑モ鐵錢ハ元文四年ニ深川十万坪座ガ官許ヲ得テ鑄出シタルヲ以テ稿矣トスベシ（余シ予ガ之ニ冗ルモノハ世ニ云フ所ノモノトハ大ニ異レリソハ後段十万坪鐵錢ノ條ニ至ラバ詳論セン）其ノ以前ノ錢ノ面文ニシテ鐵錢アルハ皆十元文四年以制ノ鐵錢座ノ面鑄トム定ベシ

夫レ世ノ淩季ナル錢位ト物候ト平行セザルヤ必ラズ一方ニ於テ之ヲ對等ノ價位ニ保タシメントスルニ努ム此時ニ方テ貨物ヲ均一ナラシムルノ方法二アリ一ハ錢ヲ古全盛時代ノモノヽ如ク大樣重厚ノモノトナシテ物價ラシメ錢位ノ上ニ居ラシムルカ一ハ錢位ヲ小樣粗薄ノモノトナシテ物價マデ引下クルカニアリ而メ前者ハ永遠ノ色艮ニシテ後者ハ一時ノ姑息ノ手段ノミ于時當局者タル營時ノ幕吏鑄錢座ノ者共ハ由來貨幣ヲ紊乱セシムルニ馴レ居レリ到底錢質秤量ヲ古代ニ引返シテ物價ヲ錢位ノ下ニ平伏セシムル事能ハザルナリ況ヤ鑄錢材料ノ欠之（不足トハ口實ニメ誠ハ高價）セルニ於テオヤ茲ニ於テカ錢質ヲ下シ甘ンジテ之ヲ授受センヤ物儀益々騰貴ス彼等奸惡ノ輩之ヲ見テ又前考ヨリ薄小ノ錢ヲ作ル計會ハ夫ガ爲ニ又物候昇騰ノ度ヲ高カラシム斯ノ如ク馳セツヽアヽ操返シテ底止スル所ヲヲラズスバ何レノ時カ錢位ト物價ト乎行スル事ヲ得ンヤ茲ニ至テ鐵錢ナルモノヲ創造ス形狀ヤヘ大樣重厚ナレバヨカラント考ヘヨリ出タルヿナリ彼等ハ世人ヲ小兒ノ如ク見做シ小判一易ルニ齏煎餅ヲ以テシタルナリ

蓋シ此ノ鐵錢ヲ製造セントセシ時ノ願書ニハ必ラズ前述ノ如キ叡意ヲ縷述シテ哀願的（裏面ニ苞苴ヲ行フテ）ノモノナリシナラン一座此ノ新例ノ開ケ幕府ノ主義トシテ例ノナキ事ハ許サザレトモ例アル事ハ必ズ許スナレバ他ノ錢座イカデカ傍觀スベキ蜂ノ如ニ起　此ノ新例ナル錢ヲ鑄ンヿヲ願フ（何レモ賂賄公行）皆ナ許サレタリ然リトハ雖イカニ時ノ幕吏ノ經濟ニ暗キトハイヘ無制限

ニモ允サヽリシナラン或ハ幾万貫文迄トカノ範圍ニ於テ許セシナラン又新出願ノ新錢座ニ對シテハ流石ニ劈頭第一ヨリ錢錢ノミヲ鑄ルコトハ許サヾリシナリ必ラズ始ニ銅錢ヲ鑄サシメ材用足ラサルト云フ口實ヲ作テ錢錢ヲ鑄ルコトヲ出願セシメノ夫ニテ始メテ錢錢ヲ鑄ルコトヲ許シタルナリ之ヲ則チ最初鐵錢ヲ鑄ルコトヽ許シタルノ例ニシテ又之レ幕府ノ重ンズル充例ニアテハメントスレバナリ

然レドモ如何ニセン滔々タル淺季ノ時勢ハ人ヲシテ狹猾ナラシム後ニハ遂ニ始ニ銅錢ヲ鑄ルノ願書ヲ出シ許可ヲ得（如斯ルヤ直ニ鐵錢ヲ鑄ルノ願書ヲ出シ又直ニ官允ラ得トキハ最モ神ノ下ノ効力ル要ス銅臭ルハカヾル時ヨリソ言初メケル）其間電光石火モ啻ナラズ銅錢ヲ鑄ル迄モナク直ニ鐵錢ノミヲ鑄タリシ錢座モアリシヤ知ルベカラズ且夫レ其ノ鐵錢スラ後ニハ漸々形ヲ小ニシテ遂ニハ銅錢ヨリ太ナラザルベカラザルモノヽ反テ銅錢ヨリ小ナルニ至レリ

予ハ銅錢時代ト鐵錢時ノ中間ニ白目錢時代アリシトスル論ヲ持テリ後節其條ニ至テ詳論セン

問笛

春布巷

○佐渡錢の答に添ゆ

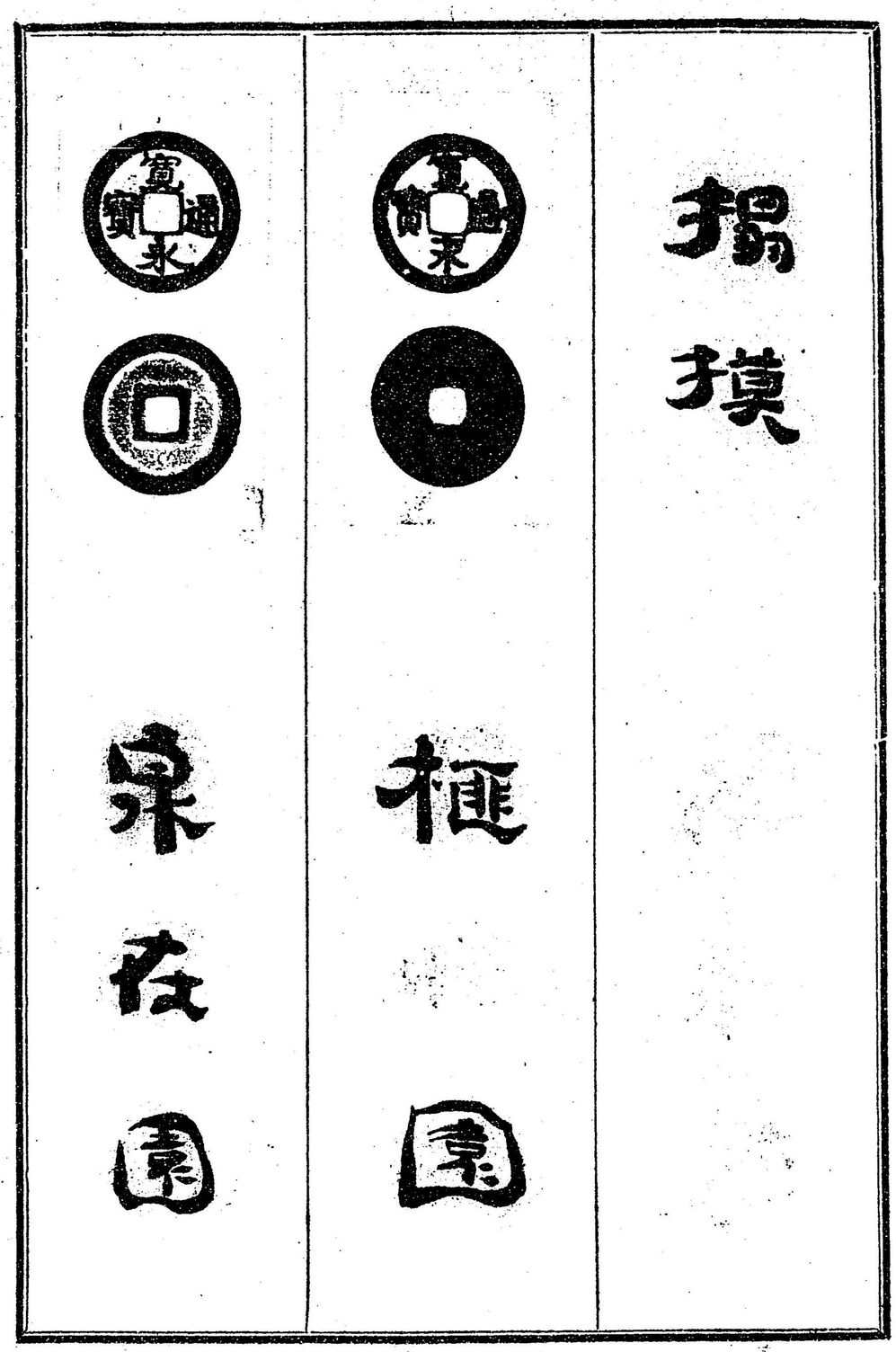
余が第一號に載せし寛永佐渡錢の揚摸に就て或人の質問を受け理事より答辨もありしが猶一言を添へんに質問のことばり長けれど其意味とふて要すれば、背を面とし錢を鑄たることわりや、背を上にせし揚摸ありや、と言ふに止まることとし、其語らたる儘に答んに

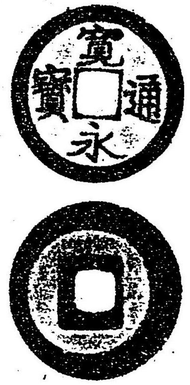
寛永錢のみを見て他の歴代古錢は手にも取らざる人をらば知らず、脊を面として鑄造せし錢は清成豊太錢、安南手類、又日本近代錢にまゝあること今更ら言に及ばざらめ、されども之は製作上に止まれば矢張り面文を上として揚摸すべきなれども若し面背同をき錢、無文錢及ひ一般の樂鑄錢の類に至りては無論製作上より面背を定めて揚摸することを至當なれ、彼の佐字錢銅質製作普通のものと異り通用錢にあらず職工ガ樂鑄に過きず、かりに背笵を面とし無紋の一笵を背とし一鑄造せしものなれば其製作を知らしめん爲に佐字を上にして揚摸せしなりまた之に無文渡佐錢と命名せられたるは理事其人よりも既に答辨ありて再ひ言ふ迄も無けれど錢は背文あるは比較的少數にて單に無文と言へば面文無きものと通ずる習慣を參酌せられ無文佐渡錢と命せられしも強ち咎むべきにあらじと愚考致せり、猶詳細に申さば長文にも渡り刻閙も要し事々しく詮議す、きものにもあらじと思へば面話に譲られたしと冀ふ

正誤

報告第三號目錄の島屋無背樹谷菴とあるは千品館、寛保島津錢千品館とあるは樹谷庵、揚摸相談の十七行に銅貨とあるは銅質の誤につき訂正す

揚摸



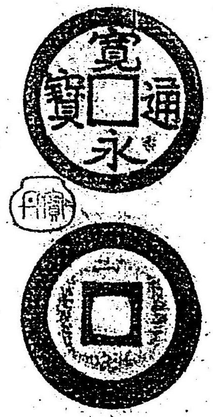


寬永通寶

同

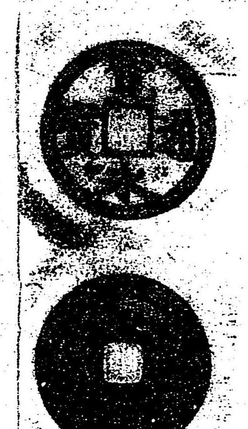
寬永通寶

遲而堂



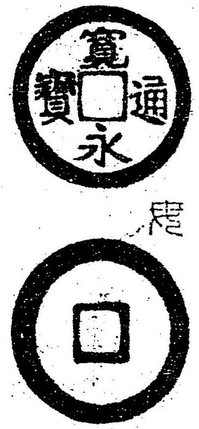
寬永通寶

宵月樓



寬永通寶

歌孫坊

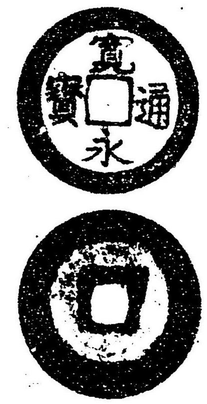


寬永通寶

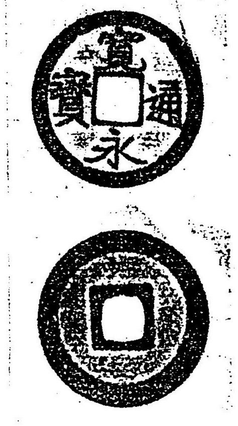
苔林巷

寬永通寶

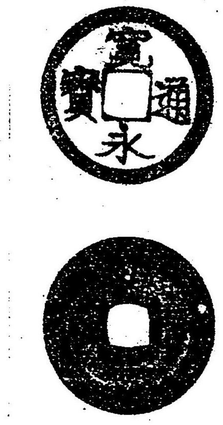
青笛崗



壽泉亭

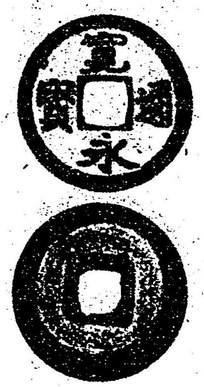


好泉堂

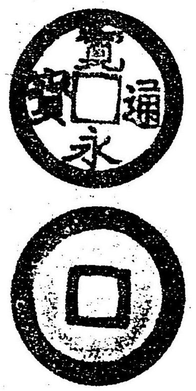


振海堂

煉風園



泉亭

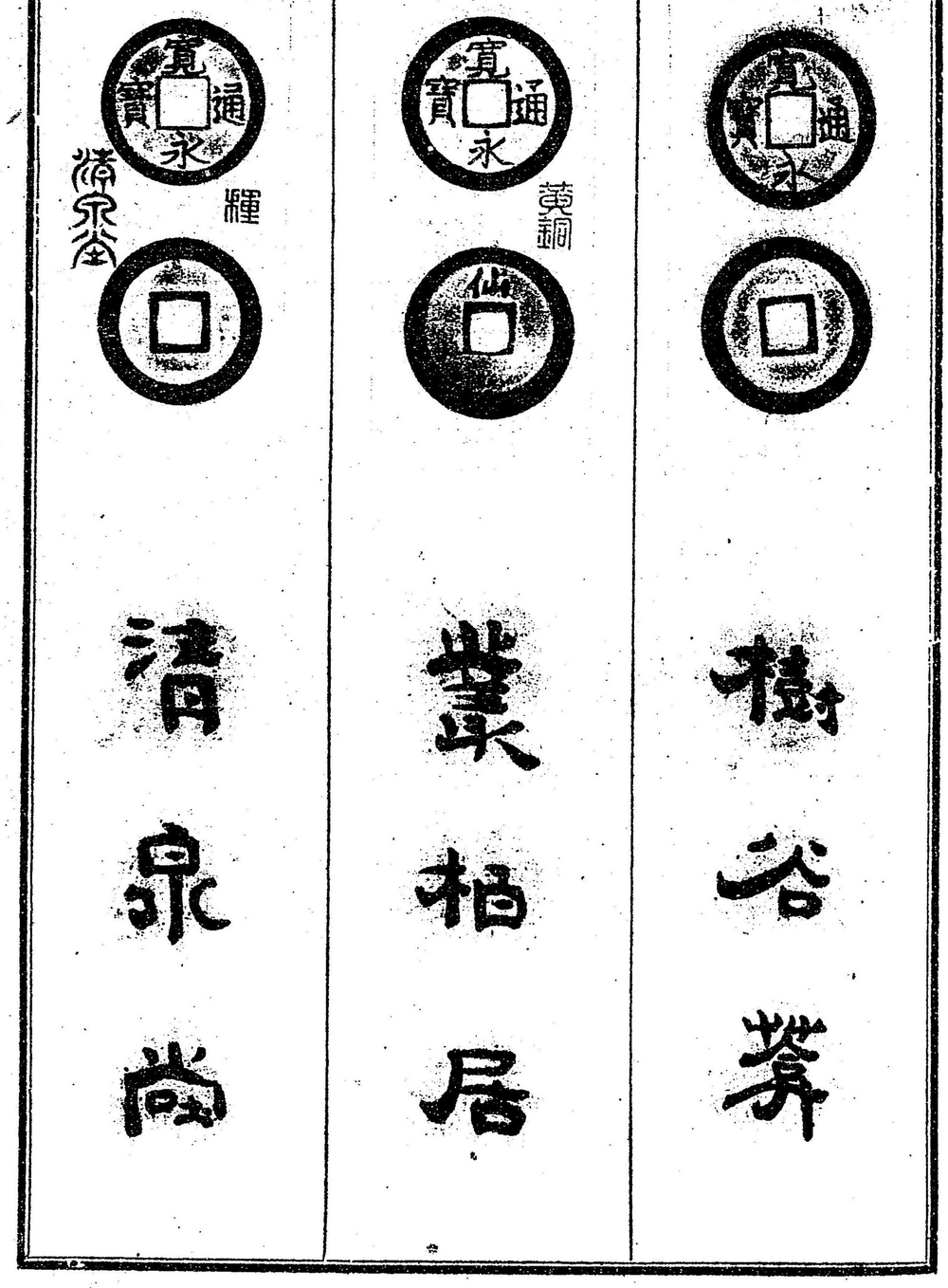


同

點鮫尚

苍林詩

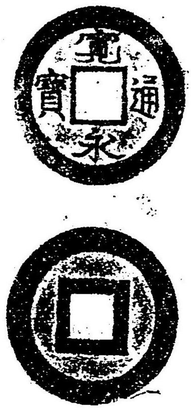
養真亭



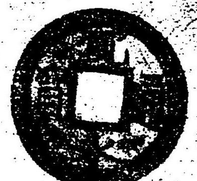
樹谷葊

業相居

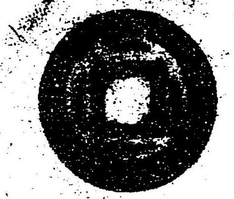
清泉尚



方圓堂

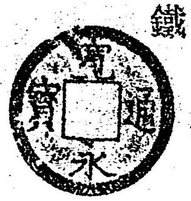


蒼龍館



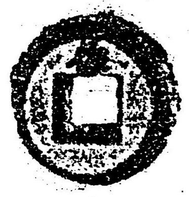
千品館

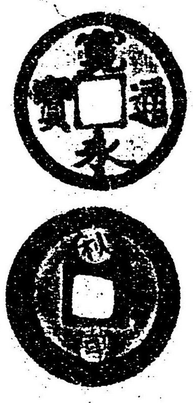
扇玉堂

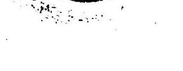


考泉堂

局



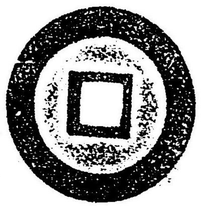


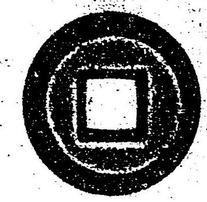


春希齋

同

考古堂

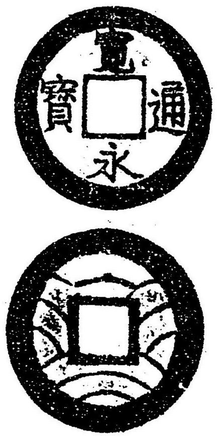




樂眞亭

寶泉舍

貳朋舍



寛永錢研究會

是非龍成亨尚

寛永錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會の寛永錢に關する總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むべし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載え本會事務所に寄送せらるべし

一會員にして出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢○樣一品はつき五十葉つゝ本會事務所に○送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進而堂　榎本文四郎

花林塔　三上毋子太郎

賛成者（イロハ順）

叢柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一郎

春布處　中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

（）會員諸君の便利の爲め主なる古泉賣買所を左に掲く

東京神田區田代町十番地

鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地

龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地

横井好泉堂

京都三條通麩屋町西入辨慶石町

中島泉貨堂

横濱市扇町二丁目四十七番地

村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地

村上忠太郎（イロハ順）

明治三十三年十月十日發行

寛永錢研究會報告

第五號

目錄

○大會に就て
○揭模叢談
○泉話
緤足實に就て
イ字刮去錢に就て
寛永錢の分折に就て
○寄書
鳴見平藏書上の寫
雜記（其一）
御布達寫の
○模摸
寛永水戸錢無背文
志願摩太字
同細字
淺草狹穿
肥永
同
淺草支流種錢
寛永坂本錢
正德佐渡種錢

進足而　方考圓　花考泉　千樫好實樂好奇樹養
眞谷貨　泉眞泉　品　泉林泉
堂菴堂　堂塔堂　館園堂舍亭堂堂亭巷

享保石卷種錢
元文猿江廣穿種
同　縮通種
同　仰永
元文瞻所種錢
同　通用錢
元文佐渡無背文
元文押上大字種錢
寛保足尾錢
一ノ瀨輪印鉄錢
安政水戸狹穿種
當四背千字鉄錢
增込千字錢
當四輪印錢
正德御用錢細郭
同　廣穿
同　鐵造錢
島屋文藏造錢
安南鑄造寛永錢

齋養驅方扇考著泉清樫楓考春實花進同足
泉明鈴圓玉泉龍在泉
享舍堂堂菴堂館園堂園居堂巷樓塔堂　古布丹林而
巷

非賣品

報告

入會者

穢芳園 飛彈 岡田利右工門
楓泉居 東京 曾田 皆眞
鴻楓亭 東京 大野 源次郎

大會

○本會の大會は報告第四號にも記載致し置き候通り來る四月十日正午時より本會事務所に於て開會致し候間萬障御差繰御出席あらんことを希望す

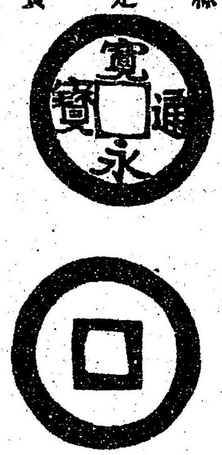
揚摸叢談

○寛永水戸錢の無背文は存在稀なるものなり
○志頭摩太字及同細字は松竹堂佐々本志頭摩惠念翁の書する所にして存在稀なり彼の妹尾柳齋泉譜に佐々木志頭の書とありしといふより此錢を抑齋とよぶ人もあれども是は穩當ならずただ長嘯子の長嘯子手に於ることと志頭摩手に對して志頭摩と呼ふいそよからん
○狹穿は前にもいひしごと小字のものに二種ありて此種は永点の離郭せしものなり
○肥永は淺草支流錢中の一にして志頭摩手より變化し來りたる錢なり存在少なし
○淺草支流種錢は駿州足洗錢の一種と見做す泉家多し
○寛永坂本錢の永字劃ねたるものに二種あり昔しは之を呼子錢といふ
○正德佐渡錢の種は存在少なく佐渡志に依れば佐渡國下戸炭屋濱町に於て鑄ると
○享保石巻の種錢は存在稀なる者にて今見二品に過ぎず
○元文猿江廣穿の種は昔四寶錢の一となせり、同縮通の種は美なり、同仰永は揚摸上永字異樣をなすやうなれども恐らくは鑄溜の類ならん
○元文勝所の種錢は稀なるものにて製作美なり、同通用錢は種錢に比して大に稀なり
○元文佐渡無背文は青銅、白銅の二種ありて共に存在少なし此無背錢は前號に掲げし方圓堂氏の無背錢とは全く異なるものにて鉄錢の佐字錢の面文に類す方圓堂氏の無背錢は銅錢佐字錢の面文に類するものなり
○元文押上大字の種錢は攝津國大坂あるは山城國烏羽の鑄錢なりとて種々議論のありたる錢にて存在少なきものにはあらず
○寛保足尾錢はただ揚摸にては何となく疑はしき所ありてさだかならさりければ書を以て問合せしに銅色は背長種錢に似て赤色稍淡き方（帶白）製作は隨分嚴正にて重さ一匁強あるよしされば普通背足錢の銅色（帶白黃色のものもあり）とは全く異にして大は新撰寛永錢譜の大字よりはやゝ小さく小字よりは大に大なり寛永錢の戲作にばまく如斯銅色のものを見る希くは實物を送られたし
○一ノ瀨輪印鉄錢は後打長寶にして存在稀なり
○安政水戸狹穿の種錢は廣穿の種錢よりは少なし
○當四背千字錢は今日に在ては少なきものにはあらず
○楷込千字錢は銅色帶黃赤色にして千字を赤銅にて彫刻したるものを楷込み水波を刮去をしたるものなり此子錢を養眞亭氏は一品所持せりといふなれば十分の研究を遂ざたる上また重ねて報告することあるべし
○當四輪印錢之タ（白字）レ（木字）の二字を上下に印したるものにて恐くは兩替店頭の戲作ならん
○正德御用錢細郭は一說に深川十萬坪に於て鑄ると、同廣穿は一說に元文年間に鑄るとある泉譜には中ノ島廣穿と命名して宇津及中ノ島の錢中に置けり、同戲造錢の面文は所々陰起し銅質は帶白青銅にして輪及孔の鑢痕甚だ不正且新らしく輪の面背不正の卵圓形をなせり
○島屋文の戲造錢は銅質帶白黃色にして輪の鑢痕はやゝ正しけれども孔の鑢痕は甚だ不正にして卵圓形をなす面背の文字は少しく陰起する所あれども端正なり
○安南鑄造寛永錢は面皆の文字やゝ異なりたるもの數種あり何れも寛文以後の錢を摸したるものゝみにて黃銅非薄なり

泉話

○緑足寶よつさて　進而堂

緑足寶といへる寛永錢は魚尾寶あるは曳分寶なといへる名ありて今見る所乃僅に七品に過ざづ左に其刻畫をしめす



この錢の面文は志頭摩手の文字を模したるものゝやうにて製作は粗なり銅質は黃銅にして經八分五厘强あり
此錢は文城の考ふる所にては通貨にはあらずしてあるは書錢座の樂鑄錢の類ならんと信ず若しもこれを正しき通貨とせば形の大なるをもて官鑄の錢ありといはねばえならずされど未だ官鑄の通貨にしてかく製作の不精あるものをえ見ずかく存在の稀あるものをえ見ずかく黃銅にして形大きく製作粗にして存在の稀なるは樂鑄たるの引証とするも敢て不當にあらざるへし乞ふ偏に論評あらんことを

○イ字刮去錢に就て　足　蕃

○當四イ字刮去錢に就ては種々の說ありてあるは背ノ字錢のノ字を刮去せしものならんとなれど老婆の見る所にては面文こそノ字錢に似よれ製作銅質全く異なりて同一のものとはなし難し背の刮去部を見るもイ字の第二劃の

痕蹟波紋に附着して殘れりされば此の錢は報告の第三號に掲げある考泉堂うしの背ィ字錢のィ字を刮去したるものなること疑かし嘗て進而堂うしの話に考泉堂氏の背ィ字錢には通用錢あるや否や未た詳かならずとよりて考ふるに彼の背ィ字錢をいひ此刮去錢といひともに通用錢のあらざるものかかは研究を要す

○寛永錢の分折に就て　進而堂

○今回農商務有技師田村與瑞氏に依頼して左の二錢を分折し見るに面白き成績を得たれば左に掲けて寛永泉家の參考に供す

背文字錢	島屋無背錢
銅　六一、五五	六八、九五
錫　六、六六	六、八五
鉛　二四、八一	一八、二八
金　痕跡	無
銀　〇、〇〇〇九	〇、〇〇〇二

注意　右の數は百分中の含有量なり、背文字錢は島屋文錢に似て面文の瑞嚴なるものなり

寄書

鳴見平藏書上の寫　（一）　方圓堂

これは實暦十二午年本所三ッ目鳴見平藏氏より書上せしものゝ寫にして原書には元祖より九代までの記事あれども寛永泉に最も關係深き六代目のみを茲には掲ることゝせれり

一六代目　治部（刑部）一子鳴見兵庫賢信

浪々にて水戸に罷在候所大僧正樣より出府仕候樣被仰遣治部（刑部）は老衰仕候に付兵庫出府仕候へは先祖代々錢奉行職相勤候前功にて錢造樣可爲鍛錬と被思召候に付寛永年中於芝笠網繩手新錢座御用被仰付候由來之儀は大猷院樣御瑞夢被遊　御覽御夢中の次第は御城より南に當て御居城替る此所より御歩行にて被爲往との御夢甚被爲懸御氣春日局を以て上野天海大僧正へ御夢判被仰遣大僧正御判釋之次第は御替るは代替る也御歩行は御南足にて被爲往也右御營中之御儀に無之萬物を調候代物と申候儀也代物は錢也錢を兩足と申なり國中を能走廻ると言ふ儀を以て名附也女語に御足と申故實も此故也又足袋を何すと不云何文と申も此故也

御夢の惣体金錢也新錢被仰付候得は御治世の御代益々泰平にて御子孫可爲御繁榮御吉事と云々

月　日　　大僧正天海

春日御局御披露

右御判釋の次第被聞召大に御感悦御機嫌之余り土井大炊頭樣へ被仰付重て新錢之置字將又吹座之場所錢造鑄物師等大僧正御心の儘たるべしと也右上意を御受東叡山の寺號と云當時の年号と云寛永通寶未代不改之錢可然尤吹座之儀御瑞夢之方角に任從御城南之方に當て場所御見立笠網繩手今新錢座此節土井大炊頭樣へ被召出錢座頭領本人古名あり

に被仰付則試錢百貫文鑄立奉差上候所被備上覽御機嫌宜爲御褒美御樽肴御時服並に金二十五兩拜領仕候此節被下置候二拾五兩は錢百貫文の積りにて四貫文に金一兩の兩替被仰付候其上諸國錢座爲司寛永天下平等通用薫さ一錢八分五厘焙判長錢一貫文に八百五拾匁鑄廣め可申旨尤も其節古錢御停止被仰付候段被仰渡從是段々相勤め申候錢吹候中寛永十八辛己年三月御上御胎妊御祝儀御目出度相濟候以後御誕生の御用意金錢銀錢御調法御用被仰付候但員數並秘法の御儀は御座候天海大僧正より御傳授被成下候は如左

一文錢金錢　二十八文　一冊錢銀錢　三十六文

次に家頭錢

一金錢五文錢　一銀錢一万五千枚

右兩文形重目寸法口傳有

右之通鑄立奉差上候同八月六日（三日）若樣被爲御誕生御目出度爲御祝儀御時服黄金拜領仕候難有仕合奉存候

一正保（正德）二酉年四月廿三日若君樣御歳五歳にて被爲遊御元服奉稱大納言樣家網公此御祝儀の節も金銀錢被仰付鑄立奉差上候如先例爲御祝儀御時服黄金拜領仕難有仕合奉存候右天海大僧正御幼年より奉屬三代惣恩譜從御憐愍を以て錢座に御差圖被成下火を龕末仕候へは天下萬民之不吉に成候由にて天地長久爲國家安全火防之行法御授被成候殊に昔日

東照宮樣より上野へ被遊御寶納候御襟掛之御守御本尊兵庫に被下置候其節被仰渡には汝此度之新錢は末代不改之寛永通寶將又秘法錢等可被仰付証據に被下置候天下泰平之誓願常に怠間數旨被仰渡候

雜記　（其一）　考泉堂

○淺草大字　古來柳營寛永又淺草大字と稱せる者は其書風より見るも製作より考ふるも余は志頭摩手とするよりは單に淺草とする方穩當ならんと思ふ

○難波錢の書蹟　書法に通達せる或人の曰享保難波錢の字体はる頗古雅にして筆勢又非凡優に漢魏六朝頃の筆蹟に比して漸色なしと

○稀見のィ字錢　普通の當四背ィ字錢は其面文の筆劃背ノ字錢と異れり然るに余の報告第三号に出せるィ字錢の稱は其筆劃全くノ字錢と同一にして反て普通のィ字錢と異なれり余未他に同品のあるを聞かず亦其鉄錢をも見たることゝなし

○當四錢の御布達の寫　花林塔

○左の法令は明和五年四月布達せられしものなりといふ今も原文のまゝ茲に掲けて諸君の參考に供す

世上通用の爲め於銀座異鑄錢吹方被仰付候異鑄錢一文にて並錢四文の代りに相用ひ國々迄無差支樣可令通用者也

世上に常四錢のあらはれそめしは實際その六月

上句のことなりと

問答

○大形寛永錢に就て　泉亭

寛永錢には往々面文を其儘におし置き輪郭のみを廣濶におしたる樣の錢あり時としてハ其の廣めたる部分の判明あるものあり総て如斯大形の寛永錢は果して正しき通用錢あるや否や貴答を乞ふ

○同答　進而堂

貴問の如き大形錢は通貨にはあらざるべし錢座職工などの戯造錢あらん

正誤

○報告第四號大會の報告中（絕緣）とあるは（細緣）、揭模相談中銅賞とあるは銅質、養明含の寄書中後締とあるは後編、花林塔の寄書中銅錢あるゝきとあるはあるへき、稿央は矯矢、冗は充、以制は以後、物候は物貨、色良は全良、物儀は物貨、續考は前者、問笛は問答、の誤りにつき茲に訂正す

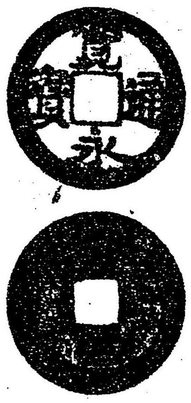
前號は非常の誤植ありたり臧に踈漏の段謹て謝す

謹告

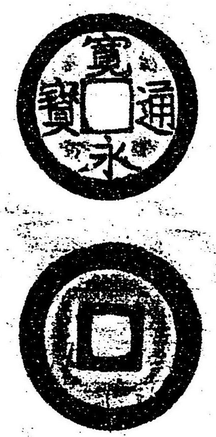
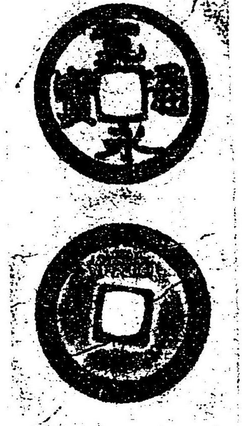
本會々員も追々增加にづき出品の揭模は以後五十葉づゝ御送付被下度候也

寛永錢研究會　理事

揭模

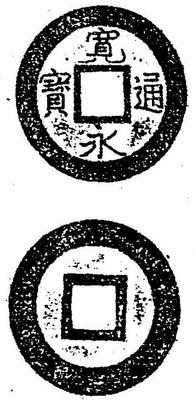


千品館

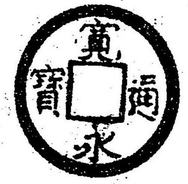



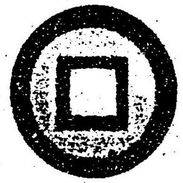
好泉當　寶泉舍　樂眞亭

好泉當　壽篇當　養眞亭

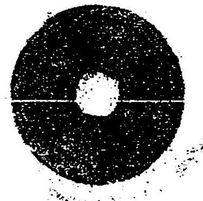


貳兩亭





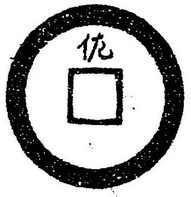
樹谷莽



泉亭

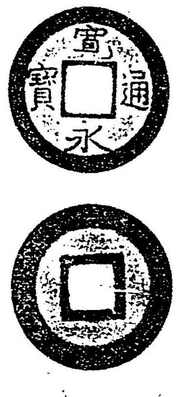
壽

養明舍

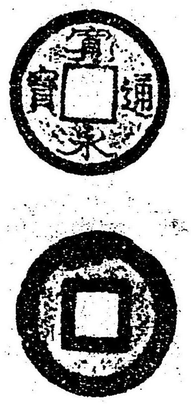


方圓堂

甎鮫尚



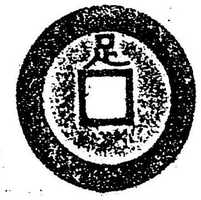
扇玉堂



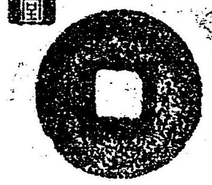
考泉尚

蒼龍館

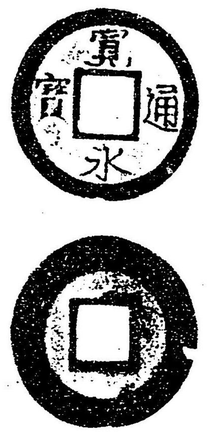
泉在園



清泉尚



樞

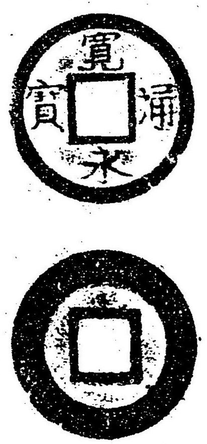


楓泉居

考古堂

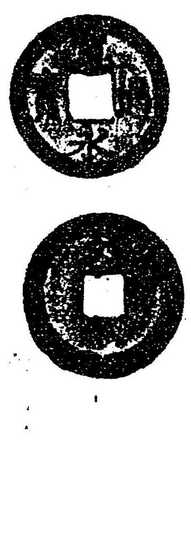
春禾齋

寶月樓



苍林巷

延而堂



進而堂

寛水錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智織の發達を圖る

一本會ハ寛永錢に關する總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むへし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載ゑ本會事務所に寄送せらるべし

一會員にして出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢〇模一品はつき五十葉つゝ本會事務所に〇送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進而堂　榎本文四郎

花林塔　三上毋子太郎

贊成者（イロハ順）

蠶柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一恕

春布廬　中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

〇會員諸君の便利の爲め主なる古泉賣買所を左に掲ぐ

東京神田區田代町十番地

鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地

龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地

横井好泉堂

京都三條通鮫屋町西入辨慶石町

中島泉貨堂

横濱市扇町二丁目四十七番地

村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地

村上忠太郎

（イロハ順）

明治三十年四月十五日發行

寛永錢研究會報告 第六號

目錄

○大會の記事
○第一議題の錢
背十字鉄錢
元祿京都錢
安政四當錢
上棟祝賀錢
○第二議題の錢
元祿七條錢
同黃銅
同
同
元祿龜井戶錢
同
同
同
享保七條錢
同
同
享保深川十萬坪錢
同黃銅
同
同
同背澗絲

考松泉堂　振梱雀泉秋樂梱花同考春蒼扇花養寶考穗
進而堂　侮廼風眞林　泉布龍玉林眞泉泉芳
同　堂園家亭園亭塔　堂巷館堂塔亭舍堂園

同長見寬
同澗絲黃銅
向澗線黃銅
同背巽
同
同黃鍋
同
有來錢
同
同黃銅
元文鳥羽錢
同黃銅
同背細郭
同
元文伏見錢
同
同
元文藤澤錢
同
同
同別種
同
同
元文加島錢
同鉄錢

實清考樹青考進考青樂花馨養好花足花泉考瓢楓養好花馨進考青
水泉谷泉而泉貨泉林泉林泉眞泉孫泉　林　泉泉貨明餘品柏林古
軒堂菴堂堂堂亭堂塔亭堂堂堂塔園堂坊居亭堂塔堂舍堂亭堂巷塔居館堂塔堂

非賣品

報告

入會者

雀廼家　東京　鈴本嘉吉
養泉亭　東京　大澤成吉
飛彈泉園
花咲巷　東京　前橋榮五郎
東京　梅窓隱史
翠松軒　陸前　安部定楯

大會

○本會の大會は明治三十年四月十日午後一時より東京市日本橋區濱町二丁目十一番地本會事務所に於て開會したり此日天氣清朗にして出席せられし會員は

一番　瓢箪堂　新井瓢九
二番　千品館　植田紋次郎
三番　樹谷巷　淺海太郎次
四番　叢柏居　岡田村雄
五番　好泉堂　横井仲定
六番　考古堂　龜田一恕
七番　槿園　根岸武香
八番　寶泉舍　鷲田信詮
九番　春布巷　中川近禮
十番　秋風園　吉村鳳嘯
番外　花林塔　三上香哉
仝　進而堂　榎本文城

本日傍聽として參會せられしものは

陸奥　浦山政吉
東京　北村富三郎

各會員より出品せられし寛永錢は左の順序に從ひ席上に陳列す

第一議題の錢

○背十字鉄錢　考泉堂
○元祿京都錢　松堂
○當四寛永錢　進而堂
○上棟祝賀錢　進而堂

第二議題の錢

○荻原錢　○享保京都錢
○享保深川錢　○有來錢
○元文鳥羽錢　○元文伏見錢
○元文藤澤錢　○元文加島細緣錢

各會員の席定まるを待ち理事會に於て確定したる議案を朗讀す

○揚模欄内の第一に揚げし鉄錢は錢質粗にしていかにも新らしく十字輪印の鉄錢とは大に時代を異にせり却て背文字鉄錢なぞの粗錢に酷肖す故に元文十万坪座の鉄錢にあらざるものとなす

五番曰　元文十万坪座の鉄錢ならん

四番曰　否元文十万坪座の錢にかゝる粗錢あし恐らくは後のものならん

六番及九番曰　元文十万坪座のものにあらず

○第二に揚し元祿京都錢は銅質帶赤黄銅にして粗なり今之を量り見るに重一匁二分五厘九毛、經八分五厘強あり錢の全体はいかにも鑄放の様なれども孔に不正の鑢痕あらはれ居れり

此種の通用錢はみな黄銅にして至て精煉のものなりよりて考るに此錢は鑄放種錢のやうにもあれど種錢としては斯の如く銅質の粗なるものをえ見ず斯く不正の鑢痕あるものをもえ見ずさりとてまた通用錢としては斯くの如く徑、重の大なるもの未だ曾て其例をえ見ず彼の丸屋錢といへる種錢すら徑八分五厘強のものは少なし故に通貨とも見えずまた通貨の種錢とも見ず恐らくは錢座の戲造錢の類ならんか

五番曰　製作美にして形の大なるは通貨の種錢ならん

四番曰　錢座の鑄錢なることは疑ひなけれども通貨の種錢とは見えず

六番曰　鑄放の種錢ならん

一番曰　此錢は少しく火に中りたるものなればやゝ銅質の變したるものならん

九番曰　もとより通貨にはあらずされど決して種錢にもあらざるものとなす

五番曰　元文十万坪座の鉄錢ならん

四番曰　否元文十万坪座の錢にかゝる粗錢あし恐らくは後のものならん

六番及九番曰　元文十万坪座のものにあらず

○第二に揚し元祿京都錢は銅質帶赤黄銅にして粗なり今之を量り見るに重一匁二分五厘九毛、經八分五厘強あり錢の全体はいかにも鑄放の様なれども孔に不正の鑢痕あらはれ居れり

此種の通用錢はみな黄銅にして至て精煉のものなりよりて考るに此錢は鑄放種錢のやうにもあれど種錢としては斯の如く銅質の粗なるものをえ見ず斯く不正の鑢痕あるものをもえ見ずさりとてまた通用錢としては斯くの如く徑、重の大なるもの未だ曾て其例をえ見ず彼の丸屋錢といへる種錢すら徑八分五厘強のものは少なし故に通貨とも見えずまた通貨の種錢とも見ず恐らくは錢座の戲造錢の類ならんか

五番曰　製作美にして形の大なるは通貨の種錢ならん

四番曰　錢座の鑄錢なることは疑ひなけれども通貨の種錢とは見えず

六番曰　鑄放の種錢ならん

一番曰　此錢は少しく火に中りたるものなればやゝ銅質の變したるものならん

九番曰　もとより通貨にはあらずされど決して種錢にもあらざるものとなす

五番曰　元文十万坪座の鉄錢ならん

四番曰　種錢にあらずしてかゝる大なる錢あるや

九番曰　鑄たるまゝふて鑢を當てざれば驚くべきほど形の大なるものあり

○第三に揚げし當四錢は安政年間に地主へ下されしものなりとて泉友より贈られたるものあるが製作銅質等より考るときは種錢にあらずして通用錢ならん

五番曰　少しく疑はしき所あれども種錢ならん

九番曰　此錢は流通せしあとある錢なれば種錢の様にも見ゆれども決して種錢にあらず通用錢なり

六番、四番、一番曰　銅質といひ製作といひ種錢にはあらず通用錢なり

十番曰　此錢は報告第三號の泉話に揚げありしものなるや

番外曰　いかにも然り

かく最多數を以て通用錢なりと確定せば報告第四號に考泉堂氏も述べられし如く安政萬延の當四錢は鉄錢のみにあらずして銅錢も鑄たるものならん

○第四に揚げたる上棟祝賀錢は白銅よして其包紙に木版摺にて成田山不動堂上棟錢とありされば上棟錢なることは疑ふ所なし

七番曰　かゝる錢を上棟祝賀錢として用ふるの例は各地にあり

四番曰　此ほど築地本願寺上棟式の圖を見るに錢の圖

ありこれは金銀錢なりとありされは上棟式には金銀錢を用ひしものならん

十番曰　世に上棟錢といへるものは多くは鍍錫錢なりかゝる白銅錢も多くあるものにや

番外曰　白銅錢ハ稀なるものあり

暫時休憩の後第二議按の錢に移る

番外曰　第二議按の錢は總て種錢なりと御承知ありたし

○第五より第十三に至るの錢は泉貨鑑に元祿十三年二月京都七條川原に於て鑄ると、されど仝所仝時の鑄錢にしてかく銅質製作の異るはいかにも疑はしきみとにて信しられ難きとどもなり、貞幹は平安七條及び江戸龜井戸に於て鑄るといへりさもあるべきことなりしかあれど貞幹もたゞ七條及龜井戸に於て鑄るとのみにて何れを七條何れを龜井戸の錢とも定めざりしこは蓋し後の考を俟ちしものならん

今ろの銅質製作等につき熟考するに實に貞幹のいはれし如く二所の鑄錢なるやさらに疑ふ所なしさればいかゞ定るやといふに前の五品は彼の寶永當十錢あるは享保七條錢の銅質製作に似よれり故に前の五品を以て今ま平安七條錢となせり、かく前の五品を七條錢となせしからには後とに殘りし總ての錢は江戸龜井戸錢とおさゝるを得ず故に後の四品を以て龜井戸錢とおせり

五番曰　余の考る所にては此二種の錢を七條にても亦龜井所にても鑄しものと思はるゝ

九番曰　或ハ五番のいはれし如く七條にても龜井戸にても各々二種の錢を鑄たるものなるやも知れずしかして今假りに番外のいはるゝ如く七條と龜井戸に於て別々の錢を鑄たるものとして前の五品はなるほど寶永錢などに類するが故に製作上京都の錢となすも可なれど後の四品は龜井戸錢に類する錢なしされば後の四品を龜井戸錢となすは餘り想像に過きたることならずや

番外曰　龜井戸にて薄小なる錢を鑄るは新例なれば似よりたる錢のおきわけならずや

九番曰　京都にても薄小なる錢を鑄るは始めならずや

番外曰　此錢の鑄造年月に就きては大に說を異にするか故に自ら見解も異なれどもそは議題外のことゆへ鑄造の年月及名稱おどのことに就ては後日改めて述ることゝせん

六番曰　七條の錢定まりたる上はあとの錢を龜井戸の錢とおすも敢て不穩にあらざるべし

九番曰　余は荻原錢といへる錢ハ此錢にあらずとおすものなれば貞幹の說を信せざるが故に大に意見を異にせり

番外曰　荻原錢は漸次非薄となる云々の記錄あれば此錢のことなるべしがして今後はいざしらず今日の所にては貞幹の泉譜を信ずるより外あからん

十番曰　荻原錢といふはいかなる意か

番外曰　荻原近江守代官の時に鑄させしといふより起りし名ならん

十番曰　今回七條錢となせしものに黃銅のものあり少なきものにや

番外曰　いかにも存在稀あるものなり。

○第十四より第十六に至るの錢を以て享保七條となす

享保七條錢は其の形ち大にして背郭細く銅質多くハ帶白黃銅なれども時としては帶赤黃銅のものもあり

今之を細別して永字の著しく進みたるものと、然らざるものと、寬見の狹きものとの三種となす

別に異論もおければ次に移る

○第十七より第二十八に至るの錢を以て深川十万坪錢となす

十万坪錢の特色とする所は額輪にして銅質多くは帶白黃銅なれども稀には黃銅のものありまた白色の大に勝ちたるものもあり

十万坪錢を大別し五種とす

第一種は第十七より第二十一に至の錢にして寬見廣濶にして短かく背郭の小あるものなりまた之を小別して三類となす

第二種は第二十二の錢にして貞幹の泉譜に伏見錢となせしものなり此錢を伏見錢となせしは貞幹等の大なる誤りにて恐らくは貞幹等が伏見の錢に背の濶綠あらざるものもありといふ傳說を聞きて此錢を當てたるものならんなほ委しきことは伏見錢の條に於て述ぶべし

されば何故に此錢を以て十万坪錢となすかといへば銅質製作第一種細緣の錢に酷肖せり故に改めて十万坪錢となせり

第三種は第二十三の錢にして銅質製作第一種に類するも寬見やゝ長く狹く背郭もやゝ大なるものなり

第四種は第二十四及第二十五の錢にして濶綠なり面文やゝ締小にして細し

第五種は第二十六より第二十八に至るの錢にして第四種に類するも十分なる額輪あらずして背郭やゝ大なり

右の五種中黃銅のものと白色の大に勝たるもの少なし

六番曰　第五種は十万坪錢にあらずして藤澤錢の變りならんか

番外曰　藤澤の變りといふ錢は別にあり第五種は第四種に類する錢あり

九番曰　第二種の錢は兎に角東京以西に存在多し考べきことなり

○第二十九より第三十一に至るの錢を以て有來錢となせり

有來錢の特色とする所は寬瓜の切取たるに在り貞幹等も此種を有來錢となす

銅質は白銅なれとも稀れには黃銅のものもあり

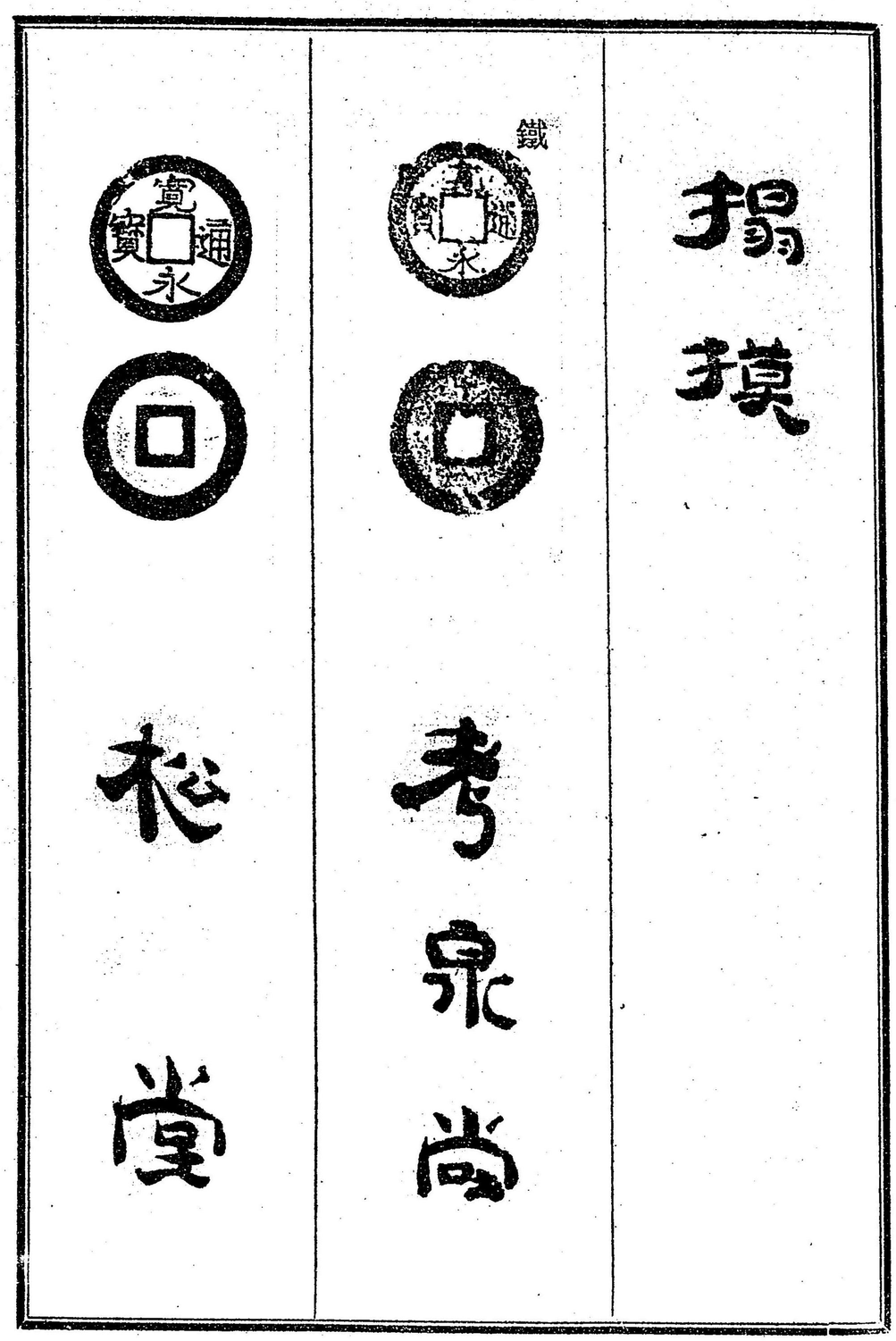
異議なし次に移る

○第三十二より第三十六に至るの錢を鳥羽錢となす

鳥羽錢を大別して三種となす
第一種は厚肉のもの
第二種は背細郭のもの
第三種は薄小なるもの
鳥羽錢の銅質は多くは白銅あれども有來錢よりはやゝ黃色を帶ふまゝ黃銅のものもありまた帶赤黃銅のものもありて一樣ならす
異議なし次に移る
○第三十七より第三十九に至るの錢を以て伏見錢となせり
伏見錢は背郭の陰起するを特色とす然るに貞幹は前にもいへること實物の研究をおさおさしてたゞ傳聞のみを以て錢を當てたらんが故に誤りたるものにて貞幹等が伏見中濶緣となしたる錢は背こそ中濶緣なれ面文といひ銅質といひ製作といひ決して伏見の錢にあらず故に改めたり
今茲に揭げたる中濶緣錢は貞幹等が中濶緣となしたる錢とは大に異にして銅質かく精煉ならす其の形ちもやゝ小さく背郭みな陰起せり
別に異議なし次に移る
㊈第四十より第四十六に至るの錢を以て藤澤錢となす
藤澤錢を大別して二種とす
第一種は第四十より第四十二に至の錢にしてやゝ額輪ありされど通字特に縮小せるが故に十万坪錢の第一及第三種と區別するを得べし
第二種は第四十三より第四十五に至の錢にして十万坪錢の第四種に類すれども寬足やゝ長きを以て區別するを得べし
藤澤錢の銅質は暗赤色を帶びたる黃銅なり
異議なし次に移る
○第四十七より第四十八に至の錢を以て加島錢となす
加島錢につきては種々の説ありて和漢泉彙には寬爪を切取りたるものを載す泉貨鑑及通用錢譜には寬爪のあるものを載す何れも皆な彫刻不精にして證とするに足らざれども過ちて寬爪の刮去することあれ過ちて寬爪の殘るべき理なければ茲には寬爪のあるものを撰めり
茲に撰みて加島錢となしたるものは銅質黃銅にして加島鐵錢の種錢に似よれり
面文は亨保七條錢の第三種を摸したるものなれども銅質粗にして通字やゝ縮み、輪やゝ細く、背郭やゝ大なるが故に區別するを得べし
九番曰　此錢は七條錢などゝは大に趣きを異にせり
議事結了す
後ち種々の談話ありて午後九時開散す

○今回の意外に多數の材料を得たりこれ會員諸君の熱心の致す所にして誠に有り難く謹て茲に鳴謝す

寬永泉研究會理事



揭摸

考泉尚

杉堂

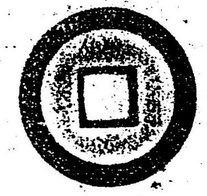
寛永通寶 文

通而堂

同

寛永通寶

黄銅

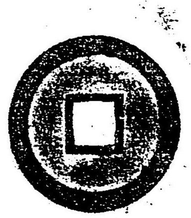


楓海堂

寛永通寶

櫨園

寛永通寶



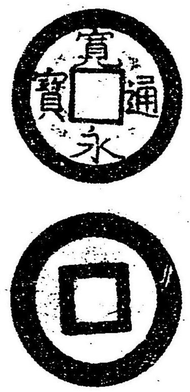
崔通家

息亭

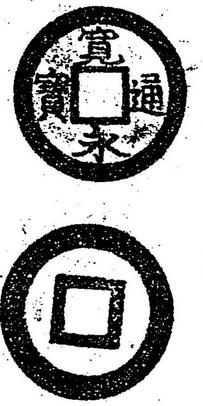
煙風園

樂眞亭

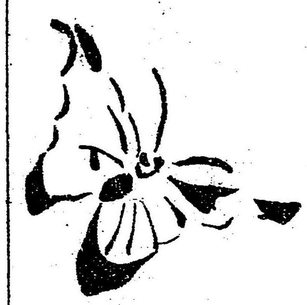
槿園



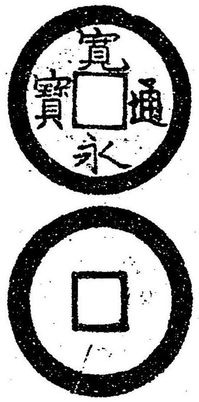
芳林琴

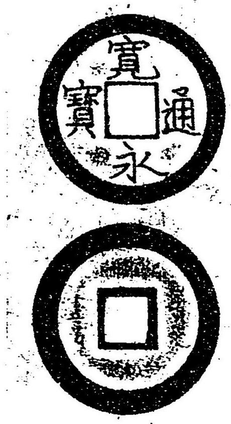


同

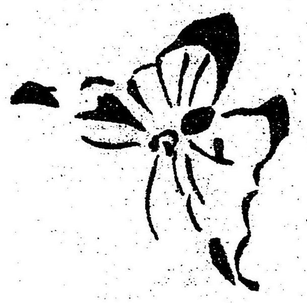


考泉尚





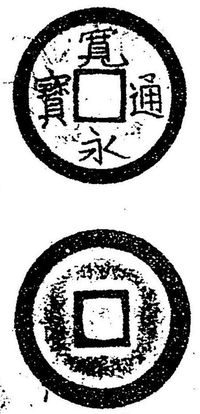
赤赤蘿



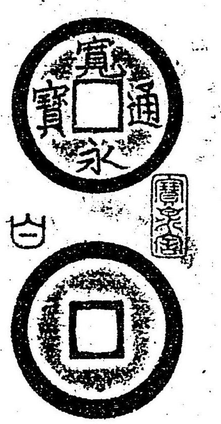
蒼龍館

扇王堂

苍林寺

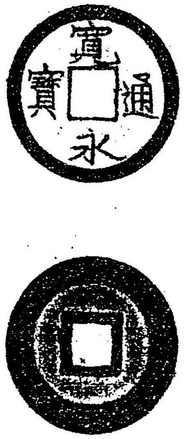


養真亭

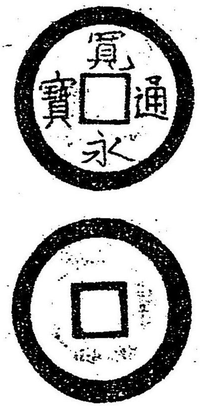


金泉舎

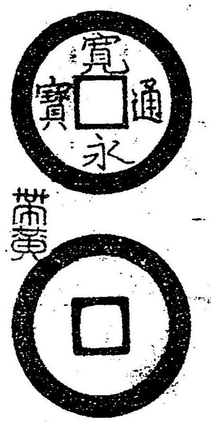
考泉尚



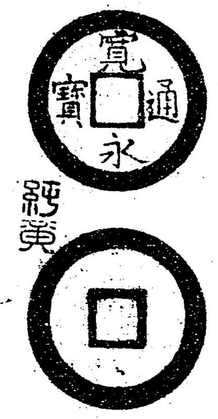
穉芳園

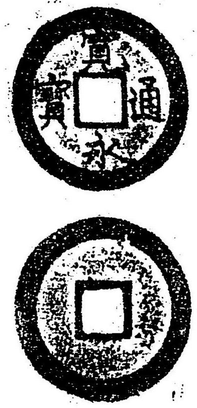


富尓軒



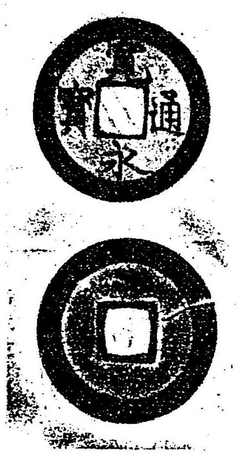
清泉尚



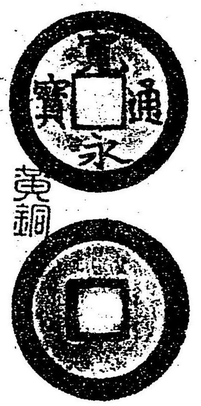


考泉尚

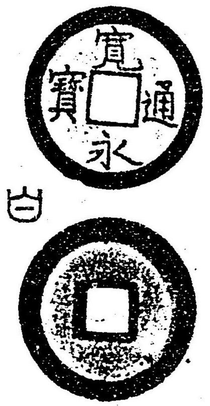
樹谷葊



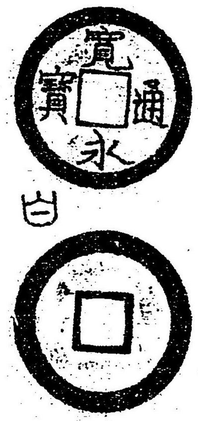
責貨尚



考泉尚



進而堂

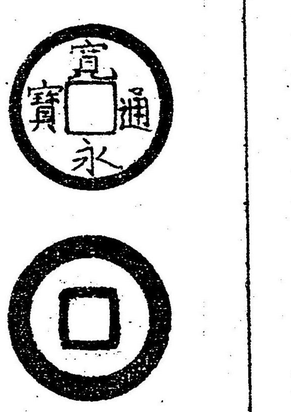


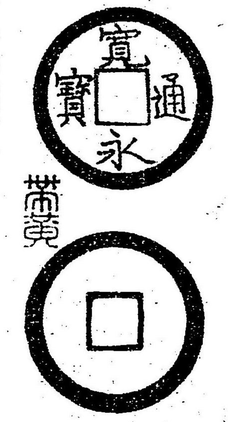
壽泉亭

苓林塔

好泉堂

養眞亭

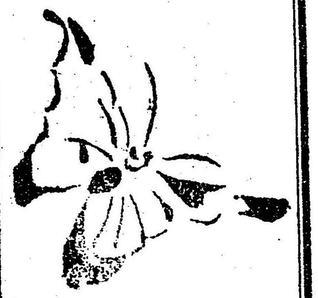




瓢孫坊

楓泉居

考泉尚



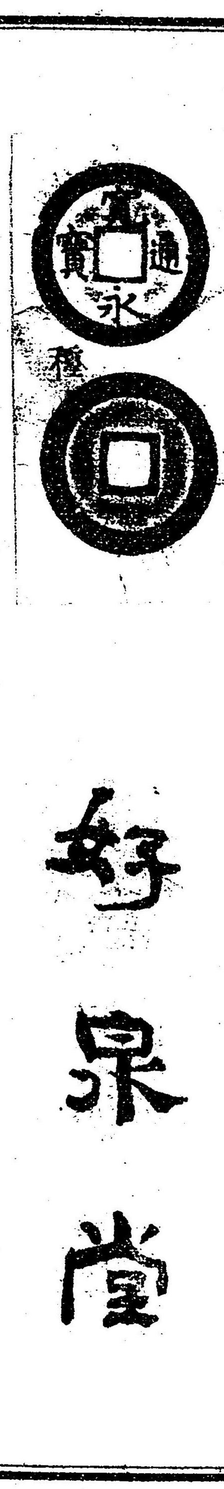
泉園

苓林塔

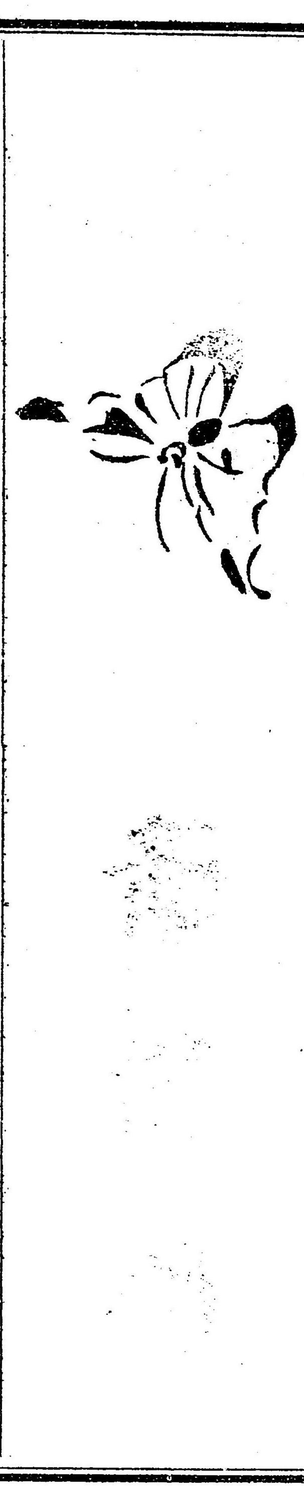
養泉亭

香茗齋

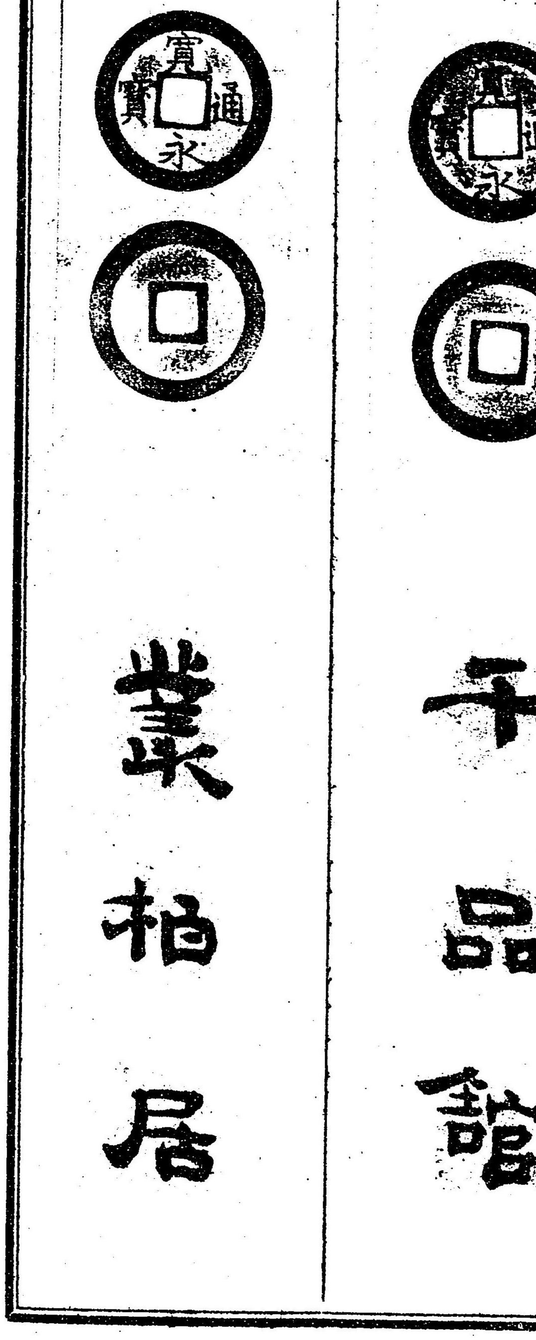
養明舍



好泉堂



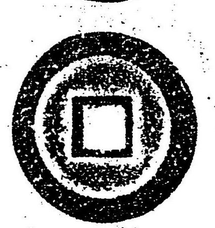
是蓬

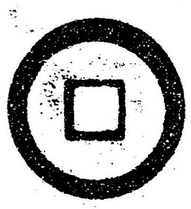


飄鯰齋

千品館

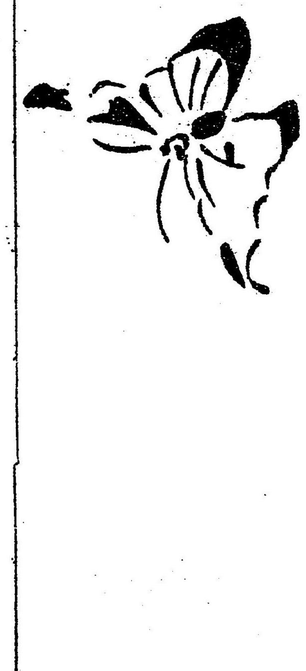
業柏居





考古堂

苓林峇



寛永錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會の寛永錢に關をる總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むべし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載え本會事務所に寄送せらるべし

一會員にして出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢○樣一品はつき五十葉つゝ本會事務所に○送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進而堂　榎本文四郎

花林塔　三上毋子太郎

賛成者（イロハ順）

穀柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一郎

春布庵　中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

○會員諸君の便利の爲め主なる古泉寶買所を左に掲ぐ

東京神田區田代町十番地　鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地　龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地　横井好泉堂

京都三條通麩屋町西入辨慶石町　中島泉寶堂

横濱市扇町二丁目四十七番地　村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地　村上忠太郎

（イロハ順）

明治三十年五月十日發行

寛永錢研究會報告

第七號

目錄

○常會の記事
○楊模叢談
○泉話
寛永泉志一の巻　進而泉堂
鳥取錢に付て　考泉堂
春宮秋宮印錢に就て　進而堂
不舊筆と稱する錢に就て　春布菴
○楊摸
二水大實　養眞古堂
志頭廓手外剔　考古亭
同肥永　鴻概亭
寛永芝錢　鴻概泉
寛永松本種錢　鴻概眞亭
同　樂泉在圓
足洗錢濶縁　實泉舍
享保仙臺種錢　翠鬚柏泉
同通用錢　秋松風軒
元文佐渡白銅錢　千松居
背十字錢
宇津及中烏錫種錢

背川字錢　好泉堂
押上鐵錢　考泉玉堂
背元字狹穿大元　扇玉居
背足錢小形　楓泉丹櫻
一字輪印後打種錢　實屋
背卜字狹穿　萬堂
同　廣穿　清泉堂
明和當四大字錢　青貨館
同正字種錢　蒼龍園
當四背盛字種錢　棰鉛堂
不知四當錢　瓢林塔堂
番無背手御用錢　花圓堂
酉谷手御用錢　方布菴
旭堂印錢　足而菴
春宮印錢　進布菴
秋宮印錢　樹谷菴
藝草錢
○泉話解說の楊摸
鳥取鐵錢の種　同銅錢の種
不知品の種

非賣品

報告

常會

○五月五日本會事務所に於て開會す本日出席せられしものは足庵、秋風園、扇玉堂、清泉堂、楓泉居、花林堂、進而堂の七名にして入會者は、萬屋　東京　秋元祐七

揚摸叢談

○大寶と云へる錢はいと稀なるものにて未だ鑄地年月の詳かならざるものなりある泉家ハ安南のものにはあらざるかといへり
○志頭摩手外劃は餘り多からざる錢あり
○肥永は志頭摩手の一種にして存在少なし
○芝錢は南光坊天海大僧正の書する所なりといふ今此の楊摸を見るに面に星の如きものありこれ恐くは錢座職工などの戲れしものならんか
○松本濶縁の種錢は存在稀にして近時寛永十四年以後の鑄錢なることを發見せり
○足洗濶縁錢は存在少なし此錢座に付ては本會に於ても目下研究しつゝあれば後日また報告することあるべし
○享保仙臺の種錢は存在稀なるものあり
○元文佐渡の白銅背佐字錢は稀に見る所のものなり
○元文深川の背十字種錢は比較上存在多きものにて今日まで未だ正しき其の通用錢を見す
○元文宇津及中島の錫種錢は今見る所一品にして帝國博物館よ在るものは銅の種錢あり其の通用錢は鑄造せられしものなるや否や未た詳かならす
○元文小名木川の種錢は至て稀なるものにて未た其の通用錢を見ず
○元文押上の鐵錢小字のものは今日に在てハ存在稀れなり大字のものとても多きものにはあらず
○寛保大坂の狹穿大元種錢は存在少なし
○寛保足尾の中形種錢も少なし
○寛保一ノ瀬輪印種錢は無輪印錢に後より打入れたる形跡あるものなりと申越されたり
○安政水戸狹穿の種錢は存在少なく廣穿の種錢はさほど少なきものにはあらず
○明和龜井戸當四大字錢ハ通用錢とても存在少なく俗に之を深種錢といふ
○明和龜井戸正字種錢は關東地方には多く存在すれども或る地方には存在少なしと此類を総て大波錢といふ
○當四盛字種錢は萬延年間盛岡の鑄錢にして稍や少なし
○不知品當四濶縁錢は京地には少なけれども奥州地方には多く存在するよし或る説には岡邊のものならんと
○番無背手御用錢は存在至て稀なるものあり
○沓谷手御用錢は鑄損じたるものにてもあるか鑄切の箇所ありて粗錢と見ゆ常に見る所のものは至て精巧のもののみあり
○旭堂印錢は上棟祝賀錢の類なるべけれども未だ詳かにするを得す信州地方には多く存するよし或人の話に信州埴科郡に旭山といふ所あり旭將軍の稱も或ハ此地名なるより出でたるものにはあらざるかしかりとすれは旭堂は木曾義仲を祠る堂宇なるにてもあるべしと思はるゝ宜しく研究すべしと聞くのまゝを記して識者の教を待つ
○秋宮印錢は天保七年信州諏訪下社秋宮神樂殿の上棟祝賀錢あり
○春宮印錢は文政年間諏訪下社春宮神殿改築のとき用ゐし上棟祝賀錢なり明治年間の春宮印錢とは大に異なれり
○蔓草錢は戲れに正しき寛永錢の背に草摸様を彫りたる者なるべし

泉話

寛永泉志一の卷

總論　（一）　進而堂主人

寛永錢は寛永二年始めて常陸國水戸に於て鑄るもの〻如し常陸史料に「寛永二年水戸田町佐藤信助請鑄新錢充世用、水戸候許之、乃諭大府又請、報可、於是於水藩新鑄寛永錢、是鑄寛永錢之始也」とあり又金錢米布江水通貨考にも「寛永二年新錢鑄立願江戸相濟錢座取立」とあるを見れば寛永錢を鑄るの始めは水戸なること疑ひなし、されど幕府の新錢鑄造所を置かれしは寛永十三年五月のみとなりとす、いま幕府の法令集を見るに

定

一寛永ノ新錢幷古錢共ニ金子一兩ニ四貫文勿論一分ニハ一貫文ノ賣買タルベシ若違背致シ高下ノ賣買仕ニ於テハ從双方其賣買之代一倍過料トシテ可出之其町之年寄二百疋其外家一軒ヨリ拾疋宛過怠トシテ可出之事

一大カケ、ワレ錢、カタナシ、コロ錢、ナマリ錢、新惡錢、此外不可撰若撰者、押而ツカフ者有之者或ハ其所ニ三日サラシ或ハ可爲籠舍其町ノ過料ハ右同前之事

一新錢江戸幷近江坂本ニ而被仰付候間兩所之外惡錢ニ至迄一切不可鑄出若相背族ハ可爲曲事之事

一今度新錢被仰付之上ハタトヒ有來惡錢タリトイフ共或ハ禮錢或ハ散錢等ニモ取扱フベカラザル事

一御領私領共ニ年貢收納等ニモ此御定之通リ不可相背事

右之條々堅可相守之者也

寛永十三年丙子六月一日

此の法令に依りて見るときは寛永十三年に鑄錢所を置かれ

れしは江戸及近江國坂本の二ヶ所にてありしこと明かなり、しかあるを今日まで松本、吉田なぞの錢座をも寛永十三年より置かれたるものとなし居りしは大なる誤りにてありし今また幕府の法令集を見るに

錢鑄所

水戸、仙臺、吉田、松本、高田、長門、備前、豊後、中川内膳領内

一只今迄被仰付候分ニテハ諸方へ弘り兼候之間代物澤山鑄サセ其國ハ勿論他國へモ御定ノ如ク金一兩ニ四貫文一分ニ一貫文宛拂候樣ニ可申付候

一寛永之新錢本ヲ越候而如此イタサセ可申候

一錢鑄申候者聞立領内勝手ヨき所々ニ而可被申付候事

寛永十四年丑八月

（未完）

鳥取錢小字のものに付て　考泉堂

鳥取錢に付ては嘗て東京古泉會に質問せり古泉會の貴答には延享鳥取小字錢は芳川維堅鳥取に當てたる由云々然れども余の見る處に依れば維堅の小字とせる者と新撰寛永泉譜のものとは大に異るが如し今試に左の三種の母錢（冊末の別欄を見よ）を取て互に相比較せば如何其第一の者と第二の者とは製作書風共に能く相近似して同所の製たるを免れざるも其第三の者は第一及等二の者に毫も類似の点なし加之稻垣尚友も亦此第三の者不知品の部に入れ銅鉄二種あることを說きしが其鉄鑄の者も亦余が撰出泉中に在り依て余は第二の者を鳥取錢の小字なる者とし第三即新永撰寛泉譜に載する所の者を鳥取の鑄錢にわらざるものとなす世の泉家幸に教を垂れよ

理事曰　本月の研究會議に附せしに皆同意を表せり

秋宮及春宮の印錢に就て　進而堂

寛永錢の背に秋宮（報告第四号に見よ）あるは春宮の文字を印したるものあり何れもみな上棟祝賀錢の類ならんとは今日まで寛永泉家の想像せしところなれども未だ全は明確なるをえざりしかは泉友今井麻須美氏に依頼して其の事實を探究せしに果せるかな事實發見するを得て歸京せられ左の書に實品を添へて寄せられたり

信州諏訪下社

諏訪の下社は二社ありて宿驛を以て隔てらる昔しは其一を春宮一を秋宮と稱せしも惟新の際改められて今は春社、秋社といふ

此秋宮錢は天保七年秋宮神樂殿の上棟錢なり、春宮錢は文政年間春宮の宮殿改築の際に用ゐし上棟錢なり然れども文政年間の者は全て少なく今日多く見る所の春宮錢は明治廿五年春宮の鳥居上棟の際用ゐしものゝみなり

此事實は諏訪下社神官某に付て取調たる者なりこれに依て見れば秋宮印錢は信州秋宮神樂殿の上棟祝賀錢にして安藝國宮島の上棟錢にあらざること明かなり又春宮印錢には文政年間のものと明治廿五年のものと二樣あるよし依て今回惠まれたるもの〳〵印を熟視するに如何にも新らしく明治年間のもの〳〵如し嘗て余が撰出せし所のものは印色古雅にして近年印したるものとは見えず恐くはこれ文政年間のものにてもあるべし斯く此印錢の出所明確するを得たるは實に今井麻須美氏の効よして大なりと謂べし謹て茲に鳴謝す

○不舊筆と稱する寛永錢に就て　中川近禮

不舊筆とは寛永錢中何等の部分を指して名げられしものぞ京師の人長崎屋不舊なる者其面文を書きたりと云ふ傳說に依て之に類する寛永錢に與られたる通稱なり而して此諸錢は書体の差異纖微にして古來識別に困難を感し遂に本會に於て之を議題とし之を考究せらるゝに至りしなるべし本會の大會は四月十日に開かれ其席上理事兩氏より合考の原案を示され衆席の意見を求められたり余は之に就て少しく述る所ありしか更に拙筆を以て本編を草し兩氏の再考を乞ひ廣く諸君の示敎を求めんとす

理事兩氏の編纂示されたる原按を見るに劈頭第一元祿七條錢乃ち荻原錢より說かれたり其主旨を摘記するに

楊摸　大樣四種　小樣四種　（署）

右の錢ハ泉貨鑑の說に據れば京都七條川原に於て鑄るとされど同所同時の鑄錢にしてかく銅質製作の異なるは如何にも疑はしきみとにて信じられ難きことゞもなり貞幹は平安七條及龜井戶に於て鑄るといへりさもあるべきことなりしかあれど貞幹もたゞ七條及龜井戶に於て鑄るとのみにて何れを七條何れを龜井戶の錢とも定めざりしこは蓋し後の考を俟ちしものあらん

今其銅質製作等につき熟考するに實に貞幹のいはれし如く二所の鑄錢なるや更に疑ふ所なしさればいかゞ定るやといふに前の四品は彼の寶永當十錢あるは享保七條錢の銅質製作に似よれり故に前の四品を以て今は平安七條錢となせり斯く前の四品を七條錢となせしからには後とに殘りし總ての錢は江戶龜井戶錢とおさゞるを得ず故に後の四品を以て龜井戶錢となせり

此錢の鑄造年月日及名稱につきては大に說あれどもそは議題の外こゝゆへ後日にゆずる

讀者諸君は此原案を一見して其論旨の在る所を容易よ知られん乃ち理事二君は製作上より推されて之を七條龜井戶二ヶ所の錢とし確然區別せられんとす原案中前の四品と言はるゝは荻原錢中大樣なるを指し後の四品と示されしは同錢中の小樣なる部分を目されたり抑も斯の如き推想は從來寛永家の口に傳へたることは聞しも之を斷定揚言して世に示されたるは善し兩君を以て其始とするか然れども余は其推測を以て甚だ穩當を失せりと見做す乞ふ以下に陳ずる所を聞かれよ

之を要するに文書なく之を徵するに事跡なくんば實物の

比較を以て製作の接近を求めんこと理に於ては更に異見を挟むなし然りと雖も狭原錢を七條龜井戸の二ヶ所とし享保七條及寛永錢に製作を比べ大なる者を七條の製作ありとし小なる者は唯だ七條の製作なきとの主意を以て單に龜井戸錢とするは如何にも了解に苦む所なり試に貞幹の泉譜を確信し見るも其文章上にては狭原錢を両地に區別する能はず若し自ら責任を帶ひて両錢を両地に區別せんとせば相當ある理由無かるべからず今文會事跡の徴するなく一方は製作の似たるを以て論じ一方は文質の異あるを咎めず自ら衝突するの比較論ならずや

抑も斯の如き結果を來したるは全く謄譜を誤信せるに基く世に寛永家を指して藤譜盲從者と罵る人あり蓋し藤譜を知て盲從する者は尚ほ可ならん藤譜を誤信して之に盲從する者は其愚なること一歩を進むるか世に存する藤譜の摸寫本は大同小異にして甚しき懸隔なきも果して貞幹の著述と信し貞幹の眞蹟と認るものは今日尚有りや否やもしありとせば何人の藏か之なりと言ふべき

其体裁の完備に於ては松堂の有に一歩を譲らん其品彙の數多なる養眞亭の藏に三舍を避けん而して獨り貞幹の眞蹟と認め彼が寛永錢に對する觀念を表白せるかと思ふものは余の見る所寶丹樓の所藏僅に一卷なりとす

余は何に依て此言を吐露するか抑も貞幹の錢譜は其始め彼か一家の書蒙齋錢譜と同時に起りて爾來改竄修正數次に及び當時大坂の錢商芳川維堅之を修正し重て京都の錢商稻垣尚友なる者之を增補して文政以後に及ぶ偶ま舊稿の反するも後人壇に筆を加へ遂に複雜混交して容易に貞幹の意想を伺ふを得ず蓋し貞幹が始めて筆を把て草せし錢譜は今日見る可らずとなし傳存の錢譜中其編纂の最も古きを撰て貞幹錢譜の單純なるものと認めざるを得ず寛永錢譜の終末を見れば通常「寛政七年歳乙卯秋日改正」の文字あり寶丹樓の所藏も亦編纂年を記すると雖も其文字はし少く他書に異なれり

錢譜及寛永錢譜寛政四年歳次壬子春三月改正

藤原貞幹印

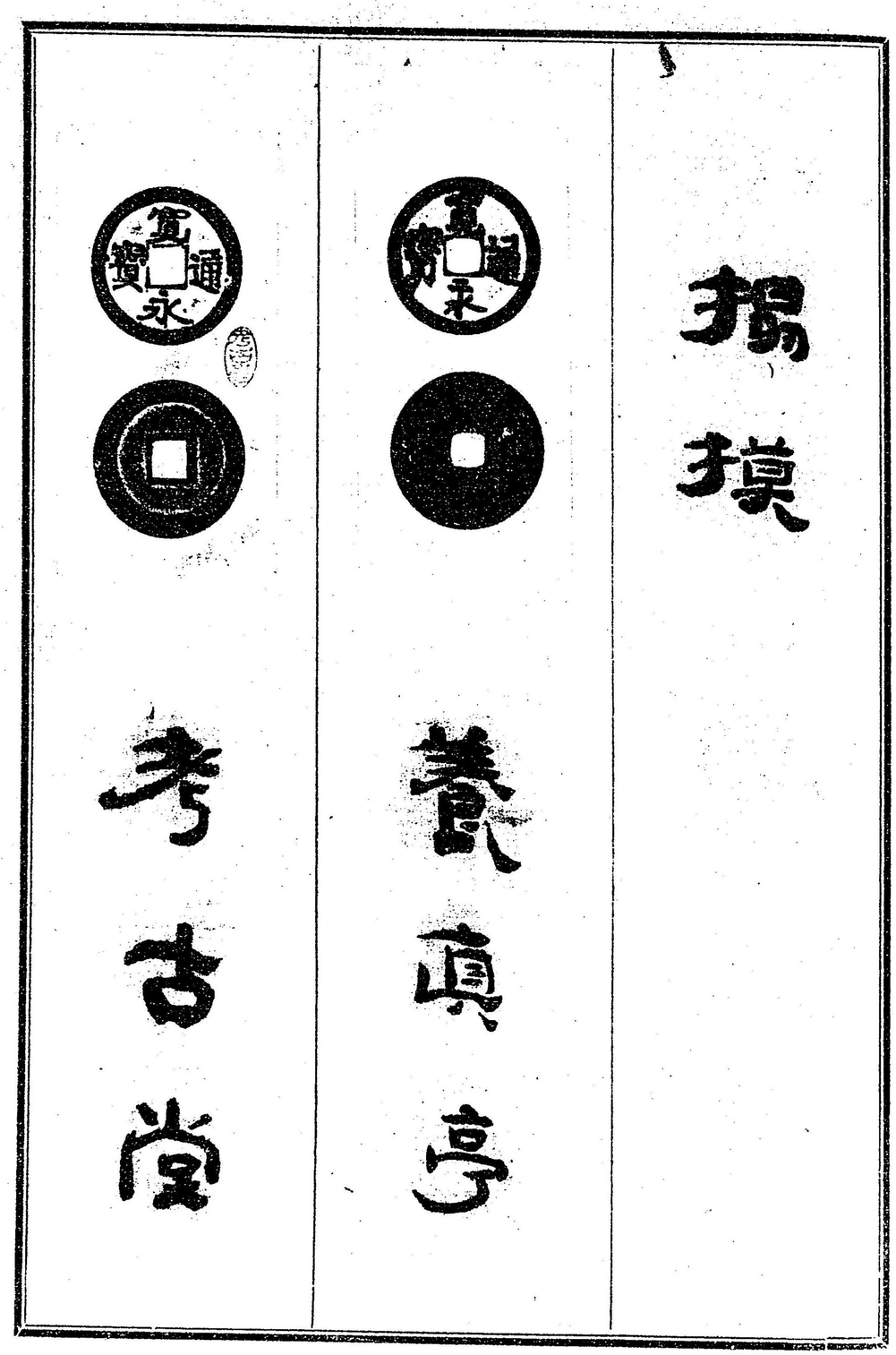
（未完）

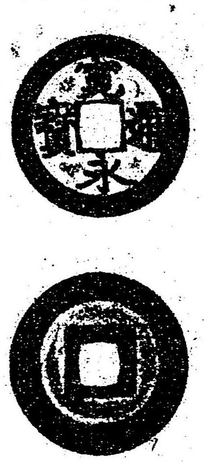
理事云

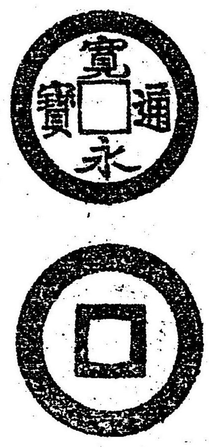
今回明治の古泉博士中川近禮氏より寛永泉研究會第　回大會の議題に對する補欠の御明論御寄贈につき厚く御礼を述べつゝ謹で拜讀含味するに御議論の傍ら大に御叱ケを蒙りたれどもちと明治の古泉博士といふ春布老中川近禮氏の御高說としては服從なし難き所あれば或は他人の筆にありたるものなるやもえ知るべからざれども中川近禮と明記しあれば御名に對しても又無言なるは大家に接するの禮を欠くものなれば理事等も聊か御答ひなすべき筈なれども御論の完結するを俟ちて而して後ちに述ることゝはなしぬ

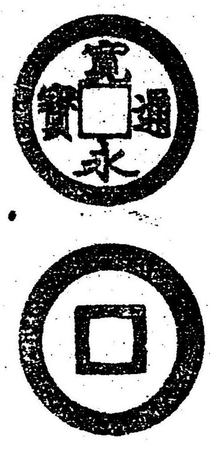
謹告

○本會々員も御蔭にて漸次に增加し從て出品せらるゝものも多くに御寄贈の場模も如何にも紛らはしく或は貼り過るやも計り難ければ今後は御手數ながら雅號の即章を捺せられんこと偏に希望す









鴻禧亭

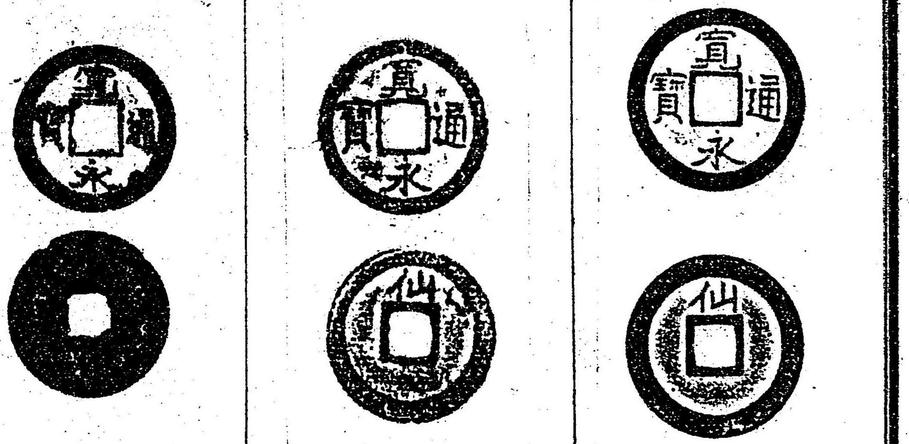
壽泉亭

同

樂眞亭

泉在園

寶泉舍



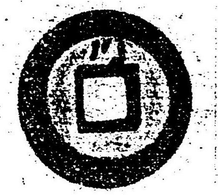
業柏居

翠松軒

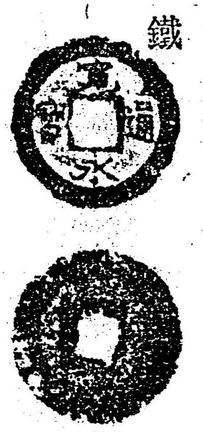
妹風園

千品舘

松堂



好泉堂



鐵

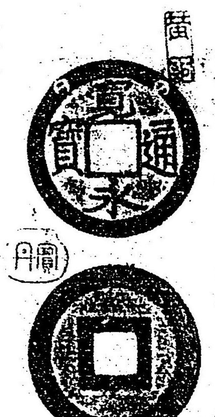
鐵

考泉尚

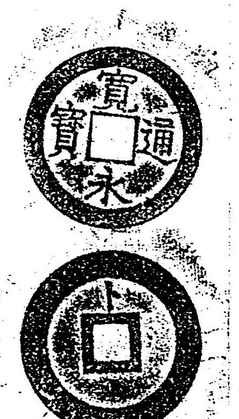
同

扇王尚

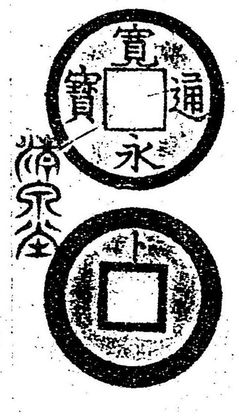
楓泉居



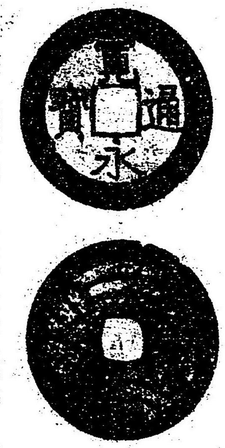
寶月樓



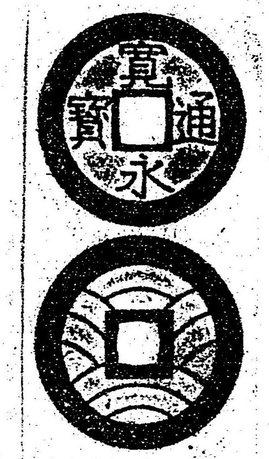
万屋



清泉尚



貴貨尚

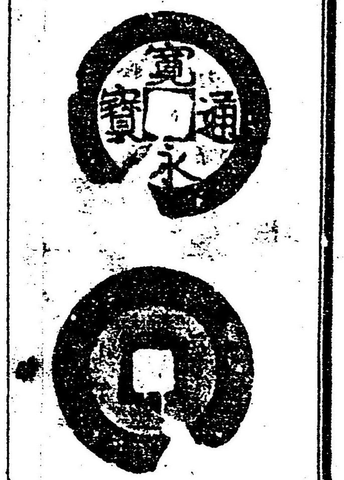


蒼龍館

蒼林泰

鼎鮫尚

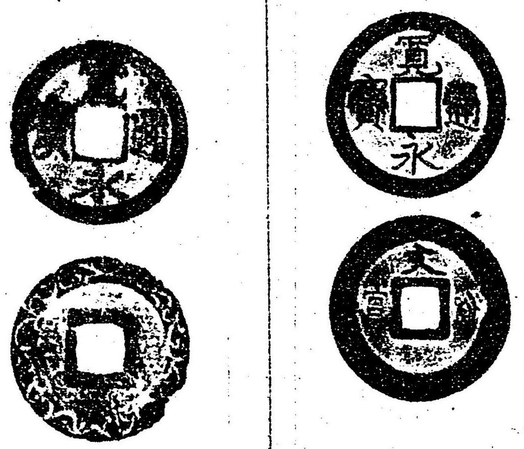
樞園



方圓堂

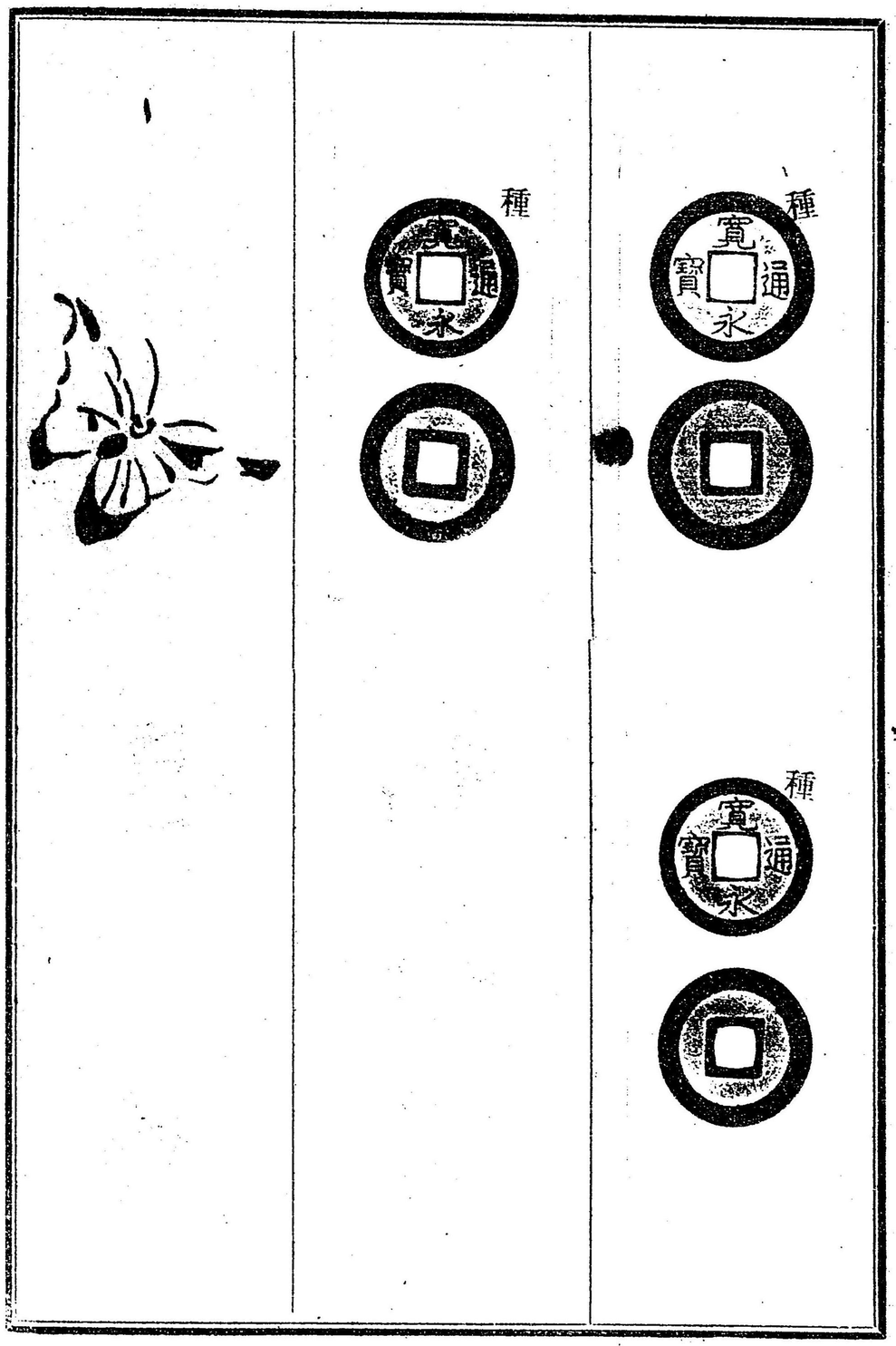
春禾藏

適而嘗



是蕘

樹谷莽



寛永錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會の寛永錢に關する總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むべし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載し本會事務所に寄送せらるべし

一會員にして出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢○點一品はつき五十葉つゝ本會事務所に○送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進而堂　榎本文四郎

花林塔　三上母子太郎

賛成者（イロハ順）

鬚柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一郎

春布痴中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

○會員諸君の便利の爲め主なる古泉買所を左に掲く

東京神田區田代町十番地　鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地　龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地　横井好泉堂

京都三條通麩屋町西入辨慶石町　中島泉貨堂

横濱市扇町二丁目四十七番地　村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地　村上忠太郎（イロハ順）

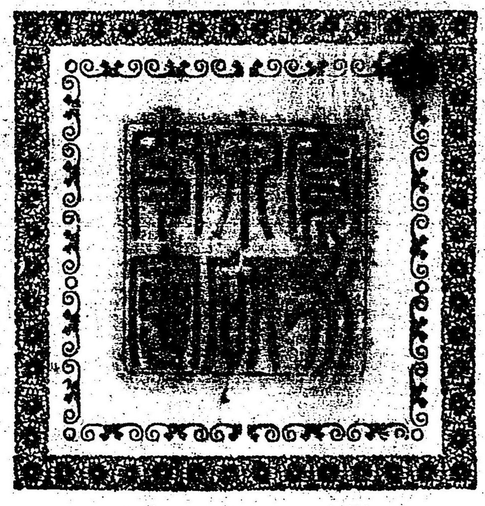
明治三十六年十月十日發行

寛永錢研究會報告

第八號

目錄

○常會の記事
○泉話　寛永泉志一の卷（二）　進而堂
不舊肇と稱する錢に就て　春布巷
○楊摸鑒談
○楊摸
背三字錢　秋風館
大通　千品堂
斜寶　瓢鈴堂
未詳錢寶遶輪　寶丹樓
同　進点永　寶泉舍
背文字錢中字　壽泉亭
背文字錢不潤緣　樹谷巷
清水錢大字　足龍館
和歌山異永稱錢　蕃龍堂
中ノ島廣穿錢錢　松泉園
膳所稱錢　在圓堂
遊筋遊川錢錢　方圓堂
飯田太字種錢　泉亭堂
背千字種錢　清泉堂
未詳錢廣郭　樂眞亭
同　廣穿錢錢　考泉堂
金、祝賀錢　櫂同園
銀、祝賀錢　進而堂
上棟祝賀錢　春布巷
五字輪印錢　養眞亭
題目錢　考古堂
異向大黑錢　青貨堂
支那鑄寛永錢　花林堂
安南鑄寛永錢　楓泉居
安政淺草當四種錢　同塔屋
背ト字種錢　同
同無ト字稱錢　花
背イ字種錢　林
同無イ字錢　同
未詳當四種錢廣穿　扇玉堂
山形錢　同好堂
同三猿錢　同



非賣品

報告

入會者

新泉亭　東京　小倉純三郎
杉廼舍　薩州　森山幾助
好古亭　東京　井麻須美

常會

○六月五日本會事務所に於て開會す本日出席せられし會員は好泉堂、秋風園、考古堂、瓢箪堂、清泉堂、進而堂の六泉家にして種々の泉話ありたり

泉話

瓢箪堂曰　書肆屋熊谷某氏の話に秋宮印錢は信州諏訪の上槻錢なること疑ひなしと

考古堂、秋風園、好泉堂、瓢箪堂の諸泉家白銅白字錢の製作上につきて大に談話ありたれども寛永泉の研究に必要もなければ茲には略しぬ

理事曰　本日樓閣うしより研究會の參考にもと寛永泉楊損五十葉惠贈せられたり、これは明治三年の秋、正行寺佐藤氏の許より贈られたるものゝよし、各泉みな命名ありて大に益する所少なからず、謹て茲に鳴謝す

○寛永泉志一の卷

總論（二）　進而堂主人

前號に揭げし布告に依て見るときハ寛永十三年五月に武州江戸及江州坂本の二ヶ所に錢座を設けられたるも鑄錢の高なほ十分ならずして新錢の通用未だ全國に周ねからざりしかば更に又各地に支錢座を設けられ大に鑄錢せしものなるべし、されば松本、吉田などの錢座は寛永十三より開設せられたるものにはあらで、十四年よりなること明のなり、其他の七ヶ所に於ては同時に錢錢せしや否や今日未だ其事跡を詳かにするをえず、されど必ずや鑄錢なしたる所もあるべし

七、江戸淺草の錢座は藤譜に依れば「寛永十三年至明曆中」とあれども、ゐは誤りにてあるべし寛永泉錄に「各國所鑄多輕薄、寛永十七年八月　各國之錢悉禁止勿鑄」と又法令集にも寛永十七年八月に各國の鑄錢を禁する事令あり、されどおほは各國にて竊かに鑄錢なすもの多かりしものとれもはえて寛永廿年二月二日更に「新錢鑄候事堅ク御制禁也」と布告せり又寛永錢錄にも「其後有私鑄寛永二十年二月令各國停止鼓鑄」とあるを見れば明曆年間まで繼續せしものにはあらで、十七年八月に淺草の錢座も停止せられたるものなるべし、斯く一專ら各國の鑄錢を停止して私鑄錢の取締りをなしたるも、忽ちにして又錢貨の不足を來せしかば、明曆二年に至り再び錢座の鑄錢を許したるものから、德川十五代史に「明曆二年十月十三日淺草ニ錢座ヲ置ク」と明曆記てふ文書にも明曆二年に淺草に錢座を許されしよし見えたり、されば貞幹は明曆年間に錢座のありたることのみを知りて寛永十七年に停止せられたることを知らざりしものなるべし、しかして明曆年間に許されたるといふ錢座は、萬治元年頃まで繼續せしものゝ如し、彼の法令集に「萬治元年五月十三日五百石以上ノ輩ニ新鑄ノ錢買フベキ旨ヲ命ズ」とあるを見れば其當時まで鑄錢なしつゝありたるものゝあるべけれども、いかなる錢を鑄たるものなるや未だ詳かならず故に明曆淺草の錢座は暫く畧して後の考を待つ、されば淺草の錢座は寛永十三年五月より同十七年八月に至る所の者となす

四、寛永錢の文字は何れもみな名ある人の筆になりたるものなるべけれども今日にあり難く悉くえ知るべからず今茲に人の知る所のもの二三を記しぬ

藤木甲斐守敦直　加茂の祠官にして書傳を妙佐、成定の二子より受け入木道正統三十五世たり其名海外に傳播す、慶安二年正月四日卒す歳六十八、奈良錢の文字を書すと

佐々木志頭磨　俗稱七兵衛、松竹堂と號す、加賀の人なり、初め書法を加茂敦直に受け後ち研究して一派をなす、世に志頭磨流と稱するもの是なり、元祿八年正月十九日歿す、年七十三、淺草錢の文字を書すと

他に志頭磨と稱するもの三人あり、一は專念翁といふ名は春字は專林寛保中浪花に終る、二は命常文龍と號し十藏と稱す、三は澤井穿石晩年志頭磨と稱し浪花に住す、皆ともに志頭磨と稱し又松竹堂と號す

南光坊天海大僧正　奥州大沼郡高田の人、姓は船木氏諱天海、永德年中同國同郡の龍興寺に入る、後ち臺領の南光坊に住す寛永二十年十月二日寂す、慶安元年四月慈眼大師と謚す、芝錢の文字を書すと

天海大僧正の畧歷は諸書の載する所みな異なれり、されば茲には寛永日記に記す所のものを載す

木下長嘯子　姓は羽柴氏、名は勝俊、長嘯子と號す、從四位に敍し少將若狹守に任せられ小濱城主となる晩年東山に隱居して又天哉翁と號す、慶安中卒す、未詳錢の一なる寛永錢の文字を書すと

良如上人　前に揭げしことあれば茲には略しぬ

辻春達　名は高庸、京師に生る、書法を弘文院學士林道濟に受け楷書を能くす、世人此一流を呼んで春達樣或ゝ行成樣といふ後ち幕府に召されて御日記役となる次て正五位下行左兵衛大尉伯に敍せらる、背文字錢の文字を書すと、或はいふ文の一字を書するのみと

長崎屋不舊　俗稱忠七又加兵衛、京師の人、書法を佐々木志頭磨に受けて名あり、晩年薙髮して不舊と號す、

七條錢の文字を書すと

大田久石衛門　甲斐國飯田新町の役人なり、同所鐵錢の文字を書すと

蜷川八右衛門　蜷川新右衛門の末孫にして奥御祐筆なり、脊一字錢の文字を書すと

高尾嘉左衛門　肥前國長崎の通譯官なり、背長字錢の文字を書すと

野口多新次　背久及久二字錢の文字を書すと

新井白石　名は君美、字は在中、初の名は暎、字は濟美、白石と號す、又紫陽、金屏山人、天爵堂、勿齋等の號あり、江戸の人、本姓は荒井氏、其先は新田氏に出す、父を正憲といふ、白石壯にして木下順菴の門に入り苦學勵行出藍の譽あり初め土屋侯に仕へ從五位下に叙玄筑後守に任せらる、詩文を能くす、享保十年五月十九日歿す、年六十九、一說に難波錢の文字を書すと

此傳記は諸書を參酌して撰定かしたる者なれども、なほ或は誤脫あるやも知るべからざるなり　（未完）

○不舊筆と稱する寛永錢に就て　（二）

中川近禮

斯の如く通常寛政七年とあるべきを寛政四年とし稻垣及芳川の名を加へず眞幹の自名のみを記し殊に句頭に於て錢譜の二字を見る此錢譜の二字は眞幹自著の錢譜にして久野克寛が泉幣考證の例言に穉蒙齋錢譜といふものなりとす蓋し眞幹は自著の錢譜及寛永錢譜を此時を以て改正し其体は大に完全なしたるが如し此譜の文字は眞幹自ら書せしこと同樣にある古瓦譜を以て眞幹の手蹟を照すに疑なき眞蹟と認らる錢圖は墨を以て模摸し上下二卷附錄一卷總て七十種二百二品を錄す乃ち他書に比して品數最少く全編の文章も往々他書と異なる所あり之を要するに寛永錢譜は眞幹の自記を以て第一とし芳川維堅の修正したるを第二とし稻垣尙友の增補せしを第三とすかくの如く順次に編纂せられたりと雖て其都度尙は眞幹の名を存し或は彼の雅印を押し徒らに其書籍の品位を高めんと計りしもの〳〵如し故に摸寫の錯誤字文の增減を生し何人の意中より出てたることなるか知る能はさるもの既に多し抑も眞幹は錢譜の体を泉志に倣ると雖も其文辭は更に愛泉家の筆法に衒はず光風霽月深く國學者の意想を仰くに足れり、餘論暫らく措き爰に狹原錢に就て考る所を述べん實丹樓所藏の錢譜には狹原錢の條は左の如く記載せり

「元祿十年二平安七條及江戸○○所鑄銅質白色徑八分重八分小者徑七分五厘俗曰狹原錢」

今眞幹の異筆と認る錢譜には平安七條及江戸の下二文字を措入すべき白圈を存して龜戸の二字を記さず然るに芳川稻垣等の姓名を揭る場合に至ては卒かに龜戸の二字を顯出したり大に怪むべき次第にあらずや元より芳川以下の人士が擅に加へたるものなるべけれども其始め眞幹が如何にして龜戸の二文字を脫せしか余は考一考して彼が意中を推せり蓋し狹原錢を京都に鑄られし錢とするも亦龜戸に於ても鑄たりと云ふ傳說を聞き之を泉譜に載せんとするも如何せん彼が胸裡に於て大に不穩あるものあるかりろは狹原錢の前項に當て元祿十年より寶永元年より至る迄龜戸に鑄造したるの錢あり狹原錢の作られし元祿十二年は其範圍となり全時全所に於てかゝる異体の錢を作らるべき理由無く其矛盾の甚しきより遂に白点を存して龜戸の二字を入るゝに忍ひさりしものからん然るに後人之を知らす漫に龜戸の二字を加へて一譜の中相衝突するの不幸を顧みさりしは亦憐む可きあり

古來古泉家の筆頭に擧つて狹原錢の事を記載せられたる書籍果して幾許あるか明かには知らずと雖も余の見るところ其最も古しと思ふを板兒錄とす板兒錄は瀨尾柳齋の（通稱丹波屋彥兵衛、桓本ト名ク大坂ノ人妹尾ト書スヘ誤ナリ）自記あり其板兒錄に記する所は頗る簡短にして「元祿十三年庚辰新錢鑄京」の數文字に過ぎざれど此時代に於ける寛永錢の智識は天明以後と日を同ふして語るべきにあらず余は柳齋著書のうち錢譜及世寶錄を見ずと雖も彼の晩年（元文初年）に於ても未だ寛永に對する熱度の甚だ冷淡あるをば知れり此記錄に襲ぐを日本錢志とす此書は何人の筆になりしや不分明なれども寛永錢の部は瀨尾及ひ鹽川（九兵衛）の說を傳るに依て寛政以前の書かると知らる而して狹原錢に關する記事は左の如し

元祿十二年巳卯年四月京都七條河原ニテ鑄ル

妹尾氏說ニハ十三年トアリ

筆者　長崎屬不舊

一說ニ享保初年ト有之可考此錢ノ銅質文錢ト全ク同シ疑クハ大錢停止ノ後鑄ル所ナルベシ

此書は其文章に注意を與へて瀨尾鹽川兩人の家書に依て之を寫すとあるを見れは本說は鹽川の家書にありしと覺しく元祿十二年四月となし瀨尾の說と一年の相違ありこの衝突は後世久しく繼續して今日も尙は何れか是なるを判明せず幾許こも無して藤貞幹の錢譜出で鹽川の家記に據て元祿十二年となす然るに同じ頃に脫稿せし彩雲堂の泉貨鑑は瀨尾の說を引て元祿十三年三月とす

泉貨鑑一度成て世に顯れし時代より寛永錢は斯く愛泉家の顧る所となり稍や考究の步を進るに從ひ杜撰なる臆測推想も發生して單純なる見聞を材料とせし時代は不知々々經過し去りたり

理事云　餘論甚だ長く未だ完結に至らず

揚摸叢談

○水戸の背三字錢は二種ありて此種は三字の稍ゝ廣きものなり

○大通は未詳錢にして此種の永字を俗に二水永といふ

○斜寶は美錢の少なきものなり

○寶連輪は評するなといひ越されたればなにも述べず

○進点水は存在少なき者にて又三小点ともいふ
○背文字銭の中字は少なきものにあらず
○背文字銭の不潤縁は潤縁銭の縁稍〻細くなしたるものなり、楊模にては種銭のやうにも見ゆる
○清水銭大字は貞幹も不知品となし置きたるものなれども製作文体等により近來清水銭の一種となす
○中ノ島廣穿の鉄銭は至て稀なるものにて、ある稿本には紀州中ノ島鋳造の正しき銭貨となす
○和歌山異永の種銭は少なきものにて芳川維堅は龜井戸銭なりといふ
○膳所の種銭も稀なるものなり
○逆筋違川銭は川字輪印銭中至て稀れなるものなり
○元文飯田太字の種銭は少なきものにもあらず一説に太田久右衛門の書なりと
○未詳銭廣郭は多きものにはあらず一説ゝ阿仁銅山に於て鋳ると
○同廣穿の鉄銭は稀なるものにて貞幹は不知品となせども近來鳥取銭の別種ならんといふ説あり
○金、銀銭はいと稀なるものにて其當時の祝賀銭ならん古式定例に依れば上棟の祝賀には金、銀銭を用るもの〳〵よしなれども金銀銭は元服の祝賀あるは誕生の祝賀にも鋳造あしたるよしなれば今日にありては何れをヒ棟祝賀銭何れを誕生祝賀銭と區別することいと難し其金銭の重量は一匁四分八厘、銀銭は一匁一分なり

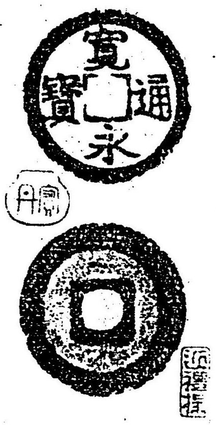
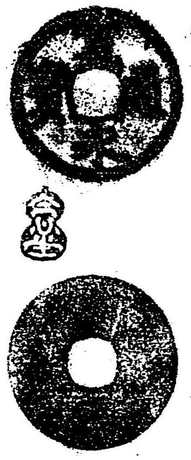
○上鳥居印銭は好泉堂氏より恵まれたるものにて横に印せり近頃信州より贈られたる者も亦横に印せりこれは明治二十六年信州上諏訪社鳥居上棟のとき用ゐし祝賀銭なりと今井麻須美氏の書状に見えたり
○五字輪印銭は未だ詳かならず
○題目銭は正しき四寶銭と題目銭を合して一の種銭となして鋳造なしたるものなり
○眞向大黒銭の背は芝銭の文字を摸したるものなり
○支那鋳造の背元字銭は粗悪薄小なる咸豊道光銭に類す総て支那鋳造の背文寛永銭は未だ舶齎少なし、安南鋳造の者は近來多く來れり
○安政淺草當四種銭は存在少なき者にあらず
○背ト字當四銭は存在少なし
○背イ字當四銭は至て稀れなる者なり
○山形銭及三猿銭は銅質同一にして背の形勢酷肖せりとゝもに存在少なし

正誤

報告第七號に沓谷手とあるは足洗手の誤りにつき茲に訂正す

謹告

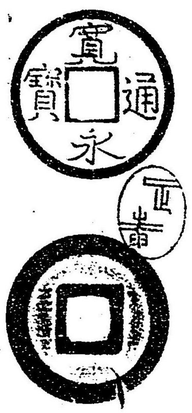
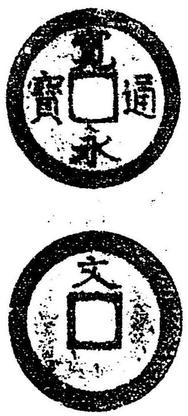
前號にも述べ置きたる如く本會へ出品の摸掲は五十葉にして雅號の印章を要す

鰤鮨尚

寶月樓

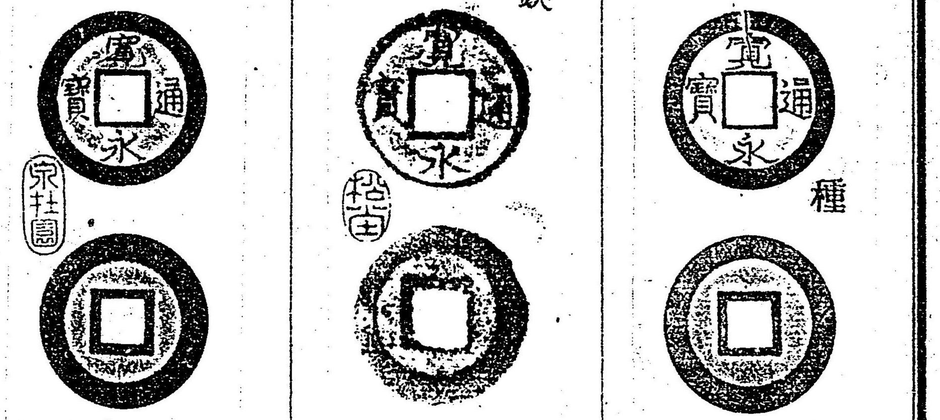
寶泉舍

壽泉亭

樹谷莽

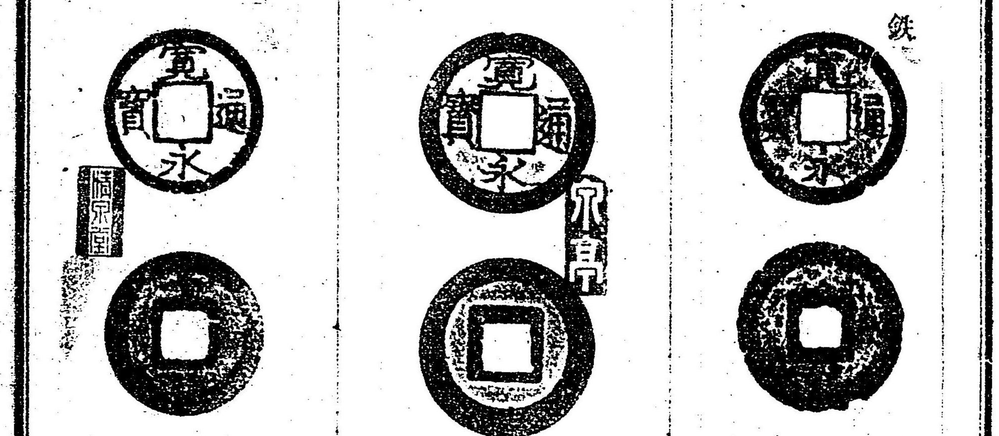
是蘿



蒼龍館

松堂

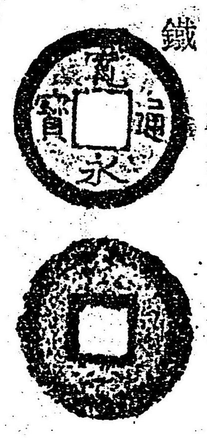
泉在園

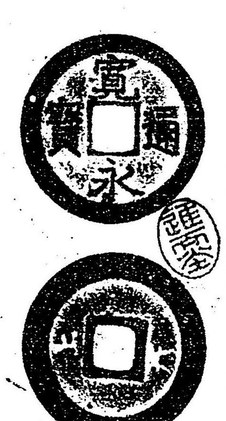


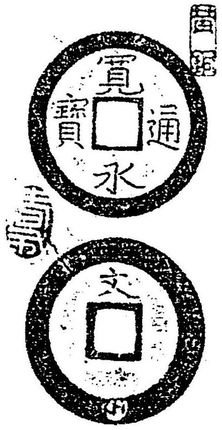
方圓堂

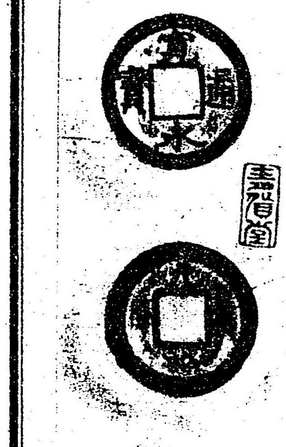
泉亭

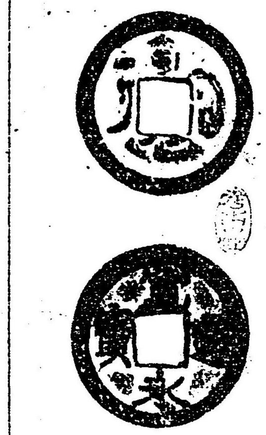
清泉尚

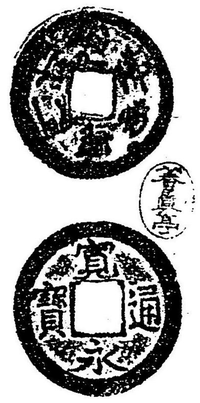










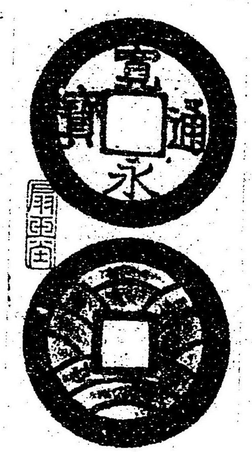


苓林堂

同

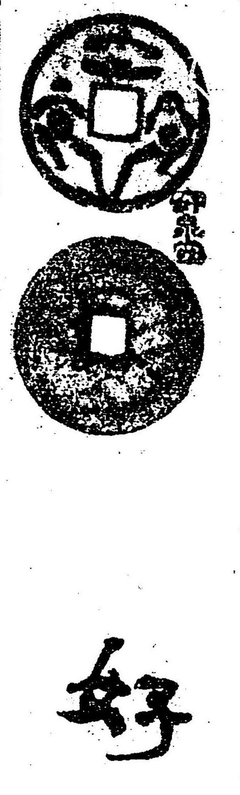
万屋

同



扇天堂

好泉堂



好泉堂

寛永錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智識の發達を圖る

一本會へ寛永錢に關する總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むへし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載ゑ本會事務所に寄送せらるべし

一會員にして出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢○模一品はつき五十葉つゝ本會事務所に○送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地槇本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進而堂　槇本文四郎

花林堂　三上母子太郎

賛成者（イロハ順）

叢柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一恕

春布庵　中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

○會員諸君の便利の爲め主なる古泉寶買所を左に掲く

東京神田區田代町十番地　鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地　龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地　横井好泉堂

京都三條通鉄屋町西入辨慶石町　中島泉貨堂

横濱市扇町二丁目四十七番地　村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地　村上忠太郎

（イロハ順）

明治三十年七月十日發行

寛永錢研究會報告 第九號

目錄

○常會の記事
○泉話　松堂
元祿京都錢につきて　布庵
不舊筆と稱る寛永錢に就て　進而堂
寛永泉志二の卷
○揚摸叢談
○揚摸
二水永大通　樹谷巷
同背星文種錢　花林塔堂
同長字　方圓堂
志津摩手濶線　松堂
未詳錢灣柱永種錢　花林塔
同狹寛　泉亭
同五大点　泉在園
明暦沓谷錢　千品館
十字無輪印種錢　樂眞亭
同白銅錢　進而堂
背狹小字種錢　眞亭
同肥字種錢　同
元文飯田錫種錢　振海堂
背元字狹元狹穿種錢　驅鯰堂
明和龜井戸大形種錢　足庵
同鐵錢　楓泉居
背卜字廣穿種錢　蒼龍館
印記製銀錢　好泉堂
金、銀祝賀錢　樫園
同鐵錢　萬屋
淺草番錢　寶泉舍
駒曳寛永錢　千品館
背盛字鐵錢　扇玉堂
同上無背種錢　考泉堂
未詳當四錢狹字種　青貨堂
同背ノ肥字種錢　清泉堂
寛永六錢　考古堂

非賣品

報告

入會者

芝軒　橫濱　今井安良

常會

○七月五日本會事務所に於て開會す本日出席せられし會員は瓢鮲堂、好泉堂、花咲庵、秋風園、考古堂、進而堂ありしも夜にいり花林堂、足庵の二氏來會せられて種々の泉話ありたり

泉話

○元祿京都錢につきて

松堂のおるし　宏平

藤貞幹の錢譜其他かれこれ參考すべきものあれど寛永錢は其數あまたありて研究てふ事もかたきわざなるを貴會が斯道の爲同好者の出品につきても說明せらるゝはいと〳〵うれしき事にぞあるをのれも寛永錢を愛する僻ありてこの會にくはゝりたれば四月の大會に元祿京都錢をいだしつるにこの錢は鑄はなしのやうなれど孔に不正の鑓痕ありはた銅色も此錢には疑がはしきよし來會諸君の評せられしは敬服といふの外なしされど此事につきいはまほしき事あり此錢はもと黃銅の鑄はなしにて外輪にも內孔にもざら〳〵せし鑄流れのまゝなりしをある日少しく好古僻ある金工家某がとひ來て例の古錢函をひらき見しがかれこの鑄流のある所をやすりにてすりをとしやすりとたがねのあとのきら〳〵するをふすまのひきてつくるとて序ににくるめてふいろになしたるなりかゝる事もおのれにはからでしつるかくちをしきみこちしつれどせんかたなく其儘になしおきしをやかて出品しつるおりけりねもごろに評判したまふ事のうれしさに一こと申すになんかしよ

○不舊筆と稱する寛永錢に就て　（三）

中川近禮

乃ち狹原錢の如きも年代の自然的に衝突せるのみならず遂に其鑄所までも二個所ありしと言ふ臆測出て貞幹は江戶の文字を加へ芳川以下の輩は進んで龜戶の文字を加るに至る蓋し古來の寛永嗜好者は甚だ研究的の志想に乏しく各自の信する錢譜に從て其種類を蒐集するに止り鑄地年代の互に相違するも敢て意とせざりしものゝ如し偶ま見聞弘く心に安せざる者は相反する兩者を列して之を單一と見做すに至る誠に猿江錢の如きを見よ柳齋と蒹齋の見る所各々相異なり其是非を判そべからざるに依て朽木彩雲堂は二者を蒐集して均しく猿江錢とせり乃ち彩雲堂藏泉目錄黑塗箱第一重及第二重に猿江錢柳齋二品蒹齋二品と記載し置かる又同第三重ゐも同樣なるが是は宗野宗明の集めたる寛永といへば蒹齋の猿江とかせしものも久しき傳說に據りたるならん柳齋の猿江たるを知りしは板兒錄に

元文二年己中春江戶サルエ、云所ニテ去辰年ヨリ寛永新錢ヲ鑄堅道律師ニ二文貰フ

寛永諸錢譜の材料は之に依て其一般を推想すへく當時考究の難苑ら蒼茫たる碧海に向て一綸を投するものに似たり狹原錢に龜戶の二字を增加せしを猿江錢と同樣唯た一片の材料として之を後世へ與へたるに過きず故に貞幹の意ゝ兩所鑄造の事を堅く斷言するものにわらす泉貨鑑に於る猿江錢の如く傳說の撞突するときは合して之を單一に見做すと同しからんのみ又貞幹が自記せる錢譜には記州中島を左の如く筆せり

元文元年紀伊國字津及中島所鑄而二所所鑄今混不可知並擧俟後考

字津及中島兩地の鑄る所混交して知る可らずと言はゝ恰も狹原錢と同一の結果にして早くも狹原錢の章に於て同文体に說明さるべきを淡然語去て水の如きは彼か瀟灑たる特性にして兩地鑄造に深き熱心を持たざりしこと亦明かならん故に今進んて之を兩地の鑄造とし其區別をなさんとするは抑も輕卒を嫌はずと謂んか理事の原案にも此錢の鑄造年月及名稱に付ては大に說ありと余は其說の如何なるものたるを知らずと雖も議題外として後日に讓るとある上ハ此兩錢識別に大ゐる關係を持たずして他に逃る所ゐるものか予は兩氏か藤說を信して此兩錢を識別せられんとするに當り其藤譜の記載せる鑄造年月及名稱に就て大に說ありとは少しく解し難きことなりと思へり草間直方の三貨圖彙は本朝錢志及錢彙等を參酌して記されたるものゐるか狹原錢の部ハ頗る精密なる調查を經たるかして左の通あり

元祿十三年庚辰三月京都七條川原ニテ鑄之

狹原錢ト稱シ御勘定奉行狹原近江守重秀差圖

元祿十三年庚辰三月六日鑄之錢文長崎屋不舊ト云京都奉兩行ヨリ撿使御出改有之同七日ヨリ通用錢鑄出ス

錢頭　長兵衛

半七郎

古老ノ說ニ此錢後ニハ段々小サク成甚タ評判悪ク候由此錢ヲ鑄終リテ直ニ大錢ヲ鑄候由大錢停止ノ後此錢座潰レ申候ヨシ

ろれ狹原錢の事を記せし書籍多しと雖も其精核妥當ゐるに於ては三貨圖彙を措て他に過くるものゐらざるなり之に依て其鑄造年代も元祿十三と確定し得へく其鑄造地も京都一ヶ所にして寶永通寶の大錢を鑄造するまで七ヶ年間狹原錢を作る錢座は繼續せられたりしなり故を以て其形体も一ならず漸次縮小せしこと三貨圖彙に述へて遺憾

あし之を要するに貞幹の元祿十二年とし江戸の二文字を加へたりしは更に古說の出所無く他に引証の正しきものを得ず

荻原近江守重秀は幕府の財政を紊乱し私曲を其間に逞ふせし一の奸吏にして彼は再々貨幣の改鑄を企て其都度ろの品位を下落せしめたり荻原錢の名は重秀の指揮に依て鑄られしより出でたる名にして其開鑄は重秀が實永銀を鑄るの前四年に起り其繼續は彼が二寶銀を鑄るの後一年に及へり蓋し重秀が幕府經濟の救策として貨幣改鑄の說を出せしは元祿年間にして其原質を大に劣惡ならしめたり荻原錢も又彼が配慮に依て成る其品質も共に劣惡ならさらんとするも理に於て得へからさるなりそれ重秀は別に地金を出さすして貨幣の額を增加せんとす其手段として用ひたるは金に和するに銀銅を以てし銀に和するに銅錫を以てす然らは彼が手配に依て作られたる錢貨は豈んぞ純然たる黃銅を以てせんや必す純銅に和するに鉛錫を多分にし其品質を下落せしめたり次第に錫鉛を混和し淡白色の小錢を現出せしを寬永以來錢貨を鑄ること多々なりと雖も未だ荻原錢に比すへき劣惡なるもの無し殊に其接近時に於ける元祿四年京都同十年龜井戶二錢の如きも猶重厚にして精良の錢にあらずや荻原錢の遠き元祿時代に出で殆と元文期の寬永に比しき劣惡なるも畢竟彼れ重秀が幕府の財界を紊乱せしおと幾許なるや思出るも亦怖ろしけれ

予は荻原錢に對しては前項縷述の理由を以て全然京都に於て作られたるものと見做し其末流の次策に蹉惡に襲せしは重秀が奸惡の跡歷然見るへく依て以て荻原錢と名稱されたるの所以明なれば或一部の錢譜を信して之を七條龜井戶の兩地に區別せられんとするは甚だ早計に失せるならんと思ふ

正誤を記し併て白す

第七号三丁下欄第廿一行蓋は蓋第四丁下欄第二行反は存同第六行歲の下次を加ふ第八号二丁下欄三行体の下裁の字を加ふ同第千八行年二は二年同三丁下欄三行屬は屋同四行文は大同十行こはくの誤なり

余が不舊筆諸錢に關する原稿の第一は二百餘行の長文にてありしを數回に分たれ悉く載せられしは謝するに堪たり乃ち荻原錢の部分終り今や享保七條以下の諸錢に就きて稿を續けんとせしに無端東京古泉會雜誌の編輯多忙を極め或る所あれは一先つ本編を中止なし重て諸君の淸聽を汚すの期あらんことを約す因に云ふ本編終始余が一己の胸中より（個人的感情に非ず）述出したことゆゑ新撰寬永錢譜又ハ大會の錯雜せる談話等に比較され其異同を論し玉ふな

（完）

理事云　御多忙のところ何とも御氣の毒にはあれども不舊筆諸錢に關する御明論希くは完結せられんことを望む理事等も刮目して拜見せん

總論　（三）　進而堂主人

二、上略蓋し一寶銀より三寶銀の世に顯れ出し時までは唯だ銀貨に驚愕して錢貨には單に荻原錢の名を附し去りたるものならんも四寶銀の時に至りては銀貨と等しく錢貨も著しく薄小粗惡となりしに始めて心づき銀貨の如く四室錢〳〵といひのゝしり渡り遂に其名の殘りたるものやにあらん、されば今日荻原錢と總稱する所の錢を細別し見れば一寶、二寶、三寶、の錢あるのみなるべし、これに四寶錢の一品を加へて始めて完全の荻原錢といふべきものあり、しかあれば四室錢といへる所の錢は四寶銀の世に顯れたる同時にいでし荻原錢の一種なりと知るべし

九、寬永錢の錢質に之呂宛といへるものあり、これ銅分を減じて錫、鉛などの量を增したるものかるべければ所謂白銅錢なり中外錢史に

志呂美、良安三才圖會曰有似眞鍮而略白色者、俗呼名志呂美造法銅一斤、鉛五分之一、川金二分半之一、以鍛之、又法銅一斤、鉛五分之一、山金一分半之一

按寬永錢中元文四年於江戶深川平井新田所鑄者稱之志呂兒錢蓋金質與次下所載志呂兒者異矣、恐是志呂美之誤而其實必當此金也又職人歌合錢磨之圖中書其語曰しろみの御錢はときにくゝて按金質堅硬而難研磨之謂也蓋是白銅中之一品耳又所謂山金、川金未弁何物本書不釋名義今奈何之

志呂兒　圖會曰白鑞俗云志呂兒、錫上品名白蠟者與此同名異品也、造法鉛一斤、錫十兩相和鍊成纔銅鐵之耳鐺鍋鍋釜之漏矢或注藥鑵裏否則其湯銅臭不可吃

とあるを見れば忠友氏のいはれし如く志呂兒は志呂美の誤りかるべし、されど志呂美ある言葉は「わかみ」などの言葉に對したるものゆえ、いはゆる帶白色といへるの意なり故に志呂美錢と稱ふるよりは寧ろ白銅錢といふこそよからめ

七の卷、三、寬永錢の背よ一より十六に至るの數字あるものあり、これを番錢といふ藤譜に「錢工戲鑄者」とあり今面背の文字を熟視するに大に其書体を異にしあれば全く戲鑄の錢なることは疑ひなし、されど何にゆゑに其數字を置きたるものかるが詳かならされども南朱の諸錢を味ひたる人の眼より見れば、いかにも意味ありげに見えれば或は嘉定の祇儀錢なりと或は淳熙錢の十六より出でたるものなりと或は元和錢に關係あるへしなどゝ種々說あれども錢座の錢工おのが斯く深き考を持つべきものにしあらねば唯だ偶然に十六にて止めたるといふまでのみとにてあるへし、もしや其數をして三十までもあらしめしおらんには、さまで異論もいでざらまじに慥とい十六にて止めたればこそ說もいでたるものならめ

揭模叢談

○二水永大通は銅色帶白にして存在少なし
○同背星文の種錢はいと稀なるものなり
○同長字は二水永中にて年代新らしきものゝやうなれども存在至て少なし
○志頭摩手濶縁は形ち大にして美なり斯くの如き志頭手は容易に得へからさるものあり
○未詳錢鵜柱永種錢は黃銅にして存在少なし
○同狹寬は寬足短縮なしたるものにて存在多からす
○同五大点も存在稀にして或は四大点ともいふ
○沓谷錢は存在多きものにて此錢は輪磨りなり
○十字無輪印種錢は存在多からす、同白銅錢は少なし
○背狹小字種錢は二種ともに存在いと稀なるものあり
○元文飯田の錫種錢ハ至て少なし
○狹穿狹元の種錢も存在少なしされど狹穿の種類中にてハ常に見る所のものあり
○明和龜井戶大形種錢は存在少きものなり
○背ト字廣穿種錢は東都に在りては存在少なきものにはあらす
○印記銀錢は製作精巧にして存在少なし
○金、銀の祝賀錢は稀なるものにて楕圓うしの金錢は重量一匁五分四厘、銀錢は九分五厘あり寬屋うしの金錢は一匁二分五厘、銀錢は九分六厘あり
○淺草番錢は未た其實品を見ざるか故によしやあしや詳かならす
○駒曳寬永錢は文字判明せざれは何れの錢あるや詳かならす
○背盛字錢錢は存在少きものにあらす
○背盛字無背種錢は未だ一品を見るのみ
○未詳當四錢狹字種錢は存在少なく未だ其子錢を見す
○同背ノ肥字種錢は瘦ノ字種錢より少なし此錢は近時會津潛の鑄る所なりといふ說いでたり
○寬永六錢は通用錢なりといふ、されど此錢は未だ實品を見ざれは斯の如きものあるものにやなきものにや、しらすあるなり、考泉堂うしも一品曾藏せらるゝ

正誤

報告第八號に題目錢とあるは念佛錢の誤りあり

謹告

本會へ出品の揭模は五十葉にして雅號の印章を要す

揭模

樹谷蓁

芝林塔

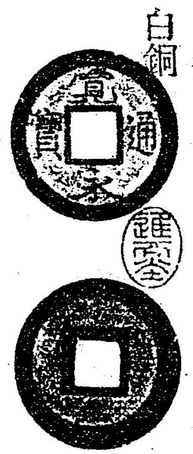
方圓堂

松堂

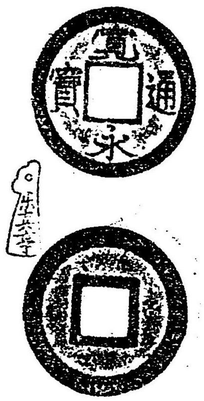
苔林塔

泉亭

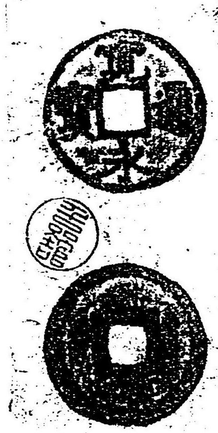
泉在園


白銅

千品館

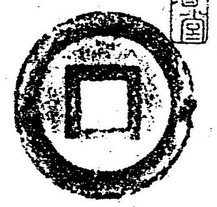


槃眞亭



遲雨堂

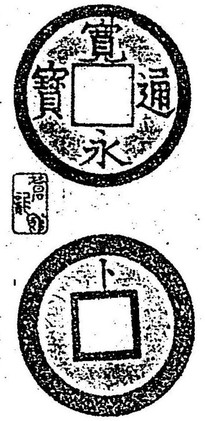
錫

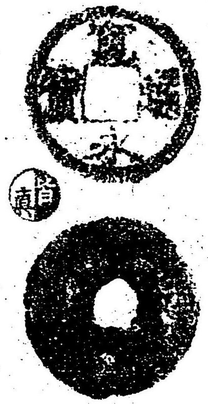


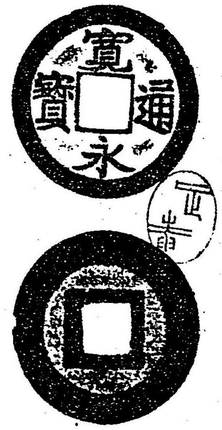
養眞亭

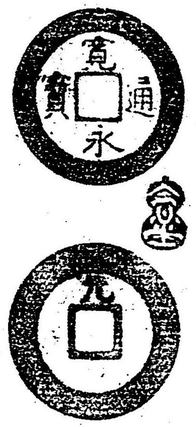
同

振海堂









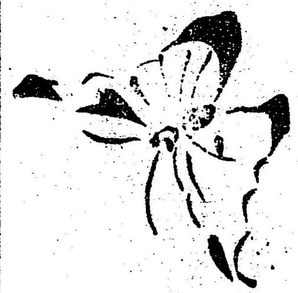
黔鮫當

是蕃

楓泉居

蒼龍館

好泉堂



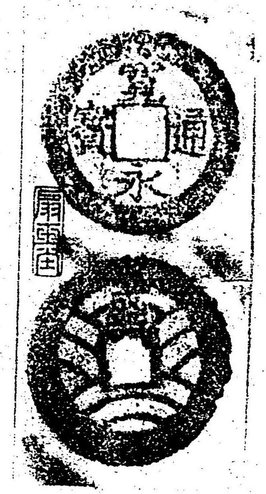
寶泉舍

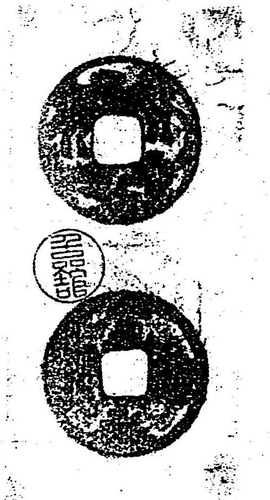
局

萬屋

局

槌圀





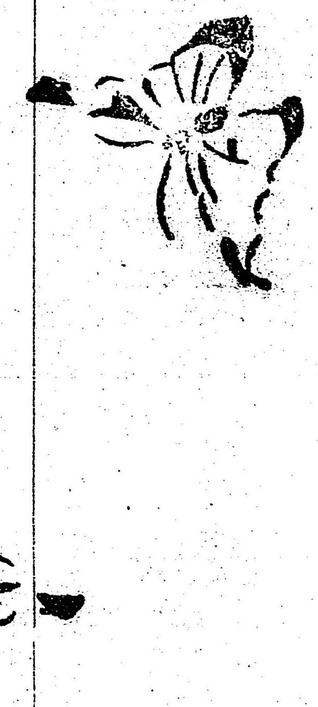
千品館

考泉尚

扇玉堂

青倉尚

清泉尚



考古堂

寛永錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智織の發達を圖る

一本會の寛永錢に關する總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むへし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載ゑ本會事務所に寄送せらるべし

一會員にしで出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢○模一品はつき五十葉つゝ本會事務所に○送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進而堂　榎本文四郎

花林塔　三上母子太郎

贊成者（イロハ順）

鐵柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一郎

春布庵　中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

○會員諸君の便利の爲め主なる古泉寶買所を左に掲ぐ

東京神田區田代町十番地

鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地

龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地

横井好泉堂

京都三條通獄屋町西入辨慶石町

中島泉貨堂

横濱市扇町二丁目四十七番地

村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地

村上慈太郎

（イロハ順）

明治三十年八月十日發行

寛永錢研究會報告

第十號

目錄

○常會の記事
○泉話
中川君の不舊筆と稱する寛永錢に付てといふ御めい論に答る　三上香哉
　　榎本文城
○楊摸談
○楊摸
寛永水戸背昴三錢　實泉舍
未詳錢二水永背星錢　樂異亭
同上二水永長字　方圓堂
志頭摩太字及細字錢　進而堂
寛永松本種及背廣郭種錢　灣泉堂
未詳錢長嘯子　櫪園
同上小字肥永　杉廼家
同上縮通　松堂
同上進点永　好泉堂
同上細縁接郭　瓢鮎堂
享保十万坪種錢　万屋
平井新田大字種錢　養異亭
中島廣穿種錢　足蒼
同上小形種錢　泉在園
元文飯田細字種錢　蒼龍舘
元文押上種錢　振海堂
狹穿大元　青貨堂
明和水戸背久二種錢　秋風園
明和龜井戸彫種錢　寶丹樓
安政馬喰町種錢　千品舘
當四背盛字種錢　考古堂
未詳當四濶縁小字種錢　清泉堂
同上鐵錢　花林堂
同上肥字種錢　扇玉堂
正德御用錢　樹谷巷

（非賣品）

報告

入會者　元室堂　大坂　原田寅之助
　　鷗永堂　横濱　バタウス

常會

○八月五日　本會事務所に於て開會す、本日は炎暑にも係はらず瓢鮎堂、樹谷巷、考古堂、秋風園、進而堂の諸氏出席せられ夜にいり足巷、花林塔の二氏來會せられて種々の泉話ありたり

泉話

○樹谷巷、瓢鮎堂曰　いづれ秋期の大會には逃る考ひなれども寛永錢の銅色に付は豫め一定なし置きては如何と
○進而堂曰　茲に陳列なし置きたる如く志頭摩の書なりといふ錢には二種ありて命名に苦しめども諸君の考ひは如何と
○樹谷巷曰　やはり志頭摩太字、同細字と名つくるころ了解し易からめと
○報告第三號に掲けある如く考泉堂氏よりイ字錢及ノ字錢の事實を森氏にとひよとのことゆゑ去る日書を致せしところ、ねもころなる書を贈られたりわりかたく其厚意を謝す

拜啓益御淸寧奉賀上候然は寛永四當背ノ字錢會津濱の鑄錢に可有之歟と御尋問被成下候處小生儀幼年より古錢の物すき致居候に付少しく注意も致居然るに文久元酉年より同二亥年迄の內と氣臆致候處本濱におゐて寛永銑錢四當背ァ字錢江戸深川會津屋敷內にて鑄造相成候趣承り且節江戸深川屋敷鑄錢掛りへ依頼硬錢二三品懇望致候處銅種錢三品贈惠に相成候處戊辰戰爭の際家財古錢類等悉皆相失候得共右三品は幸ひに相殘り居千今所持致居候に付右三品の揚摸御參考のため差上申候但背文字はアイヅのアの字と承り居候處文字錢の波へ相接し字の頭不顯自然ノの字の樣に相見へ候樣に奉存候

以下畧す

明治三十年七月二十八日　尙文窟　森　惣兵衛

○中川君の不黄筆と稱する寛永錢に就てといふ御めい論に荅る

理事　花林塔　三上香哉
同　進而堂　榎本文城

中川近禮君より荻原錢のことにつきては再考せよとのことゆゑ仰に從ひ再考なしたれども、いかにせん再考すればするほどなほ服從なし難きことのみ發見せられて、いかにも默しえねば、やむなく强情のやうなれども聯か茲に述ることゝはなしぬ

君の御論は甚だ長かりしも、これを約言すれば「一部の寛永錢譜を信して荻原錢を龜井戸及七條のものとなすは早計に失したることなり余は三貨圖彙の一部を信して七條のものとなす」といふに過ぎず、されば其順次に反論を試みつゝ理事等の意見をも述ぶべし

中川君は寛永錢譜を評論して寶丹樓愛藏の錢譜より眞跡にして通常寛政七年とあるべきを寛政四年とあれば最も古く寛永錢に對する觀念を表白せるかと思ふものは、僅かに此一卷のみと大に賞せられたり、されど總て著書といへるものは理事等の茲に述るまでもなく修正增補するに從て完全するものなれば寛故四年の草稿よりは寛政七年のもの稍ゃ完備なしたるものあるや明かなり故に理事等は寛政四年のものをとらずして三十合議のうへ修正增補なしたりといふ寛政七年のものをとりたる以謂なり

中川君の眞幹自著の錢譜といへるはいはゆる通用錢譜の原本にして其凡例にも「此眞幹が擧の如きもはやく五十年をへにたれば夫より後の諸家の確論おもしろき詳說ども、いともさはに悉く修補せまはしげれども今は原本のまゝにす」とあり、されば寛政四年の稿本といへるものはいかなるものなるか容易に察するを得べし

しかあるを中川君は其錢譜をとりて「眞幹の眞筆と認る錢譜には、平安七條及江戸、の下二文字を省入すべき白圈を存して龜戸の二字を記さず然るに芳川稻垣等の姓名を揚る場合に至りては卒かに龜戸の二字を顯出したり大に怪む可き次第にあらすや」と論せられたるも決して怪しきことにはあらさるなり彼の眞幹の自著といへる錢譜にも平安七條及江戸　所鑄と記しあるにあらずや、かく記されたるからには眞幹も寛政四年の春三月既に京の七條と江戸二ヶ所の錢ありとは知るも江戸の何所なるやを其當時に在りては詳かになしえざりしものならん、されば餘地をのこして事實の發見を待ちしものなるべし、しかして寛政七年に至り始めて龜戸なることを確かめしものにやあらん、

さるを中川君は「余は考一考して彼が意中を推せり蓋し荻原錢を京都に鑄られし錢とするも亦龜戸に於ても鑄たりといふ傳說を聞き之を錢譜に載せんとするも如何にせん彼が胸裡に於て大に不穩なるものあるあり云々」といはれたり考一考も亦甚だしき考一考といはざるを得ず、いかにとあれば寛政四年に既に龜戸といふことを知りたるも大に不穩なるものありて龜戸の二文字を加へざるものとせば寛政七年の改正に加ふべき筈なし正に加へたるを見れば、とにかく寛政七年に至り京都七條及江戸龜戸二ヶ所のものなることは判明なしたるものなるべし、斯く說き來れば或は三十合議の錢譜といふは眞幹のあづかり知らざる所にして芳川稻垣の二士壇まゝに稿せしものならんと又想像を下すものもあらんかなれども愁堂氏所藏の錢譜の序にも芳川維堅が眞幹及尙友の愛錢を借り得て揚摸せしよし見えたり芳川氏とても人の名を記するに腹稿をも語らず又編成の草稿をも見せずといふは人情上決してあるまじきの理なり、されば眞幹自ら筆を下さゞ

るも其稿に對して同意なりしことは明かなり故に貞幹も寛政七年に至りては京都七條及江戸龜戸二ヶ所のものなることは確認せしものなるべし、さるを中川君は其文章上にては荻原錢を兩地に區別する能はずといはれたり、されど寛政四年の稿本にも、「平安七條及江戸　所鑄」とあるにあらすや、其の及といふ文字のあるからにはこれを平安七條と江戸の二ヶ所と解釋せずして何にと解釋すべきや、いかなる人と雖も京都と江戸の二ヶ所といふことは容易に了解することを得ん、君の光線屈折体はいかに變形せしや誠に氣の毒といふの外なし

かつ中川君は紀州中島の條を引て「元文元年紀伊國宇津及中島所鑄而二所所鑄今混不可知並擧俟後考。宇津及中嶋両地の鑄る所混交して知る可らずと言はゝ恰も荻原錢と同一の結果にして早くも荻原錢の章に於て同文体に說明さるべきを淡然語去て水の如きは云々」と說かれたれども宇津及中島の錢は貞幹のいはれし如く數種の錢あれば其當時に在りては判別おし難かりしものならん、されど荻原錢は二種のみにして其一種さへ定まれば他の一種は自らえ知るものなれば、さのみ「混不可知」と記すはどのことにもあらざれば記せざるまでのことならん故にこれを以て二地のものにわらずとおす引證には誠に價値なきものとす、否引證にはならざるものなり

かつ又中川君は「江戸の二字を加へたりしは更に古說の出所無く他に引證の正しきものを得ず」と述べられたれども、これは今日窺ひ知ることを得ざるまでのことにて藤譜は一も證跡の出所を記さず、さりとて又決して想像のみにもわらざるべし必す江戸と記するからには據り所ありたるものならん、もしや證跡の出所明かならざるとて採らずとせば君の賞揚する三貨圖彙とても出所を記さずたゝ明にせしは古老の說なるにとゝまる、されば君は三貨圖彙も採るに足らずといふに過ぎず理事等は決して斯の如き意見はもたざるあり、藤譜も三貨圖彙も共に證本となすに足るべきものなりとおす

又中川君は日本錢志を証として荻原錢は京都七條のものありとせり其日本錢志に「元祿己卯年四月京都七條河原にて鑄る、妹尾氏說には十三年と有り、筆者長崎屋不舊一說に享保初年と有之可考此錢の銅質大錢と全く同し疑くは大錢停止の後鑄る所なるべし」とあるは荻原錢のことにはあらで今日人の享保七條錢となす所のものを說明おしたるものなり見よ藤譜に「享保十一年至　年（或曰元祿十二年所鑄疑非）平安七條所鑄」とあり其藤譜の或曰の說は日本錢誌のとる所にして日本錢誌の一說は藤譜のとる所あり、されば荻原錢を說明なしたるものにはあらで今日人の享保七條錢となすものを說明おしたるものあるや明かなり如斯引証の誤りあるが故に中川君の筆になりたるものにはあらざるべしと前に述べ置きたる次弟なり何に故にかゝる誤りを來したるものなるや恐らくは強て引証を求めたるの結果か否日本錢志の誤りならん此誤

りを知りて採りたるか知らずして採りたるか、そはとにかく中川君も此引証には重きを置かず唯だ重きを置くものは三貨圖彙の一あるのみ

三貨圖彙に「元祿十三年庚辰三月京都七條河原ニテ鑄之荻原錢ト稱ス御勘定奉行荻原近江守重秀差圖云々」とあるも同しく出所の不明なる者にして唯だ京都荻原錢のことのみを說きたるものなり、さるを中川君は大に之を誤信して「或る一部の錢譜を信じて之を七條龜井戸の両地に區別せられんとするは甚だ早計に失せるあらん」と痛論せられたり、されど君にも一部の三貨圖彙を信して京都の錢となす理事等も藤譜を信して七條及龜井戸二ヶ所の錢となす、いづれか異なる所ぞある唯だ異なる所は各々信する所の書類の異なるのみ

理事等が鑄造年月及名稱に付ては大に說ありと述べたるを中川君は両錢を區別せらんとするに當り說ありとのみにては少しく解し難きことなりと難せられたれども四月の大會にては唯だ單に何れを龜井戸荻原錢何れを京都荻原錢となすべきものなるやといふに在れば鑄造年月は直接の關係なきゆゑ後日に讓ると述べ置きたるものにて藤譜を信じたる以上は、さまで必要もなきことならん今茲に西の京より東に歸り來る人ありと假定せよ其人京と名古屋にて形ちの似よりたる磁器を家づとにせんとて買求めたれども何れが京の者ありしや名古屋の者ありしやをうち忘れたりとて其まゝになし置きたるを後に至り或人之を見て此器こう土質といひ染付といひ京の者に相違なければ他の一ッは必す名古屋のものならんといひしと同し理なれば先つ第一に兩地の荻原錢を區別して、しかして後ち鑄造年月に付て定めんと思ひ居りたるものなれどしかありては中川君も物足らぬ心地そせらるべければ次に進んで鑄造年月に說き及さん

元祿龜井戸の錢座は藤譜に「元祿四年（一說元祿十年至寶永元年）江戸龜戸所鑄」とあれども泉貨鑑には「元祿十年丁丑年より寶永元甲申年迄武州龜井戸村に於てこれを鑄」とあり、これ藤譜の一說を採りたるものなり又元祿十年七月二十六日勘定方への令に「新錢增遂吟味御藏へ詰立指引の義荻原近江守へ可申聞事」とあれば一說の元祿十年といふの說却て事實なるべし、されど寶永元年といふは正德元年の誤りならん、そはいかにといふに荻原彦次郎重秀は元祿八年に金銀貨を改鑄して以來幕府の採用なかりしにも係らず再三金銀貨を改鑄せしのみならず粗惡の錢貨をも鑄造なしたり斯く增々利慾を壇にして又正德元年に四寶銀を鑄造し尙は一層粗惡の錢貨をも鑄て遂に正德二年其職を免せられしものなれば必す正德元年まで繼續せしものなるや更に疑ふ所なし、しかして此錢座に於てはいかなる錢を鑄たるものなるやといふに今日世に存する所の數種の藤譜によれば或は通頭の歷中せられたるもの或は沓谷錢となすもの或は今日まで足洗錢をおしたる所のものを當てゝ一定せず、泉貨鑑には新撰寛

永錢譜に撰みたるものを載せり、されど夫等の諸錢は今日人の古寛永と稱するもの〳〵錢風ありて寛文以後の錢とは見えず、しかのみならず狹原の改鑄說いで〳〵既に古金銀貨の吹替後狹原の差圖によりて、かゝる厚重の錢を鑄るべき理なければ必ずや誤りにして今日狹原錢と稱するもの〳〵背廣郭の種類と四寶錢といへる錢の一種なるべしかくありてこそ狹原錢の名稱も實あるものといふべけれ故に元祿十年より正德元年に至る龜井戶の錢座に於ては狹原錢を鑄たるものとなす、されば之を龜井戶狹原錢と命名す

元祿京都の錢座は藤譜によれば元錄十二年四月始めて開設せられたるものなり、さるを泉貨鑑には元祿四年既に京都に錢座ありたると說けり、これ恐くは元祿年間に龜井戶及京都に錢座ありしと聞きて、しかして後ち龜井戶の錢座は元祿十年なることを確めしかば貞幹の元祿四年龜井戶といふは誤にして却て京都ならんと深く想像を下して誤りを來たしたるものにやあらん今藤譜を熟讀含味するに貞幹は元祿四年（一說十年）龜井戶村に鑄錢ありたると知りしも如何なる錢にてありしや明かならざりしかば疑ひを存しつゝ一條を置きたるものならん、しかある後又元祿十二年に龜井戶にも七條にも鑄錢ありたると知りしも、いづれが龜井戶の錢なるや其當時に在りては識別なし難かりしものにやありけん「元祿十二年平安七條及江戶龜井戶所鑄」と混したるまゝになし置き劃の元祿四年の條も亦其まゝにて後の考を俟ちつゝありたるものならん、されどもよく區別し得ずして世に移りゆき遂に龜井戶には元祿年間に二錢座ありたる者の如く人をして誤らしめたり若しや其當時より於て二錢を區別するをえしからんには、かゝることはなかりしからんにえ能はざりしかば、かくは誤りを生したり、されど元祿十二年四月に始めて鑄たりといふ七條の錢は貞幹等のいふ如く決して狹原錢にはあらざるなり今日人の享保七條錢とあす所のものこそ其錢なるべし今藤譜の享保七條錢の條を見るに「享保十一年至　年（或曰元祿十二年所鑄疑非）平安七條所鑄」とあり、されど日本錢誌にも「署す」とあれば藤譜の或曰の說却て事實なりとす、斯く藤譜及泉貨鑑などが享保となせしは日本錢志の一說と同說にして銅質書体などの當十錢に酷肖せるより大錢停止の後ち鑄る所なるべしと想像せしものにて銀座の役人谷家の舊記を見るも享保年間京都に錢座なし、されば今日享保七條錢とあす所のものゝ享保十一年のものにはあらずして元祿十二年四月京都七條の初鑄錢なりとす

かく元祿十二年四月より同十三年三月に至る滿一ヶ年の間、三島吉之丞外四人の者鑄錢かしつゝありしに同三月狹原重秀より命ありて鑄錢改まり以來彼の狹原錢てふものゝ一種と四寶錢の一種を鑄るに至りしものなるべければ京都狹原錢の鑄造年月は元祿十三年三月なりといふの說事實なるべし三貨圖彙にも「署す」とあれは京都狹原錢は龜井戶狹原錢の如く元祿十三年三月より正德年間まで

鑄られたるものなるべし

されば龜井戶狹原錢は元祿十年（狹原重秀の金銀貨を改鑄せし後ち二年に當る）より正德元年に至るの間鑄造せられたるものにして、京都狹原錢は元祿十三年三月（龜井戶狹原錢を鑄はじめたる後ち三年）より同しく正德元年に至るの間鑄造せられたるものと知るべし

ときてこゝにいたるも未だ全く論旨の盡きたるにあらずされば十分に了解し難し故に後日錢圖を添て世に公にすることあるべし　（完）

今回會員今井麻須美うしより旭堂のことにつき申こされたれば左に其の大畧をかゝぐる

旭堂は長野縣上水內郡安茂里村朝日山城址の內に在る堂宇なり云々

會員安定部楯うしより元和二年丙辰五月十一日發布せられたる銅錢の制令なりとて寄贈せられたれば原文のまゝ左にかゝくる

一大かけ錢　一われ錢　一形なし錢
一ころ錢　一新悪錢　一なまり錢

右六錢之外御藏へも納候間不可撰之金子一步に一貫文の寶買たるべし若彼六錢之外撰之者再押而つこふもの有之者〇明之上其面に火印を押べきもの也仍所定如件

元和二年五月十一日

楊摸叢談

寶泉舍より出品せられたる報告第九號の淺草雷錢は其後實物に付て視るに確かなる十か或は七などの類を彫り改めたるやふなれば寶泉舍に問ふに寶泉舍もしか答たりこもいふ

〇寛永水戶錢の昴三は存在稀なるものにて或は之を狹三

〇未詳錢二水永背星は存在少きものなり何に依に背に一の圓点を置きたるものなるか詳かならざれども恐らくは支那諸錢の背に往々見る所の月星の星をとりたるものにやあらん

〇同上長字は二水永中の末のもの〳〵やうなれとも存在は稀なるものなり

〇志頭摩太字及細字は存在稀なるものなり

〇寛永松本種錢及背廣郭種錢も存生少なきものなり近時

〇寛永十四年の鑄錢なりといふ說いでたり

〇未詳錢長嘯子は羽柴長嘯子勝俊の書す所るなりといふ

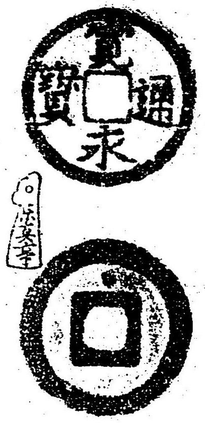
存在至て少なし
○同上小字肥永は存在少かし
○同上縮通種錢は至て稀なるものなり松堂うしは之を小通と命名するよし
○同上進点永も稀なるものにして或は之を三小点ともいふ、同上細縁接郭は少なきものにあらず
○享保十万坪種錢は少なし
○元文平井新田の大字錢は未だ其子錢を見す（泉在園うし其子錢を藏するよし、されど未だ實物を見ず）存在いと稀なるものにして今見る所僅かに六品にすぎず人之を「しろみ」錢といふ
○中島廣穿小形種錢はいと稀なるものにして今見る所僅かに三四品に過ぎず尚友は之を濶手狹小寛内剔と命せり
○同上廣穿種錢は多きものにあらす
○元文飯田細字種錢及押上種錢も多きものにあらず
○狹穿大元の種錢も少なし
○明和水戸背久二種錢は少なきものにあらず何故に背に久二の二字を置きたるか恐らくは久慈の畧ならん
○明和亀井戸錢は揭摸にては影種錢のやうに見ゆる
○安政馬喰町種錢は存在多し
○萬延盛岡背盛字種錢も多きものにあらず
○未詳當四錢濶縁小字種錢は少なきものにあらず同鉄錢は却て存在小なし
○同上肥字種錢も少なきものにあらず

○正徳御用錢は御用錢中にては多きものなり一説に深川十万坪に於て鑄ると

正	誤
報告第九號の二葉上欄十七行下落せしめたるの下に「又疑ふべきにあらず宜なる哉荻原錢の錢質粗惡にして」の文字を加入す	

轉居

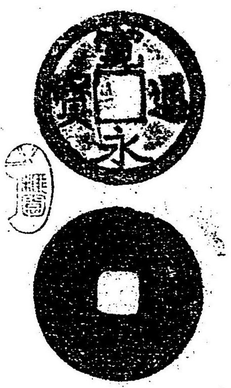
會員龜田一怒氏は都合により左の地に轉居せ
下谷區坂本町二丁目二十九番地

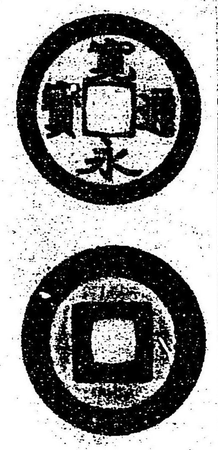


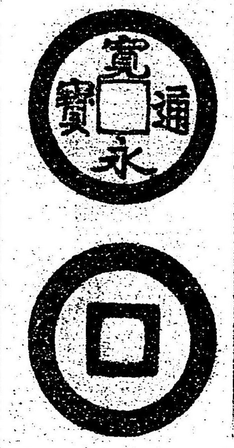
揭摸

會泉舍

衆眞亭



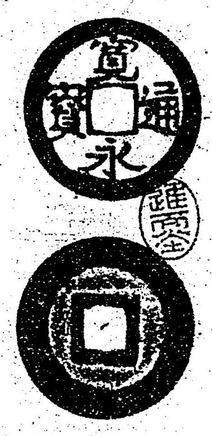


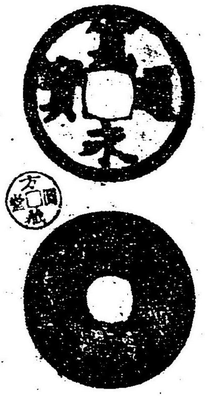


考泉尚

局

樞

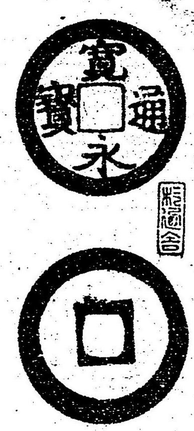




方圓堂

連而堂

局

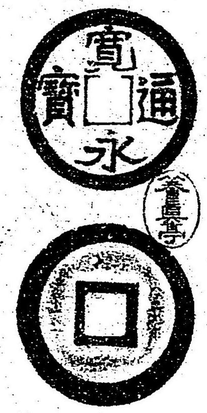


杭迺家

杉堂

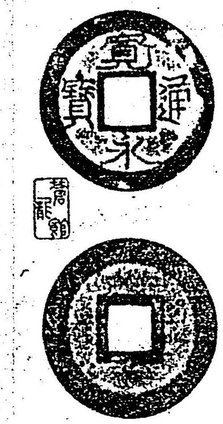
好泉堂

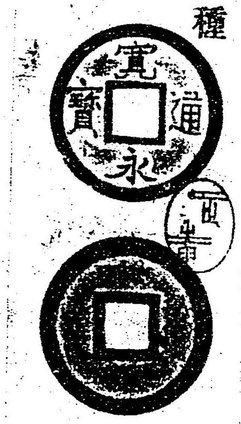
熙鮫尚



乃屋

養真亭





種

是菴

泉在園

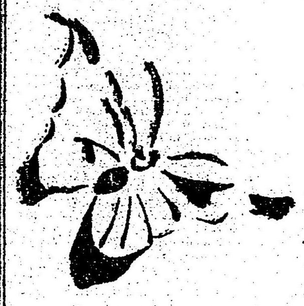
蒼龍館

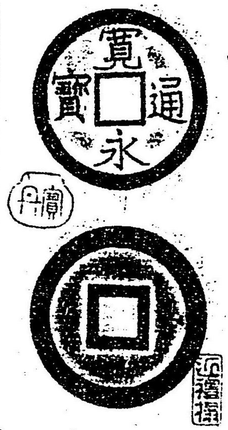
種

振海堂

香貨崗

煉風園





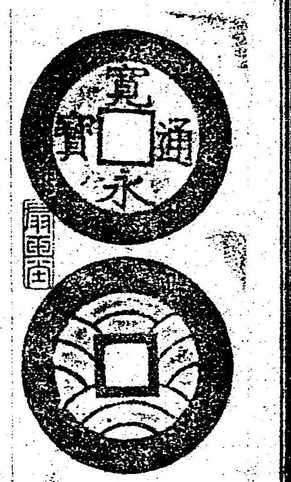
考古堂

清泉尚武

北林堂藏

寶鏡

寶月樓藏



扇玉堂

樹谷葬

寛永錢研究會々則（改正）

一本會は寛永錢研究會と名稱し寛永錢に關する一切の事項を研究するを以て目的とす

一本會は毎月五日本會事務所に於て開會す

一本會は毎月一會寛永錢研究會報告を發行して各會員に頒附す

一本會は春秋二期に大會を開き寛永錢に關する智織の發達を圖る

一本會の寛永錢に關する總ての質問に應し其事項は報告に掲載す

一本會に入會せんとする人は住所、姓名、雅號、を詳記し本會事務所に申込るべし

一會員は會費として毎會金拾錢（郵券代用不苦）を本會事務所へ納むべし

一會員にてし寛永錢に關する意見を報告せんとするときは文字明瞭に記載し本會事務所に寄送せらるべし

一會員にして出品せんとするときは毎月五日限り寛永錢○樣一品はつき五十葉つゝ本會事務所に〇送せらるべし

一本會事務所は東京市日本橋區濱町二丁目十一番地榎本文四郎方に置く

寛永錢研究會理事

進雨堂　榎本文四郎

花林塔　三上毋子太郎

賛成者（イロハ順）

霞柏居　岡田村雄

考古堂　龜田一郎

春布庵　中川近禮

養眞亭　馬島杏雨

寶丹樓　守田寶丹

〇會員諸君の便利の爲め主なる古泉賣買所を左に掲ぐ

東京神田區田代町十番地　鷲田寶泉舍

東京日本橋區松島町十七番地　龜田石泉亭

東京神田區錦町一丁目五番地　横井好泉堂

京都三條通麩屋町西入辨慶石町　中島泉貨堂

横濱市扇町二丁目四十七番地　村松養明舍

東京京橋區九屋町二番地　村上忠太郎

（イロハ順）

明治三十年九月十日發行

寛永錢研究會報告 第拾一號

目錄

○常會の記事
○大會の議題
○泉話
　鑄造法につきて　秋風園
　書體につきて　泉亭
　安政當四錢に付て　春布老
　同答　理事
○揭撰
　永樂手　養眞堂
　芝種錢　考古堂
　同小樣錢　考泉堂
　未詳錢頭永彫種　柊翠軒
　享保石巻無背錢　松圓堂
　元文寛光寺錢　方屋
　同藤澤替種錢　万足老
　筑逢川錢錢　足振海堂
　兩川錢　振海堂
　元文本井新田縮字錢　秋風園
　一字輪印鐵錢　花林塔
　同後打錢　實泉舍
　延享鳥取種錢　樹谷老
　背千中字種錢　泉在園
　明和長崎種錢　櫂　
　明和龜井戶縮永種錢　蒼龍館
　安政郡代錢種　杉廼家
　背ト字鐵錢　實丹樓
　秋宮及上鳥居印錢　好泉堂
　四當明和龜井戶錢　進面堂
　同千字無背種錢　千品館
　同背ト字鐵錢　清泉堂
　同無背鐵錢　扇玉堂

(非賣品)

報告

入會者　泉園　東京　橘本龜吉

常會

○九月五日本會事務所に於て開會す、本日出席せられし會員は秋風園、花林堂、清泉堂、扇玉堂、足巷、進而堂の六氏にして種々の泉話ありたり、本日は東京古會の定日に相當するとて好泉堂氏は午前に參會せられたり

秋期大會

○本會の秋期大會は來る十一月五日正午時より本會事務所に於て開會す希くハ各員御出席あらんことを

大會の議題

一明曆年間淺草に錢座再興せられたるは事實なりさればいかなる錢を以て明曆淺草錢となすか

二足洗錢座の誤りなるあとは事實なり、されば今日まで足洗錢となしたる者はいづれに加入すべきものあるか

三元祿十四年大坂に錢座ありたるは事實あり、さればいかなる錢を以て元祿大坂錢となすか

大會の出品は左の寬永錢に限る

一明曆淺草錢と認むべき錢の種類

二今日まで足洗錢となしたる錢の種類

三元祿大坂錢と認むべき錢の種類

但來る十月三十日までに揭摸五十葉（雅號の印章ある者）に實品を添て寄贈せられたし、實品の往復郵稅は自辨たるべし、實品を添へざるもの及び期限に後れたるものは一切出品せず

泉話

○秋風園曰　此頃進而堂うしより揭摸の方法を聞きゐて試むるに普通の黒肉を用ゐたるよりは黒色いとれもしろければ余と同じ後進者の爲にいさゝか覺ゑたるまゝを述ぶべし

黒肉の製法　阿列布油二十滴に「りちね」油三滴を和し生姜一片を投じ文火に上せて凡三十分間も放置す而て後冷却を俟ち石油烟（胡麻油烟なれば最上）を混じ糊泥狀となしたるものを「もぐさ」に滴し精密に混和し指頭をもて壓するときは稍ゃ黒色に染むるはどを可とす

揭摸用紙　紙質薄く、密にして、色白き者を可とす

黒奴（たんぱ）の製法　脫脂綿を壓迫して團子ほどに圓め甲斐絹の布片に包み砂金包のやうに糸もて纏絡し恰も玉葱の形の如くにあす

揭摸法　板の上に揭摸用紙一枚を敷き錢を上せ位置を定め豫じめ、水をもて濕したる用紙を正しく其上に置き錫塊或は羅沙の如き布片を當てゝ壓を加へ、乾きの度を見定め黒肉を附着せし黒奴をもて其上を輕く幾回も打つかり、斯く摸寫し終れば紙の間に挾み厭して乾燥せしむ

濕度過くれば鈍染す濕度足らざれば黒色不等あらず又時としては錢圖の周圍に黒暈を生ずることありこれは黒奴の柔軟に失するか、錢の下に彈力質の者あるに起因す、よく〳〵注意すべし

○左に揭くるものは天保錢のことにしあれど、稚錢鑄造の順序は寬永錢も同一なれば。後進泉家の參考にもと轉載せり

大日本貨幣史稚錢鑄造場ノ圖第一註解

百文錢ヲ鑄造スルニ先ッ其基本トナスベキ一枚ノ百文錢ヲ彫刻ス之ヲ母錢ト云フ之ヨリ稚錢ヲ鑄遣スルニ其母錢ノ損害セザランガタメ先ッ銀ヲ以テ數十枚ヲ鑄寫ス之ヲ錫種錢ト云フ此ノ錫種錢ヨリ數千ノ唐銅種錢ヲ鑄造シ之レヲ鑄形トシテ通用百文錢ヲ鑄造ス

○此はど横濱より泉亭氏出京せられて番錢につき一の泉話ありたり

彼の番錢につきては種々の說あれども錢座錢工の戲造なりといふ定說の如し、されども錢座の職工が掛り役人の眼をかすめて鑄造するといふことは得べからざることゝいれもへば錢座の役人も承知し居たるものにはあらざるか、果して承知し居て鑄造なさしめたるものとせば錢座奸工の戲造とはいひ難し、されば錢座外にて鑄造おしたるものとせんか、若し錢座外にて鑄造なしたるものとせば、番無背錢に番錢の銅質と同一のものあるべき筈ゞなし、しかあるに同一のものある〻錢座外にて鑄造おしたるものにあらざるを證するに足れり、されば番錢といへるものは錢座に於て公然鑄造なしたるものにて決して錢工の戲造にはあらざるべし云々

○安政當四錢に銅錢有りと言ふべきか

春布老

本紙第六號に大會記事を揭げられたる中に安政當四錢の事見えたり、余も大會に出席して或人より寄附されしといふ當四錢を示されたるゆゑ通用ならんとは答へたれど安政當四に銅錢ありといふ材料なりとは思はざりき、その故は舊幕時代に何か祝事ありし時地主或は差配等へ錢を下賜せられしことは度々ありて余が家にも慶應年間に下されたる文久錢あり之も未だ通用せず御藏に貯へ置れしもの故甚だ美事なり、されば安政年間地主へ下されたる當四錢あればとて必ず安政年間に鑄たりとは申されぬことゝに斯る折には明和若くは文政に鑄て仕舞ひ置かれしを下げらるゝなれば鑄造の時代を定る標準と爲りかた